港	出 隻數	出 噸數(單位千)	入 隻數	入 噸數(單位千)	合計 隻數	合計 噸數(單位千)
神戸	一四、五七八	一五、八一七	一四、六二六	一五、七八四	二九、二〇四	三一、六〇一
大阪	六九、三八二	二、六一六	六九、三八二	二、六一六	一三八、七六四	五、二三二

隻數が著しく増加する割合に、噸數が左程、上らぬのは大阪で、神戸の平均千百噸許りに對し、四百噸の平均にすら達せぬではないか。即ち神戸に比して三分の一に近いほど、小型の船舶が、大阪に出入しつゝあることを告白する次第なのだ。これに依つて見るも、大阪は內國的の港市で、神戸は對外的の海港であることが、推知し得らるゝと思ふ。

更に轉じて、之を北日本の玄關たる、横濱港に出入する、外國往來の內外國船舶と對比することは、頗る必要で且趣味の多い事柄と思ふとして、さて横濱は、云ふ迄もなく東京の外港たる位置に在るのだが、東京には更に外國往來の船舶が出入せぬに拘らず、南日本の玄關たる神戸は、大阪の外港たる、位置に在り乍ら、大阪にも亦外國往來の、內外國の船舶が出入するのである。故に彼と是を對照せんには、單に神戸と横濱だけの事實を并べるよりも、寧ろ神戸に大阪を加へたものを、横濱に比べる方が、穩當であらうと信ずる。左の表は卽ちこれ。

港	出 隻數	出 噸數(單位千)	入 隻數	入 噸數(單位千)	合計 隻數	合計 噸數(單位千)
南日本の玄關	二、八八九	五、六三〇	二、九二七	五、七三二	五、八一六	一一、三六二
北日本の玄關	一、一〇八	三、四六五	一、一九三	三、五七三	二、三〇一	七、〇三八
較差(多)	一、七八一	二、一六五	一、七三四	二、一五九	三、五一五	四、三二四

成程、平均の噸數に於ては、神戸大阪の二千噸弱に對し、横濱が三千噸餘りだけれど、其隻數に就て云へば、南日本の玄關が、北日本の玄關の二倍半を占め、延いて總體の噸數も、亦十に對する六ほどの割合に當り、著しく優勢なことを示して居るのは、極めて面白い現象。横濱の人々は、神戸を下目(シタメ)に見て居るけれど、此狀勢から推せば、却つて神戸の側が意張つても善い譯ではないか。兎に角、尙幾層の進歩發展を見るに相違なけれど、之を自然の發達に任すよりも、更に種々の方法を用つて、其玄關を繁昌させる樣に努むるのは、素より阪神の人々の任務なので、また實に南日本の人々を擧つて、等しく心掛くべき事柄。

三　神戸港の修築工事

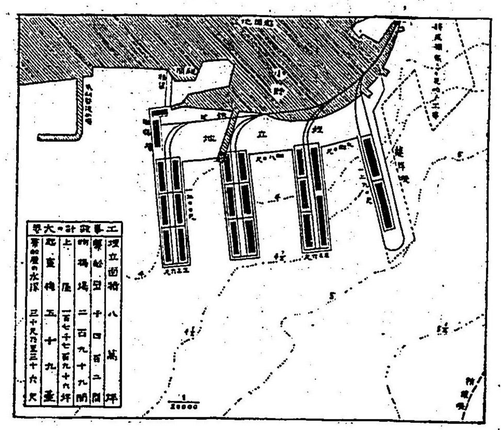
歐米はさて措き、東洋の方面に在つてすら、文明の域に進める人々の手に依つて、經營されて居る港灣は、概して立派なもの。此等の港灣を見て、新興の一等國た

る、我が國に歸り、其玄關たる港灣に入る時の感想は、果して如何。門司は風光の絶住が、短所を紛らせるけれど、神戸に入るに及んでは、最早、左樣は行くまい。

體裁とか、體面とかの問題は、暫く度外視するも、神戸港の施設としては、單に小型の汽船に向つての波止場と、棧橋がある外、起重機や倉庫や、上屋などが、聊か整備せるのみ。現今に於ける文明國の玄關には、何れも立派な繫船壁があり、風浪を防ぐ爲には、完全な防波堤がある。汽車は直に、汽船に接續して、海陸の運輸を連絡する狀況であるに拘らず、神戸に至つては、絶え間もなく、入港する巨船大舶をして、名のみの港内たる、沖合に投錨せしめ、貨客の積卸は、悉く解船の媒介を要すると云ふ始末。詰る所、神戸港は、近海航行の船舶に對する設備こそ、荒々出來て居れ、肝緊な世界横行のそれに對しては、何等の施設もない譯である。斯る港灣に寄泊すれば、徒らに碇繫の時間を長うするの外なきは、勢の止むを得ぬ所から、之を嫌う外國船も、尠からぬ。神戸港の修築は、北日本の玄關たる横濱港の整備に對し、而日本の玄關として、實用上、焦眉の急務。

政府も、神戸港修築の急務は、充分に之を認めて居るので、既に其工事に着手したのは、結構。目下、經營中の工事は、繫船壁の建造が重なものであるが、幸にして神

戸は、自然の地質と海深が、之を建造するに適して居るので、技師を海外に派遣して、種々、研究を重ねた結果、當初の設計を更め、和蘭のロッテルダム、西班牙のバルセロナ等の諸港のそれに倣つて、巨大な鐵筋混凝土函（コンクリート）を使ふことにした。この鐵筋混凝土は、沈下後の重量が一個七千噸もある位だから、之を海上に浮せて、適當な場所に移し、始めて海底に据えるには、勢ひ一種の浮船渠を用意せねばならぬ。其浮船渠は、倫敦のクラーク、エンド、スタンドフキールドが、專賣特許權を有せる設計案を採り、全部、鋼鐵を用ひ、川崎造船所で建造したもの。斯種の浮船渠の製造と使用は、我が國に於ける嚆矢であるのみならず、實に東洋に於ける濫觴とする次第。神戸港の修築が遲れ馳せ乍らも、頗る大仕掛（オホシカケ）に



神戸港の海陸運輸連絡設備工事

經營され掛つて居ることは、如上の一端に依つて察するも明亮、兎にも角にも、結構と云ふべきである。

繫船壁などの工事は、大藏省臨時建築部の手で遣つて居るが、海岸一帶、殆んど皆各種の建物に依つて占められゝ神戸港のことだから、繫船壁の構築には、勢ひ多少の困難を免れぬであらう。併し之が築造の個所たる小野濱の方面は、未だ戸口が稠密でないのは、幸福である。さて又海陸の連絡工事中の、鐵道に關する部面は、鐵道院西部管理局の所轄であるが、此等の工事は、明治三十九年に着手、約二千萬圓の工費を投じ、明治五十年(一、九一七年)までに完成の豫定だそうな。由來、神戸の港は、西方に展開せる大阪港と趣を異にし、北西に山を負ひ、南東に向つて居るので、冬季、疾强な西風を受けぬため、既往の實跡に徵すれば、風雨の障害に由つて、全日、荷役が出來ないのは、一年中、僅に數日あるのみ。故に繫船壁さへ竣工すれば、防波堤は不充分でも、一萬噸内外の船舶は、先づ以て如何なる天候の折たるを問はず、荷役が出來て、從來の面目を一新し得る筈。

若し夫れ、防波堤の築造の如きに至つては、之を完成するに若くはないけれど、勞費を吝んで生半可なものを作るなどは大の禁物。横濱港が理想的の防波堤を

築いたのは、僅に十年前のことであるに、其後、船の型が著しく巨大となつた爲め、斯る船舶からは、出入の邪魔物と見做され、皮肉な外國船長は、之を『横濱の珊瑚礁』と呼ぶ有樣ではないか。一旦築造すれば、取返へしの附かぬものだから、此等は必ずしも既定の設計に據るに及ばぬ。須く愼重に愼重を加へて、百年の計を廻らすべきであらう。

七　關門海峽と關門の兩港

一　乳臭の幼兒か氣鋭の青年か

早鞆瀬戸の急潮は、昔も今も變ることなく、其處に出來ては失せ、失せては出來る渦卷も、亦依然として居るけれど、幾多の遺跡を留むる赤間關と、文字關は全然、往古の面影を失ひ、今は日本の最も樞要な玄關の一として、世界的航路の上に横はれる、立派な商港に變つて居るのである。

神功皇后の三韓征伐の折には、勿論、この海峽を通過せられたので、三韓の貢船も、亦必ずこの海峽の何れかの部分に寄泊したもの。門司の白木崎が、往昔、新羅崎と書かれ、小森入江が、高麗入江の轉化であるなどは、其證據と見て善い。それから、

和氣清麻が宇佐に參詣の時も、菅原道眞が筑紫に左遷の際も、此處を經由せぬ譯には、行かなかつたが、德川時代に移つてから、九州の諸大名の通路と成り、且近畿と北國の間を往來する船舶が盛んに輻湊する樣に成つた爲め、下關の側は、追々戸口の增加を告げ、賴山陽をして『長街如帶蘆波光、面面青山護萬檣』と歌はしむるに至つたのである。而して下關が九州米の取引市場として、重要な位置を占めて居るのは、云ふ迄もない事柄。

安德天皇の御陵（下關）

壇の浦に近く市街に接した赤間宮の横手に在る御陵。その境内に一株の老松が蓊蔚として繁つて居る。足利尊氏が叛旗を翻へし、大軍を率ひて東上する途中「いつれより名をあらはさん薄墨の松濤る月の文字の夕暮」と我がまゝ勝手なことを吐いたので、名の高い古松は卽ちこれ。

然るに門司の側は、大里が下關に對する渡津として、多少の繁昌を告げて居る外、此處彼處に、蜑戸や茅屋の散點せるのみで、對岸の盛況を知らぬ顏、近頃迄で海士の鹽焚く煙を見、漁夫の舟歌を聞く有樣で、單に九州の北東端に

位せる、一の古跡と云ふに過ぎなかつたけれど、一朝築港會社が起り、港灣を築いて船舶の碇泊の便に供へ、且鹽田や海面を埋めて、家屋の建設を促し、之と同時に九州の鐵道が、此處を基點として開通し、下關から大里に渡つて居た國道も、亦之を下關門司大里の順序に變更された爲め、門司は茲に天の時、地の利、人の和の三拍子が揃ふことゝなつた斯くて船舶は追々盛んに出入する、戸口は年々著しく增加する、と云ふ勢を告げ、二十餘年前の一小漁村が、忽ち熱鬧の巷に變じた譯。

門司の生命は、筑豐の石炭に在るので、壘々、黑山を築けるものは、大抵、海外に輸出する爲め、搬送し來つたものゝこれを搬ぶ役夫が、蟻の樣に蠢動して居るのは、實に門司の寶である。而して其繁華が、先輩の下關を凌ぐ勢ひなのも、我が國の新進の都會中、最も急速な發達を告げつゝあるのも、凡て石炭の御蔭、この點に於ては、下關が不利の地位に在るけれど、他方から之を觀れば、下關は本州の西端に位し、大陸への渡津たる形勢を占めて居る、のみならず、朝鮮半島が、屈强な棧橋とも云ふべき位置と狀態に在つて、それが既に我が國の一部分と成つた以上、下關の前途が、洋々として春の海の如くであるのは、勿論の話、要するに、關門の兩港は、乳臭の幼兒でなくば、氣銳の青年と見るべきで、其大なる發達は、寧ろ之を向後に期待

ぜねばならぬ。

地質構造上、關門海峽の左右の一帶は、全然、同一の系統に屬し、中生紀の侏羅紀、又は其間から花崗岩、玄武岩、玢岩が迸發せる土地なので、市街と成れる平地には、勿論、沖積層の部分もあるが、彦島や巖流島（ガンリウジマ）として、同樣の地質だから、海底の一帶も、矢張り此等の岩石で、構成されて居るに相違ない。

關門海峽の左右の一帶が、地質構造を等うせるに拘らず、港灣としての發達、現狀さては兩地の人情などに、大なる異同を見るのは、面白い對照である。卽ち門司が活躍、進取に專らなる代り、勢ひ不秩序の發展を免れぬ工合は、頗る米國風である に反し、下關が沈着、健實を守つて、落付いて居る丈け、自ら因循の嫌ひがあるのは、何處となく英國風。かくて兩港が、相互、疾視の氣味（キミ）合（アヒ）もあるのは、著しい現象。

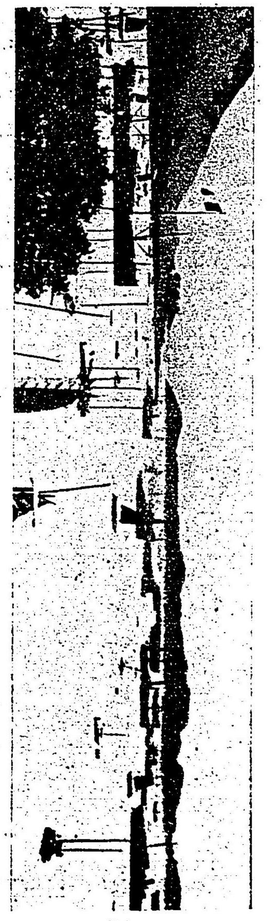
二　出入船舶と外國貿易

瀬戸内海と日本海を通ずる要衝として、關門海峽が絶大な價値を持てることは、昔も今も變りがない。併し既往に在つては、船舶が主として下關に蒐集したもので、赤間關、又は馬關なる別名と共に、下關の港は、天下に轟いて居た。

輓近、時勢の進運に連れ、下關として着々、發展の氣運に向ひ、順次、面目を改めつゝ

あることは、云ふ迄もないけれど、門司の進歩が如何にも迅速で、殆んど旭日昇天の狀勢を示し、早くも下關を凌駕するかの如くであるのは、眞に驚く計り。

試に統計年鑑に據つて、明治四十一年中、外國往來の內外國の船舶で、この兩港



關門海峽の大觀

に出入したものを表示すれば、左の如くである。

港	出 内國船 隻數	出 内國船 噸數	出 外國船 隻數	出 外國船 噸數	出 計 隻數	出 計 噸數	入 内國船 隻數	入 内國船 噸數	入 外國船 隻數	入 外國船 噸數	入 計 隻數	入 計 噸數	合 内國船 隻數	合 内國船 噸數	合 外國船 隻數	合 外國船 噸數	合 計 隻數	合 計 噸數
下關	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
門司	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
合計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

（備考）噸數は登簿噸に據り、單位を千とす、尚ほ此表には汽船の外、帆船をも加算してあるけれど、帆船は隻數も、噸數も極めて稀い。

即ち隻數に於てこそ、門司は下關の二倍程に過ぎざれ噸數は實に八倍强に上つて居るではないか。門司は港灣の工合が、下關に勝る計りでなく、船舶に對する石炭の供給港と成つた爲め、如上の優勢を告ぐる譯には相違ないけれど、門司の人々が、黽勉と機敏と奮發に餘念のないことは、更に大なる原因であらう。

併し、船舶の出入は、港灣の繁昌の程度を測るべき、半面の材料にしかならぬ、其輸出入の總高は、一層明白に、之が程度を示すものであらう。左の表は、即ち同年中に於ける、關門兩港のそれなので、頗る趣味ある事實を告白する次第。

	輸出（單位千圓）	輸入（單位千圓）	合計（單位千圓）
下關	七、八三〇	二、六八五	一〇、五一五
門司	一四、九五〇	二一、九五四	三六、九〇四
計	二二、七八〇	二四、六三九	四七、四一九

之を同年中の全國の輸出入高、八億一千四百五十萬圓に對比すれば、約十七分の一に居る中にも、門司は殆んど其八割を占むる勘定。

兎に角、關門の兩港は、我が國の外國貿易場として、頗る重要なる位置に居るものの、而も關門海峽は、世界的水路の要衝として、船舶の往來が愈、增加する趨勢である以上、兩港の修築と、其海峽の整理は、是非とも之を決行すべきである。

三　關門の三大事業

三大事業とは、云ふ迄もなく、兩港の修築と、海峽の整理と、關門の連絡設備。

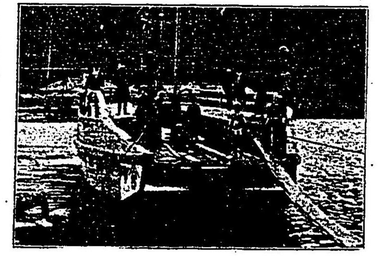
近時、船舶の型體の擴大さるゝ趨向が、特に著しいのは、單に我が國に於てのみの現象でない。歐米の各國は、競ふて巨船大船の建造に腐心して居る折柄だから、港灣の修築に就ても、亦勢ひ、此の點に留意すべきである中にも、一國の玄關たる神戸、さては關門の兩港の如き、世界的航路と至大の關係があるものは、其港灣の

規模を首め、陸上の設備に至るまで、凡て世界の趨向に應じ得る樣にせねばならぬ。加之ならず、關門海峽に至つては、軍事上、艦船をして自由、且容易に往來せしむることが必要なので、現在の如く、この方面が、海上の異變の多い所となつて居るなどは、素より不可。從つて海峽の整理は、特に喫緊であるが、此處は又、本州と九州の連絡の樞區でもあるから、これに就ても、亦適當の施設を遣らねばなるまい。

此等に對して、政府が如何なる經營に出づるかは、單に關門兩港の人々のみの、注意を要する事柄でないとして、兩港の修築に就ては、未だ何等の方法も立て居ない樣樣であるが、海峽の整理は、明治四十三年(一、九一〇年)から、向ふ七箇年を期し、千二百萬圓を投じて、之を竣成する見込だそうで、既に浦賀船渠株式會社に注文して、千二百噸の浚渫船一隻を作り、且英國マンチエスターのドブニッツ會社の製造に係る、最新式の碎岩機を首め、海外から種々の機械を取寄せた、かくて工事の第一着手に、通航上、最も甚しい障害を與へつゝある、與次兵衛・金伏の兩險岩(Dangerous r.)を取除き、次で他の岩礁に及ぼす外、砂洲(Bar)の浚渫などを遣る筈。

關門海峽の東の口なる部崎から、其西の口なる六連島に亙る沖合、約十三哩の間は、海峽の要部たると共に、又最も航海に困難な場所である。之か幅員は、早鞆瀬

戸で二鏈半(約二百四十間)大瀬戸で四鏈半に過ぎぬ。轉じて肝緊な深さは如何と見るに、瀬戸内海の瀬戸の特徴は、關門海峽にも現はれて、狹い部分は深いに相違なけれど、其處に與次兵衛岩の如きがあり、稍、廣い所には、數多の淺瀬があるので、門司洲の如きは、恰も門司港内の最も大切な場所に横はり、低潮面僅に二尋を出ないのである。而も斯る砂洲や險岩は、中の洲・飛ケ洲・蛎の辻・鳴瀬・疝岩・六連出し・大曾根・笠瀬など、殆んと枚擧に暇のない位。これ等は船舶の往來を妨げること頗る大。之に急激な潮流と、頻繁な通船を以てすることゆゑ、其危險さ加減は、實に言語同斷である。

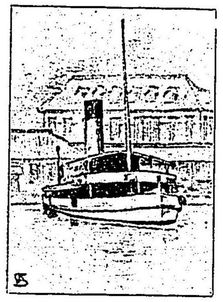


貨車の渡船(關門海峽)

本州と九州の兩鐵道間に於ける貨車を直に船に載せて、關門海峽を渡す目的で、鐵道院が作つたのは卽ちこれ。長八十七尺、幅二十二尺の木造、船梁の上に二條の大角材を縱通し、之に軌道を取附けて陸上の軌道と接續させ、其兩側にプラットフォームを設けて、船の動搖に依る貨車の轉覆を防ぎ、且其接續を便にしてある。倉船内は數多の區劃あるタンクに分け、海水を出し入れして船の吃水を加減し、陸上の軌道の上下裝置と相待つて潮の滿干に應ずるなど、頗る凝つたものに相違ない。貨車三臺を搭載し得るのは結構だらうけれど、汽艇を用つて曳船すると云ふ、間に合せの姑息な仕掛けが出來たのは、漸く明治四十三年のことである。

されば、政府が關門海峽整理なる名の下に、其海底の淺い所を深めなどして、航

海船舶の安全と、迅速を謀りつゝあるは、極めて喫緊な事柄である。こは內務省土木局の管掌に屬し、部崎から六連島に至る水路を通じて、三十三尺の水深を保たせる見込だとのこと、而も他日、吃水の深い大船巨舶が通航する樣に成れば、更に之を四十尺とする豫定らしい。四十尺の水深は、恰も巴拿馬運河の水深と同一だから、海峽の水路が總て如上の深さとなれば、先づ以て遺憾のない譯。現時の狀態では、如何なる軍艦



關門の連絡船

これは鐵道院が經營して居るもの。九十噸ほどの可憐な小蒸汽船が二隻で、絶えず海峽を横ぎり、下關と門司の間を往復して居るのは善いが、その連絡の設備は頗る姑息。旅客も荷車も同じ道を通らねばならぬ上、門司の棧橋は時折西、又は北西の風に吹き荒される爲め、航海が停ると云ふ有樣。加之ならず、棧橋から門司の停車場まで二町の間を、旅客に荷物を提げて歩行させるなどは、殆んど御話に成らぬ。

として、最早、可恐喫驚で通航するなどの、心配は入らぬことゝ思ふ。

論者、或は砂洲を目して、一旦之を除くも、地形と潮流の關係に依り、再び其發達を告げて、遂には、又もや船舶に障害を與ふるに至るであらう、と憂ふるかも知れぬ。如何にも左樣併しこれには相應の歲月を要する譯だから、既に浚渫が了つた後は、殆んど絶えず、少計の勞費を投じて居れば、微しも心配はないのである。

次に港灣の修築に就いては、矢張り政府が、多少の成案を持つて居るらしい、併し目下進行中の、海峽整理の工事すら、經費に制せられて、緩慢な遣方を執つて居る位だから、之が着手は、果して何時のことやら、想像も出來ぬではないか。關門海峽と其港灣を整理し、且之を修築するには、數千萬の資を投ぜねばならぬに拘らず、現時の如き遣方では、如何にも心細いのである。云ふ迄もなく、我が國の海外貿易は、一に之を水運に依賴するの外なきに拘らず、政府が重きを陸上の交通機關に措き、未だ一として完全な港灣を有せざるをも省みないで、鐵道の施設と其改良のみに熱中し、民間の識者も、亦多くは之を怪まぬなどは、海國にも似合しからぬ次第と思ふ。この兩港は、是非とも早く、且立派に修築したいもの。但さなきだに狹隘な海峽だから、築港に普通なる、海面埋立の如きは斷じて禁物。現今すら、門司の生命とも云ふべき石炭が、盛んに輸出さるゝ場合には、既に港灣の狹隘を感じ、船舶の投錨すべき場所なきに苦しむ有樣ではないか。海峽整理の場合、萬一にも浚渫の土砂を用つて、門司崎から大山鼻に至る以內の海面に埋築を加ふる樣なことがあれば、それこそ眞に、角を撓めて牛を殺すの愚に陷る譯。沖の洲などは、港灣の修築に際して、須く之を取除き、船舶の屈强の碇繫場とすべきであらう。姑息

春帆樓（下關）

これ亦普通の割烹店に過ぎない。而も其特に名高くなつた所以は、素より其建築や眺望や料理が善い爲でなく、一に馬關條約が此樓上に誕生したからである。明治廿七八年の戰役に、清國が和を請ひ、李鴻章を頭等全權大臣として派遣し、明治廿八年三月十九日此地に若いて、我全權辨理大臣伊藤博文並に陸奥宗光と、此樓上に會見し、談判數次の結果、四月十七日、日清講和條約の記名調印が出來たのである。されば此樓は國家の記念すべき建物の一。

な遣方は後悔の種。

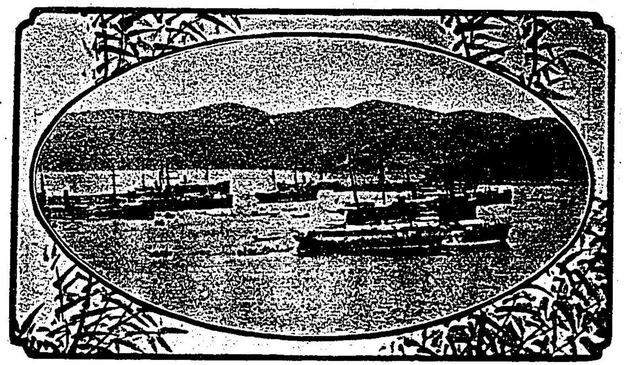
若し夫れ、本州と九州の連絡の設備の如きに至つては、現在の狀態では、致方がない。これも亦相應の改良を要するのは、勿論である。關門海峽の架橋でも遣ることと成れば、早稲瀬戸の最狹部は、僅に二千尺、ブルークリンの釣橋が、六千呎の延長で、最大スパンが千六百呎、三千萬圓の工費と、九年の星霜を費して竣成したのに比ぶれば、何でもない筈。況て其後工學の進歩を告げて居るから、兩岸の高處に橋脚を据えて、海上に高く虹の如き鐵橋を架けたならば、彼我の交通に、此上なき便利で、橋下は巨艦大船の通航が自由な譯、工費

は先づ二三千萬圓だらうから、之を決行するのも、亦左まで困難の業でない。これは遞信大臣で、又鐵道院總裁たる、後藤男の計畫だと傳へらるゝが、素より無用の工事でこそなけれ、海底隧道を穿つのと、孰れが善いかに就て、充分の比較研究を要するのみならず、それよりも、港灣の設備が一層喫緊であると思ふ。事の順序と、物の前後を轉倒してはならぬ。

兎に角、關門の兩港は、石炭の集散と、朝鮮を首め、大陸その他との聯絡、さては本州と九州の交通の樞區として、否、世界的水路の要衝として、能ふ限りの施設を遣らねばならぬ。そして、將來は田の浦小倉を門司港の一部に編入して、之を活用し、以て狹隘且急潮の缺點を補ふ樣な、勢に進めたいものである。

八　廣島と宇品

廣島が山陽の大阪と唱へらるゝ所以は、その初め毛利輝元が、地形の秀優な點に惚込んで、天正十七年、一五八九年、居城を築いたのが繁昌の基と成り、遂に山陽道第一の盛況を見るに至つたことと、それから灣澳の凹部に位して居る上に、幾多の三角洲に跨り、多數の橋梁を有せる工合が、頗る大阪に似て居るからであら、



宇品港（廣島）

明治十七年から二十二年に亙つて築港の工事を營んだもの。二十七八年と三十七八年の戰役の折、戰地と往復の玄關口と成り、將卒を首め、兵器や軍糧の輸送場と成つたので、俄然重要、又佳良の早頭を出現した。斯くて內海の航路の要衝、伊豫の富濱と連絡するに汽船の出發點として、今では廣島市の一部分を占めて居る。最新の河成冲積層の土地は、近頃まで漸く貝や海苔の採集場たるに過ぎなかつたとは、殆んど想像することも出來ぬ位。

うと思ふ。

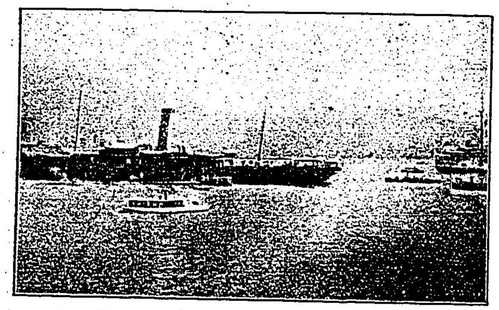
大阪の人々は、其發展策として、自己の懷を痛め、立派に築港を遣つたけれど、山陽の大阪の人々は、陸軍が宇品に港を築いて呉れたに拘らず、袖手傍觀の姿で居るかの樣。今少し港灣、乃至海運のことに着眼せねば、或は長へに中國方面の、都會の覇を維持する譯に行かぬやも計られぬ、ことを恐るゝ。兎に角、廣島が過る戰役に際し、兩度とも我が陸軍の基地と成り、延いて著しく其繁榮を助長し得た所以は、主として宇品港の賜物。

宇品港は廣島灣の凹部に位して、四尋乃至八尋の水深を有し、港內が擴大、且靜穩で、港灣としての施設も亦略、整備して居る。そして神戸、關門間の、殆んど中央に位し、太だ優良の場所を占むるに拘らず、廣島の人々が、格段、之を活用しやうと努めぬのは、不思議と云ひたい位である。成程、軍事上の關係に依つて、船舶の出入に、多少の制裁を受けねばならぬから、百事、意の如くには成り難いであらうけれど、左りとて立派な文明的の海港を有し乍ら、單に大阪商船の、內海航路の小型汽船を、寄泊させる位のことでは、寶の持腐れたる誹りを免れまい。此言に對して、或は鐵道が東西に通じて居るから、と云ふかも知れぬ。併し水運が、多くの場合に於て、經濟上、陸運に勝ることを省みないのは、廣島の人々にも似合しからぬ、何時でも、數千噸の汽船、幾十隻を繫ぎ得る、天與の良港は宇品、廣島は須く此港を活用し、而して瀬戸內海を、運河の如くに取扱ふ勢であつて欲しい。凡て一國、一地方の繁榮を策するには、決して港灣を度外視する譯に行かぬ筈。

九　呉軍港の概觀

廣島灣は古來、瀬戸內海の樞區として、歷史の上に光彩を放ち、殊に戰略の上に

利用されたことが多い。神武天皇の東征に當り、内海の西部を占領せられた後、七年間安藝の埃宮に駐まつて、此處を水軍の根據地とし給ふた。その埃宮は、廣島灣の東岸、呉の北北西に近い場所であつたらしい。次は嚴島に於ける平清盛の經營や、毛利元就の戰爭を外にするも、尚往昔、水軍の根據地たりし名を、其まゝの警固屋は、呉の南南西に位して、音戸瀬戸に沈み、依然、呉軍港の要衝と成つて居るのである。

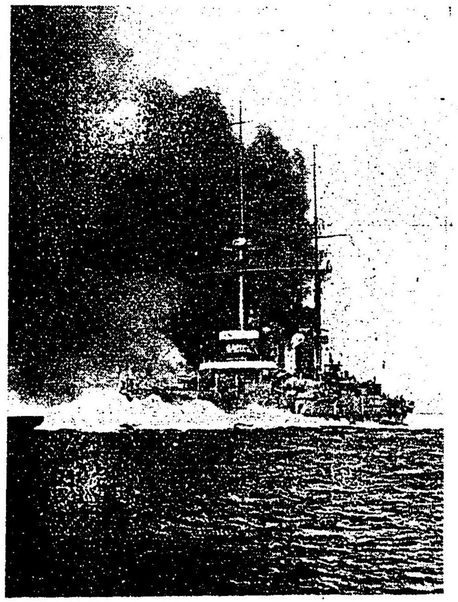


嚴然たる呉軍港

呉軍港が我海軍の重鎮たるは云ふ迄もない。港内と港外の狀況に就ては、多く語るを憚られねばならぬけれど、前面には島嶼の蟠踞せるものがあり、背面には山嶽の重疊せるものがあつて、其周圍を取卷いて居る。而も港内の廣袤と水深に申分がないから、此港灣の如きは海軍の根據地として、眞に理想的のものであらう。況て之に遺憾なく人工の精緻を悉くしてあるに於て。されば其昔頃に呉鎮守府が置かれてあるのは、決して偶然ならぬ次第で、之に依つて國民は大に人意を強して居ること丈けは、茲に明言するを躊躇せぬ。

されば廣島灣に、呉軍港が設置さるゝに至つたのも、亦素より怪むに足らぬと

して、全體軍港の要素は如何と云ふに、これは商港などと大に趣を異にし、早く出動し得る必要上、海中に突出せる位置に在り、且單に風濤に對して安全な計りでなく、敵艦からの偵察や砲擊に都合が惡く、そして防禦に便利でなければならぬ。呉は海中に突出せる點に於て、佐世保や横須賀の如くでこそなけれ、之を内海の



戰圖艦「安藝」

呉で建造された軍艦中の最大なものは攝津だけれどこれは明治四十四年三月の進水に係り、今尚保姆の懷に在る譯だが、英國のドレッドノートに先んじて建造の計畫に着手され、同じく呉軍港に進水せるものは、薩摩の姉妹たる、この戰圖艦。其排水量は一萬九千八百噸、速力は二十節半、裝甲の厚さは水線線に於て九吋から五吋、砲塔に於て九吋から六吋。砲種は主砲が十二吋四門、十吋十二門、六吋八門、水雷發射管は五個。この艦は明治四十年(一、九〇七年)四月に進水したもの。茲に掲ぐる寫眞は、其艤設が完成したので、明治四十四年二月廣島灣の方面に於て試運轉をして居る光景。

最大商港たる神戸に比ぶれば、餘程、位置の工合が違ふではないか。尤も呉軍港の目的は、特殊の狀態を呈せる爲め、國防上、最も大切とする、瀬戸内海を守るのが主で、詰り萬々一の場合、退いて衞るに都合が善い、と云ふ意味からも、起つた譯であらう。若し夫れ、防禦に關する海陸の形勢に至つては、其港灣が西南西に向ひ、前面に江田・渡子(瀬戸)・能美・厳の諸島があつて、音戸・早瀬・那沙美・宮島などの各瀬戸が之を扼し、眞に理想的の複口港を構成して居る。從つて内海の本航路を往來するものも、到底この港灣の所在を知ることが、出來ぬのである。

呉海軍工廠

規模の宏大と設備の完全は云はずもがな。聳々天を摩せる煙筒が林の如くに立ち、其頂上から吐出す黑煙が空に漲つて居るのは、此工廠が如何に盛んな活動を爲しつゝあるかを推知させるではないか。兎に角、此工廠の如きは、實に國民をして、何となく心强からしむるもの。

瀬戸内海に於ける呉の位置は、恰も地中海のジェノアの如くで、江田島以下が、彼のコルシカ・サルデニア・エルバの諸島に當る譯だけれど、其海陸の關係、殊に軍事上の價値に至つては、素より日を同う

して語るべきでない。況て呉の港灣は三十六尺、乃至六十尺の水深を保ち、且海上が極めて靜穩、巨艦大船の碇繫場として、更に申分なきに止らず、此方面の一帶は、悉く花崗岩から成り、内海の地理的風貌を具ふる爲め、山水の明媚と景致の絶佳な點に於ても、亦更に缺陷がないのである。從つて當初、廣島灣の東岸の漁村で、一小商區を兼ね、僅に數千の人口を有せるのみなりし呉が、忽如として軍港に指定せられ、明治廿三年(一、八九〇年)鎮守府の開廳と成つたのは、決して偶然でないことも判るであらう。斯くて工廠が設けられ、造船場も置かれ、更に又製鋼所も建てられたのである。而して我が海軍の最も大切な根據地の一たる光榮を負ふに至つたのは、呉の名譽たると共に、瀬戸内海の名譽。

軍港の指定以來、呉は破竹の勢を以て發達し、嚮日の小邑が、一躍して我が海軍の重要な港灣と成り、内海方面の有數の都會と成つた、之が進歩の迅速なことは、殆んど他に類例を見ぬ位。それも其筈、呉に在る海軍の上長官、將校、下士卒は云はず、單に造船、製鋼、工作等の現業に從事せる、職工の數だけですら、實に二萬三千。

呉軍港が瀬戸内海に嚴然、頑張つて居るので、實は内海方面の人々を首め、日本の全般の人々が、之に依つて枕を高うし、又鼻を高うして居るのである。

七　花彩島中の花彩島

一　瀬戸内海式の島嶼

一　内海の島嶼三千

ラッヂエル博士は、歐羅巴の各國を、島國島の多い國、相應に島のある國、島の少い國の四種に區分し、之を人文の啓發に對照して、島嶼ほど結構なものはないと論斷したが、太平洋の北西隅に位して、見事な花彩島を構成せる、日本群島は、此點から見れば、慥に理想的の國土である。而も花彩島中、別に星羅碁布の花彩島を有せる、瀬戸内海の方面に至つては、眞に理想的の國土の、眞髓を發揮せるもの。

内海の島嶼の長兄は、一國を成せる淡路島、次は一郡の小豆島と大島(屋代島)で、能美島(江田島)倉橋島渡子島、又は瀬戸島(オホシマ)大三島(シマ)大島・大崎上島などは、之に亞ぐものゝ。それから順次小さい島嶼に移つて、遂に一塊の岩石にまで及べば、或は集合し、或は離散して、到底算へることすら出來ぬのである。

秦の始皇帝の、美姫三千に擬へた譯でもあるまいけれど、内海の島嶼の數は、三千と唱へらるゝが、之に對し『如何なる方法を用つて、其の數を算へたのであらう

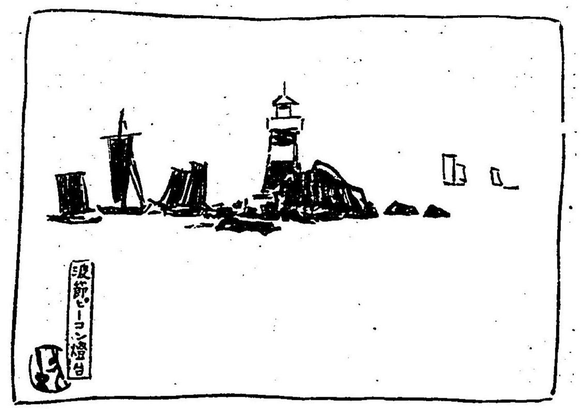
か』と、疑つたチェンバーレン氏の言には、矢張り贊成したい氣がする。

世界に亙つて、瀬戸内海の如く、海陸の關係が極めて密で、無數の島嶼を散點し、優美な山水を出現せる箇所を需むれば、先づ以て地中海を擔ぎ出し、多島海(アーチペラゴ)のサイクラデス群島を擧げるの外はない。併し彼は比較的、深海に崛起せる島嶼、内海に於けるが如き、淺海に浮べるものとは、聊か趣が違ふのみならず、風光の側から觀察するも、彼は頗る大に失するのである。即ち、内海の島嶼の狀貌は、當然これを世界獨得と見るべきで、且立派に瀬戸内海式を具ふるものと云はねばならぬ。

二　内海の島嶼の成因

瀬戸内海の波上に浮べる幾多の島嶼は、往昔未だ内海の成生せざりし以前、即ち未だこの部分の大地が陷沒せぬ折には、今日の中國、近畿、筑紫及び四國の北部を連ぬる高原、又は準平原の一部であつた。

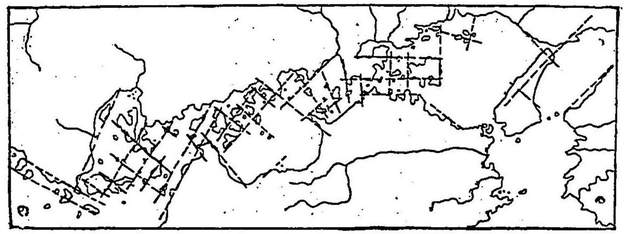
その高原が開張、破裂して、不規則に陷落した所へ、外洋から潮水が押込んだ爲めに、内海が出來たので、此際、取殘されて、都合よく陷落を免れた部分、又は特に高かつた土地が、現在の島嶼と成つたのである。尤も多數の中には、内海の成生後、海中に火山岩が噴出して、出來たものもあるに相違ない。



波節岸と其挂燈立標(鹽飽島)

(ハブシ)波節岩とは水島灘の南方、鹽飽七島の一たる廣島の南側に在るもので、海面上の高さが二十尺、白い花崗岩の小嶼。その位置が丁度、内海の本船路に當つて居るけれど、餘りに小さい爲め、普に目色の要素と成らぬ計りでなく、却つて船舶の通行に多大の危險を與へると云ふ厄介物。この故に挂燈立標(Beacon Light)が建設されたので、其高さが三十三尺、花崗石造、圓錐形で、赤と黑の横線に塗つてある。不動白色の燈光は六浬に達するが、此立標は沖の洲と瓦洲の兩自動浮標と共に、鍋島燈臺の子供分。

洪積紀の初期以來、水蝕の爲め、更に破壞、分離して、遂に無數の島嶼を出現するに小藤教授の説に從へば、内海の方面は、當初高原時代に、火山から燒石が迸發、奔流して、大地の一面を覆ひ、所謂火山原を作つたので、其後、大地に浮沈運動を起し、火山原が縱横に裂けて、局部的に弛み落ちた箇所が極めて多い。其處へ三水道から急潮が押込んで、陷沈を免れた岩石を浸蝕した中にも、



瀬戸内海の島嶼の布置を示す圖

至つたのである。これも亦慥に有力な一つの學説。

併し、今日の科學の力を用つて、内海の島嶼の成因を、整確に説明することは、内海そのものゝ成因に就てすら、尚幾多の疑念がある位だから、殆んど不可能と云ふても善からう。故に此問題の解決も、又之を他日の研究に待つの外はない。

三　内海の島嶼の特徴

我が國の島嶼は、一般に琉球千島及び豆南諸島の如く、見事に並列せる許りでなく、我が國そのものが、既に立派な行列を作れる島嶼であるに拘らず、内海の島嶼が、眞に碁石を散したかの樣で、極めて不規則に布置されて居るのは、頗る面白い現象。否、世界の多くの島嶼は、不規則ながらも羅列の氣味があるので、内海の島嶼の如く、勝手氣儘に散點せるものは、希臘の南東、朝鮮の南西、及び東印度諸島などに於て、偶々之を認むる位なも

の。兎に角、内海の島嶼が、幾何學的な西洋の更紗模樣と事變り、特に意匠を凝した純日本式の、友染模樣に布置されてあるのは、そが内海の絶景の一大要素たる所以である。

四　島嶼の布置と大地の罅裂線

内海の島嶼が、極めて不規則に布置されて居る有樣は、丁度、友染の模樣の如くであるけれど、併し友染にも自ら定まつた形式が整つて居ると同樣、内海の島嶼とて、矢張り全く無暗に散亂して居る道理はあるまい。

斯る疑問が胸中に沸いて來たので、之を解決したい計りに沈思默考、縱横の黑線を地圖の上に描き、遂に海陸を辨知すること、能はざるに至つたものが數枚、而も未だ原理を發見するに至らぬのは、慚愧に堪へざる次第。併し瀨戸内海の島嶼が、慥に一定の法則の下に、羅列して居ることだけは、之を知得したと信ずる。

既に山河の走向が、土地の罅裂線と符合して居る以上、海岸線も亦同樣でなければならぬ。果して然らば、内海の島嶼の如き、母陸乃至海岸線と、極めて密接な關係あるものは、自然の道理として、土地の罅裂線乃至母陸の山河の走向や、海岸線と符合して居るべき筈。

南日本の内帶が張力を受けて、放射的に開張した結果、土地の罅裂線が、勢ひ扇子を開つた樣に成つて居ることは、内海の北部に於ける河川の走向が、之を證明して居るので、海岸線が矢張り、此影響を受けて、河川の走向を並行せねば、必ず之に對して、直角を作つて居るのは、注目に値する事柄。かくて眼を内海の島嶼に轉ずれば、此等も亦海岸線と並行、或は直角の、何れかに布置、擴大せるは、蓋し大地の罅裂線と、離るべからざる關係があるに、基づく譯と思ふ。

淡路島は、南西から北東に延び、六甲山脈と淀川に對して、同一の走向を取り、而して播磨の明石から、姫路の方面に亙る海岸線と、直角に交れるもの、之に反して、周防の室津から、德山までの海岸線は、南東から北西に延びて、岩國川の走向と一致し、其海上の平群島も、亦同樣方角に浮べるのみならず、周防の南東の海岸と、長島は之に對して、直角に交つて居るではないか。若し又、大島が大畠の海上から、南東に向つて擴大し、一轉、北東に折れて居るのみならず、周防灘・伊豫灘・安藝灘も亦三者を併せて、直角を作れるに至つては、最も趣味ある事柄。なほ伊豫の小松から、藝豫海峽の大角鼻までの海岸線は、南西から北東に連れる大島・弓削島・沼隈半島等の海岸線に對して直角を爲し、且讃岐の三崎半島から、走島を經て、沼隈半島の

南西岸を曳ける一線に並行し、而して蘆田川や沼田川(安藝)や總社川(伊豫)などの走向と、相互關係があることは、一目瞭然。

備讃瀬戸の方面は、略扇子の中央に當れる爲め、兒島半島と小豆島が、東西に並列擴大し、其他の島嶼や半島も、亦東西或は南北に布置されて居るので、この瀬戸の中央部から、西方と東方を見比べると、兩者の間に稍反對の走向が認めらるゝなどに就ては、誰しも豈に奇妙ならずや、と叫ぶに相違なからう。

如上の現象は、之を大地の罅裂線に依つて出現したものと推斷する外、今一つ、他の方面からも、説明し得るのである。卽ち四國の南岸なる、室戸岬・足摺岬・紀伊の潮岬を構成して、海陸を劃せる線を首め、世界の何れを見るも、南に向つて突出せる岬角は、大抵、同一の方向を執り、且直角を作つて居る點が、北に向ふ部分と全然反對である。これは低い海岸の側からの横壓力と、高い內陸からの反撥力に、地球の自轉に依つて起る皺襞の作用が加はつて、斯る相貌を告げた譯らしいので、此道理に依つて、內海の島嶼を首め、半島、さては海岸線が、今日の狀態を呈するに至つた所以を、釋くことも、出來るではないか。

尤も之が確乎たる解説を得るのは、矢張り地學が今一層進歩した後のこと。

五　構造と其變遷

瀬戸內海の島嶼が、大地の陷落の際に取殘されたもので、地學上の所謂、地壘であることだけは、疑ひのない話。併し此等の島嶼は、素より成生當時のまゝ存在する譯ではない。淡路島や粟島の如く、數個の島嶼が、新紀の水成岩に依つて、縫合されたものもあるけれど、其多くは成生後幾多の年代を經る間に、激烈なる海水の浸蝕作用を蒙つて、水平的に削剝された外、風水の浸蝕を受けて、垂直的に霉爛されたのである。從つて、嘗ては現在より一層澤山の島々が在つたので、能く浸蝕に耐へ來つたものだけが、今日に殘存せる譯、とも云ひ得るのである。

地質構造の上から、內海の島嶼を觀るに、安藝灘の大崎上島・蒲刈島・御手洗島・周防灘の牛島の如く、純然たる秩父古生層のものもあれば、藝豫海峽の大島・生口島・因島・弓削島・周防灘の笠戸島・大島・播磨灘の家島の樣に、其一部分が秩父古生層のものもあるけれど、他の多數の島嶼は、何れも花崗岩から構成され、左なきものとて、家島の西島・鹿久居(カクヰ)島・水島灘の神島の如く、花崗岩の弟たる、石英粗面岩から成り、或は周防灘の長島の樣に、花崗岩の兄たる片麻岩から成れる次第、故に之を概言すれば、瀬戸內海の島嶼は、花崗岩類のもの許りと云ふて善い。況て此等の秩父

古生層の岩石の下側には、必ず花崗岩類があるに相違なく、石英粗面岩は、花崗岩を貫いて噴出したものであり、片麻岩は花崗岩質のものであるに於てをや。

六　内海の島嶼と火山岩

花崗岩より成れる内海の島嶼は、火山岩の迸發に遇ふて、著しく地質構造を複雑ならしめ、且その大さを増せるものが頗る多い。これは特に注目すべき事柄。

花崗岩臺の上に、輝石安山岩、又は安山岩質集塊岩を戴けるものは、備讃瀬戸の方面と周防・伊豫・安藝の三灘の間の島嶼に在つては、普通に見る所なので、其主なものを列擧すれば、左の如くである。

一、備讃瀬戸の島嶼。

小豆島（青門山だけは玄武岩で、田の浦半島の方面には、閃綠岩が見えて居る）　豐島　男木島　女木島　大槌島　小槌島　高見島　佐柳島　佐柳小島

二、安藝・伊豫・周防三灘の間の島嶼。

大島（花崗岩質片麻岩の上に、火山岩を戴いて居る部分もある）　平郡島（同上）　八島（同上）　長島（同上）　祝島（同上）　浮島　興居島　由利島　大水無瀬島　二神島　中島　怒和島

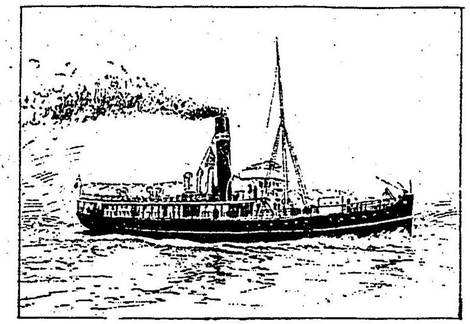
それから周防の熊毛半島に近い沖合の、上下の兩荷内島や、横島や、掛津島・伊豫灘の小水無瀬島や片山島・安藝灘の鹿島などは、單に輝石安山岩と、安山岩質集塊岩から成り、伊豫灘の釣島は、角閃安山岩のみから出來て居るので、花崗岩その他の岩臺は全然、認められぬのである。尤も此等とて、底部は必ず古い岩石に相違なければ、兎に角、當初は海中火山として、茫々たる碧水の下から、噴出したものであらうと信ずる。

花崗岩の臺上に、火山岩を戴ける、内海の島嶼に就て、小藤教授は『内海の成生前に、火山原たりし土地が、地壘として、取殘されたる殘塊に過ぎず、無數の島嶼中には、風水の浸蝕に依つて、火山岩盤の消失を告げ、單に花崗岩のみ、海中に兀座せるものあり、海岸の山々も、亦然り』と云ふて居る。如何にも教授の説の通りだけれど、これ等の中には、當初から獨立の火山として、噴出したものも、素より一二に止らぬことを、附言して置かねばならぬ。

七　内海の島嶼と其景色

瀬戸内海に羅列せる數多の島々は、其沿岸の地質構造と全く同一で、單に地壘として殘存せることゆゑ、島の形も山の狀も、概して塊團を作れるのみならず、母

陸の山々と同樣の標高を保つて、比較的、高く峙ち、且小水蝕谷に富んで、花崗岩の山地に特有な風貌を呈して居る。そして島嶼の海岸には、花崗岩の分解に依つて出來た、可憐な白沙の濱が有つて、其處には靑松が繁茂し、否らざる部分には、靑色の水上に、白色の花崗岩の斷崖を峙てゝ、矢張り蒼蒨たる松樹を着けて居る。



瀬戸内海に專用の汽船

これは瀬戸内海を縱に航海させる爲め、特に快遊船の型を加味して、大阪商船會社が作つた汽船、愛媛丸なので、其總噸數は六百噸餘。室内の構造を首め電燈や電鈴や電氣扇や浴場や暖房などの設備が、凡て行屆いて居るから、頗る樂り心地が善い。姉妹船の香川丸と共に、絶えず島嶼の間を縫ひつゝ、定期に内海を航行して居るので、これに搭乘して備讃瀬戸や藝豫海峽の方面を、通過する折には、一島が送れば一嶼が迎へると云ふ有樣。内海の特色の佳麗な山水が、船の進行に連れて變化するに至つては、柔櫓を小舟に拜ぶなどの、到底企及ばざる所である。

斯る有樣だが、其景色が既に明媚な所へ、白い花崗岩の上に、黑い安山岩を戴ける部分は、更に色彩の變化を與へ、且山容を新にして居るので、或は四邊が絶壁であり乍ら、山頂の坦夷なる豐島(備讃瀬戸)と成り、或は臥牛の樣な水無瀬島

(伊豫灘)と成り、或は尖峰の聳けるが如き小富士(同上、興居島)と成つて、その形狀が千樣萬態、而も此等の島嶼が、或は大、或は小、或は離、或は合と云ふ有樣であるに至つては、實に造化の妙技に對して、深く感賞の念を捧ぐるの外ないのである。

否、啻にこれのみではない、斯くまで結構な島嶼が、波濤の靜穩な間に浮び、其水上には鵬翼を張つた樣な白帆が無數、黑烟を吐いて往來する汽船も渺なからねば、網を投じ或は釣を垂るゝ漁船も、亦點綴して居るので更に一段の興趣が浮ぶに止らず、船に搭じて此海上を進めば、島嶼たるに論なく、人家が相望み、園圃が相接し、村邑や市街さへ、隱見し、時には行人や走畜すら、眼眸に映ずる。而も此等が内海方面の特有物とも云ふべき、適當の水蒸氣を含める空氣に、包まれて居るゆゑ、特に優美、佳麗に感ずる譯。こゝに至つて精神恍惚などゝ云ふ、月並口調の褒詞を用ひた位では、到底之を形容するに足らぬことを覺える。

内海の景色をして、特に秀優ならしめ、世界の公園たる名實を全ふせしひるのは、島嶼の點綴に負ふことが極めて大。

二　内海の島嶼と人文

一　島嶼と歴史

『山島に據つて居をなす』とは、支那の書籍倭國傳の言草であるが、如何にも、日本は大小幾千の島嶼から成れる上、同じ島ながら、英吉利の如き平坦なものとは、全然、趣を異にして居る。故に現時でこそ、傾斜地が開拓せられ、山下の海邊には港市が發達して居れ、往昔は慥に山島の眞髓を發揮し居たに相違ない。從つて我が祖先は舟に乘つてこの島に來たに拘らず、險阻な山を拓いて其處に住み、而して一向之を苦にせぬ許りでなく、國土の秀優と、山水の純美を喜べる結果、今日あるを得しめた譯なので、詰り海國の民たると共に、又山國の民だつた譯。

日本群島を縮小したものは、卽ち瀬戸内海に悲布せる島嶼、内海のそれを擴大したものは、取りも直さず日本群島なので、内海の島嶼は日本の國土の雛形と見て善い。その日本の全體は、古くから拓けて、戸口の稠密を告げたのみならず、土地が狹く、地力が乏しい爲め、陸地にのみ蟄居すれば、勢ひ口糊に窮する所から、蹶起、海洋の開拓につとめ、生活の途を水波の間に需むるに至つたのである。その他、内

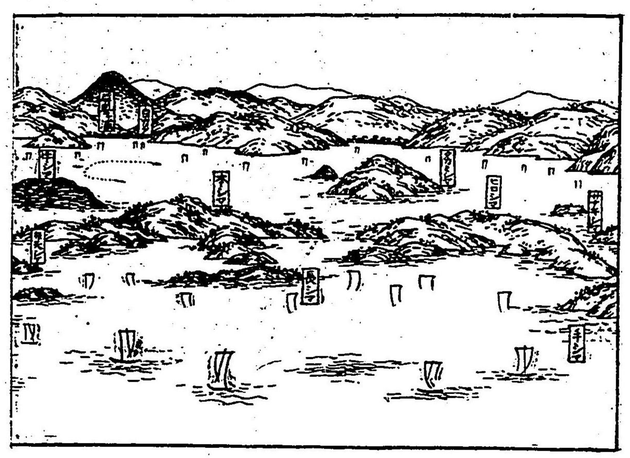
海の島嶼は、此等の點に於て、我が國の全體と、同撰一徹に出て居る、と云ふよりも、寧ろ内海の島嶼の方が、此等の事柄に對する先驅、主動の役目を承つた次第と見るべきである。

論より證據、水島灘の鹽飽諸島の人々は、上古、歴代の水軍、乃至海運に關する、重要な任務を負ふたもので、足利時代の明國貿易には舟人と成り、太閤の朝鮮征伐には案内者と成り、且輸送に從事した。而も德川時代に、河村瑞軒が幕府の運漕方に薦め、その後幕府が、始めて洋式の海軍を創めるに臨んで、最も多數の水兵を出したのは、何れも此島の人々。それから、我が國の軍艦で、始めて太平洋を横斷し、米國に航した威臨丸の水兵も、亦鹽飽出身のものが多かつたのである。

若し又、飽浦氏が小豆島に據つて、内海の海上權を控制し、北朝に投ずれば足利が振ひ、南朝に歸順すれば南風が競ふたのは、來島、能島、因島の三氏が、瑠璃盆上の重鎭と成り、更に一轉して、八幡船の跋扈と成つたのと共に、陸離たる島嶼の歴史の、一端を明示するもの。

二　島嶼の人々の活動

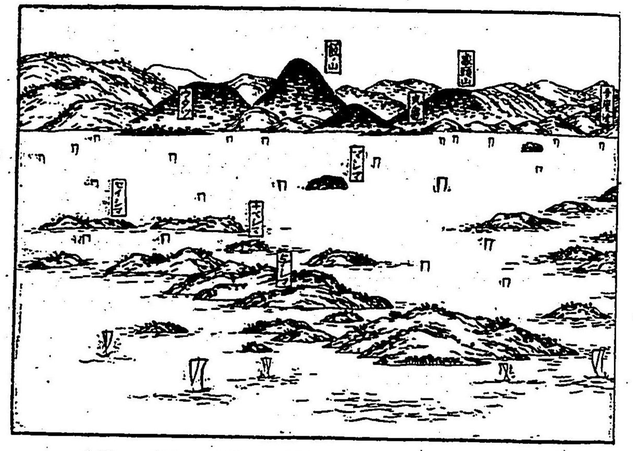
ラッチエル博士が『島嶼は其地積の狹小な割合からすれば、數倍の歴史を演じ



花彩島の標本たる

金毘羅參詣名所圖會に掲げられたるもので、浦川公佐の筆を縮寫したのは卽ちこれ。藝豫海峽の藝豫瀧島と相并び、備讃瀬戸の四部から水島灘に掛けて點綴せる鹽飽諸島は、菲石を散した樣と云はうか、星群を連れた樣と云はうか、兎に角、花彩島の標本である。これ等の諸島は孰れも花崗岩から成り、內海の島嶼に特有な景趣を遺憾なく

て居る』と云ふたのは、誠に要領を得た觀察で、瀬戸內海の島嶼に對しては、殊に格當の言であると思ふが、これは地理的の關係と、それから起る人爲的の關係に、基づくもの。而して內海の島嶼の人々は、曾に既往に於て幾多の歷史を演じたのみならず、現在に在つても、之を續行して居るが、將來とて矢張り否ら、ざるを得ぬであらう。此等の現象は、云ふまでも



鹽飽諸島（備讃瀬戸）

發掘して居るが、此繪畫には鹽飽諸島の配置を首め、正面、讃岐の母陸の平野に羅列して、花崗岩、或は安山岩から構造されたる山々の狀態が、指呼の間に現はれて居る。加之ならず漣波の上を辷る白帆や、網を引く漁舟が、呼べば答へるかの如くに見えて居るではないか。この山水も亦慥に瀬戸內海の風光の眞髓を發揮せるもの。

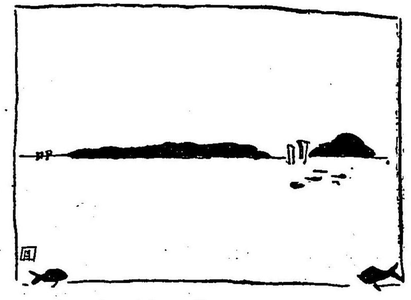
なく、島嶼の人々が、一致團結、龍勉進取、よくその特殊の能力を發揮して、活動する結果である。

小豆島が、古來、水軍の將率を出したことは、之を度外視するとして、同島の產業を觀るに、醬油の釀造の盛んなことは、眞に驚く計り、播磨の龍野、下總の野田と相并んで、我が國の三大醬油產地と唱へらるゝ外、花崗石材や、素麵を出す量も頗る多々、面積僅かに八

花彩島中の花彩島

方里、人口漸く五萬に過ぎざる島が、産業上、百餘方里の面積、八十萬人口を有せる香川縣を、代表するかの如くであるに至ては、蓋し何人も意外に感ずる所。

備讃瀨戸の櫃石島は、鹽飽諸島の一で、面積が一平方里の十分の一に充たず、人口も亦五百を算ふるのみ。眞に花崗岩の一塊が、海面に露出して居る丈のものに過ぎぬけれど、現に織物、石材の兩會社が在つて、共に基礎鞏固、事業隆盛、織物會社の製品の如きは、名聲を關西



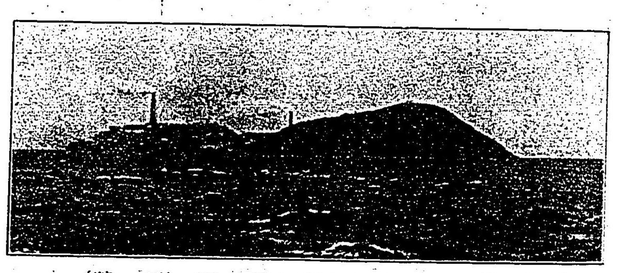
大藍島と小藍島（安藝灘）

内海航行の船舶から目標とせられ、船客からは可憐な島嶼として眺めらるゝもの一。伊豫の菊間の西北西に浮んで居るが、此給は來島海峽、或は長瀨戸を出て、興居島を目掛けて進む途中から、北に向つて望む景を寫したので、左側のが標高二百三十五尺の大藍島、右が二百二十尺の小藍島。クダコ瀨戸を通る船舶は此兩島の間を抜け、釣島瀨戸を通り、或は高濱に寄る場合には、此島の南東を航し、字品・高濱間の往復には、其四側を行くので、内海の航路上に横はつて居る上、兩島とも樹木を繁茂し、名が實の實であることを表白せる爲め、小さい割合に能く知られて居る。況て大藍島の南岸、淺い灣を作つて村落のある所は、帆船の風待ち港であるに於てをや。

方面に博して居るに止らず、島の有志者は更に海上雄飛の必要を認め、朝鮮に出漁して、之が發展を謀りつゝあるなど、會心の事柄に乏しからぬのである。

内海の島嶼と人文

朝鮮への出漁は、南日本からするものが、大部分を占めて居る中、瀨戸内海の方面から出掛けるものが、特に多い所以は、距離と人口の關係が、然らしむる次第なので、内海の島嶼



四坂島の製錬所（燧灘）

内海を航行するものは、來島海峽の東方、燧灘の波上に浮べる一群の島嶼を認め、且その中の一島に大規模の工場があつて、煙筒から盛んに異樣の煙を吐いて居るのを見るであらう。四坂島の製錬所は即ちこれ。大阪の住友氏の經營に屬し、別子銅山から新居濱に送り出された生鑛石が、更に十浬の水運を槳り、此島で製錬さるゝ譯。その方法は生鑛石の一部を生吹法に依る外、凡て燒鑛窯に詰め、少量の石炭を加えて之を燒き、燒鑛と成つたものを鎔鑛爐に送り、骸炭を用つて鎔解させる。斯くて生鈹と鉛が出來たのを床に流し、生鈹のみを砂型に入れて冷却し、更に之を碎いて燒鈹窯に投じ、燃料を加えて燒鈹とし、それを又もや鎔鑛爐に送り、骸炭を用つて鎔解し、固て生ぜる鉛（PBE）をその坩堝の内に溜る稠密鈹み抜出して床に流したものが粗銅である。此粗銅が反爐式の精銅爐に入り、酸化と還元の兩作用を受けて、茲に始めて立派な精銅が出來るのは、中々の手數と云はればならぬ。さて銅山に附物と成れる煙害は、主として燒鑛窯から吐出す亞硫酸瓦斯に基づく次第。此島の煙が燧灘を越えて伊豫の母隈を侵し、今治から小松を經て豐田に亙る方面の農作物を首め、諸種の生物に害毒を與へると云ふので、應々大騒ぎが持上つたけれど、明治四十四年に營業主と被害者の間に、損害賠償の協約が成立つて、一先づ平穏に歸したのである。併し此問題を根本的に解決するのは、學術が一層進歩して、遺憾なき迄に除害し得る方法が發明されてからのことであらう。それまでは銅山の盛衰が煙害の多寡と正比例するのも、亦是非のない話ではあるまいか。

の人々は、比較的最も優勝の地位を占めて居るのである。

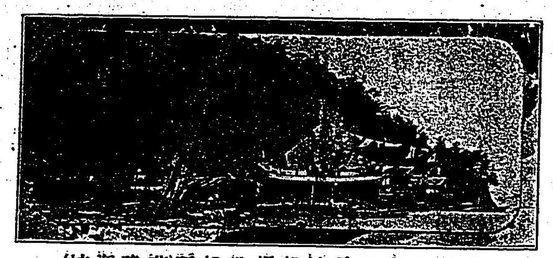
石材の產出が主として內海の島嶼に在る所以は、人爲の現象と見るよりも、寧ろ天然に花崗岩など、見事な原料が、海岸に近く、無盡に存在せる爲め、と云ふべきだけれど、周防灘の姫島を首め、藝豫海峽の生口島、伯方島、大島、大三島、佐木島、さては備讃瀨戸の與島、直島などが、何れも面積に比して、多大の鹽田を有する所以は、その島嶼の人々の、活動に基づくことが極めて大。

若し夫れ、淡路島の洲本や、小豆島の土庄には、新式の機械を据え付けたる、紡績會社が設立されて、天に沖せる烟筒から、絶えず煤烟を吐いて居るなどに至つては、內海の島嶼の人々が、如何に盛んに活動しつゝあるかを表示して、亦餘蘊なしと云はねばならぬ。而も此等は、唯その二三の例を擧げたのみのことなので、燧灘の四坂島(美濃島)に於ける、別子銅山の製錬所は、大阪の住友氏の手に成れるものゆゑ、暫く度外に措くとして、名も知れぬ程の小島に行て見ても、其處には必ず活動の精氣が充ちて居るから、何となく愉快な感が起らざるを得ないのである。

三　內海の造船島

大崎上島は、藝豫海峽に横はれる島嶼、その大さは僅に二方里三五に過ぎず、人

口も亦二萬を出ないけれど、島內には質に六個の船渠と、八十餘の造船所を算え、二千の職工が盛んに活動して居る結果、朔望の高潮に乘じて、進水式を擧ぐる新造船は、數百噸の汽船から、數十噸の合の子船に至るまで、毎に五六隻を下らないのみならず、傳馬船や、小廻船の新造に至つては、殆んど僕指に堪へぬ位なのである。



大崎上島の長濱船渠造船所(藝豫海峽)

海事思想の極めて能く發達せる大崎上島に、幾多の造船所や船渠が設立されて居るのは、決して怪むに足らぬ。これは其一たる大崎中野の南西端、大西港のな寫したもの。設備が頗る簡單で、結構も亦粗末なれども船舶が立派に新造、或は修理さるゝから、誰しも此等の造船所や船渠に對して、その價値や手腕や擊實を疑はぬのである。

從つて船釘の鍛冶職だけでも百餘戸。島の南西岸の小村なる明石の如きは、各戸皆檜皮の製造のみに從事して居ると云ふ狀勢だが、民情や風俗は、比較的質朴で、公共に殉する念が厚い點は、殆んど他に比類のない位。島內の村々が、揃ひも揃つて、或は模範村、或は模範學校として、表彰されて居るのも、亦

決して怪むに足らぬ。

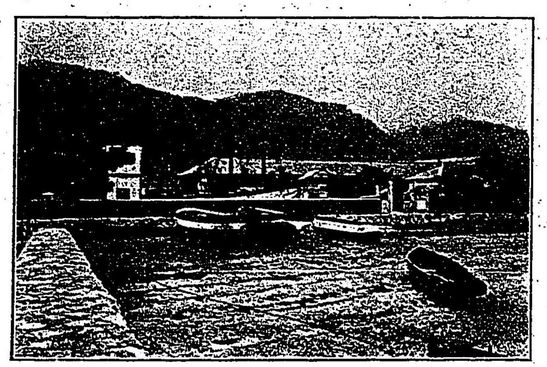
明治三十一年、始めて海務署が設置さるゝに當り、多度津や三津濱の人々は、之を迎えることが、頗る冷淡な樣だつたけれど、藝豫海峽の一角では、位置の競爭を惹起したのである。此折に、大崎上島の東岸に位せる木の江港の人々は、熱心と眞面目を發揮して、優勢な競爭者たる尾道、並に糸崎と戰つた、聊か蝸牛角上の爭ひたるを免れねど、海事思想が最も能く發達して居る結果に、外ならぬと云ふ見地からすれば、誠に以て喜ぶべき現象と褒めて善からう。

木の江港は、實に瀬戸内海の造船島たる、大崎上島の造船事業の、牛耳を執つて居るので、其處には五個の船渠が竝列せる有樣。この港は又、好個の避灘港なので、船舶に縁の多い舞妓、二百餘を容れて、遺憾なく船着場（ブイバ）の趣味を發揮して居るなどは、寧ろ驚くべきである。兎に角、冬季、西風が吹き荒んで、海上に白馬が躍る折は、狹斜の巷が、船頭衆を以て滿たさるゝ勢ひ。此港に『西の風が吹けば黄金が降る』との諺が、行はれて居るのは、其全盛を告白する次第。さりとて斯る風習は、速に消失させたいものである。

四　海員と移民の産出島

瀬戸内海の島嶼からは、古來、盛んに海員を出すので、其間に殆んど差別を立て難い、故に今、之が一例として、水島灘の南西端に浮べる、粟島の事實を擧ぐれば、此島の戸數、僅に四百の中、十數戸が漁業に從事するのみで、他は悉く海員、從つて現在、この島から出て居る海員が五百を超え、殊に船長、運轉士などの、海技免狀を持つて居るものが、百名に達するのは、天晴至極と賞揚すべきである。

轉じて移民は如何と見るに、これは直接に海事思想と關係することが尠く、寧ろ人口の多寡に比例する



大島商船學校（周防）

海外移民の産出島たる周防の大島は、又盛んに海員をも産出するのである。商船學校が設立されたのは、勿論その海員を育成する爲なので、島嶼の人々の通有的、美點とも云ふべき、同心戮力に依つて、明治三十年（一八九七年）大島郡立として建てられたのが、同三十四年、縣立に引直されたもの。設備に遺憾のない工合から、出身者が海運上に盡瘁して居る有樣に至るまで、地方に於ける斯種の學校の手本として善からう。大島の首港とも云ふべき久賀が、その所在地。

方であるが、內海の方面は勿論、人口の稠密な處として、移民を出すことも、亦勢ひ多からざるを得ない譯。さて移住なる名の下に內海の島嶼から出掛けたのは、蓋し舊淡路の領主、稻田男が明治の初年、同島から數百の移民を統率して、北海道に渡つたのが、嚆矢でわらう。

海外に向つての移民は、周防の大島(屋代島)が其產出の淵源と見て善いので、山口縣が盛んに海外の渡航者を出す所以は、實に大島のあるが爲め、彼等は主として、布哇、北米に渡つて、農業に從事するので、多くは出稼勞働者。これ等の人々から、大島に送つて來る金額は、每年一千萬圓を下らぬと云ふ狀勢であるから、かゝる有樣だから、大島には比較的壯健な勞働夫に乏しいけれど、概して有福な樣である。

朝鮮に向つて、漁業者の移住を見るに至つたのは、極めて近年のことで、其數も亦未だ多からぬけれど、時を定めて往來し、彼地方面の海上で、漁撈を營むものが、決して尠なからぬ次第は、今更喋々を要せざる事柄。

五　島嶼と團結心

鍋島閑叟公の吟じた『孤島團結意氣豪』の孤島は、我が國の全般を指したものである。日本の國家が、金甌無缺、世界無比の聖天子を奉戴して居る所以は、其國土が

島嶼から成り、國民をして一致團結、協心戮力の精神を、涵養せしめ得た結果であることも、亦決して尠からぬに相違ない。

島國人は團結心に富み、曳ひて愛鄉心、愛國心の漲溢するものがあるのは、疑ひもない話。この現象は、內海の島嶼に於ても、明かに之を看取し得るのである。

全體、島嶼は、安藝灘の東方、大崎下島の如く、船泊の寄舶所、交通の中繼所と成り、因島の如く、水軍の策源地と成り、淡路の南側なる沼島の如く、水產業者の根據地と成り、時に或は備讃瀨戶の直島の如く、流竄所に利用せらるゝ外、人間の漂着所、隱逃所に使はれて、幾星霜を經る間に、自ら特殊の習俗、乃至人種を作り出すもので、此等は孰れも昔往昔內海の島嶼に起つた事實、併し現在に於ける內海の島嶼は、最早斯る事柄を演ずるには、母陸との關係が、餘りに密接である。從つて此等の島嶼の人々が、抱懷せる特殊の精神も、亦主として遺傳に基づくもの、と見るべく、そして或る程度までは、其消散を告ぐる傾向のあることは、疑ひのない話。

『島の海中に在るは、尙船の海中に在るが如し』とは、學兄志賀矧川氏の言である。大陸は其地形が尤大なため、如何にも締りがなく、人心の散漫を免れぬけれど、島嶼の人々は、船舶の乘込人と同樣、相互の關係が自ら親密と成り、長上、船長の德望

と技倆に待ち、之を尊敬することが最も厚いのみならず、一旦、危難に遇へば、直に心を同うし、他の船に會へば、忽ち之を乘り越えやうとする、などのことから考へ合すと、島嶼の人々の愛鄉心、愛國心、尊王心、乃至競爭心が如何に旺盛であるかを推知するに難からぬ、尤も、一方には又所謂島國根性を持つものも尠なからぬと云ふ缺點があつて、兎角寛濶偉大の精神に乏しいのが、缺點の樣である。

大三島の大山祇神社（藝豫海峽）

祭神は大山祇神。延喜式の名神大社に列し、昔から朝廷を首め武門、さては遠近の人々の尊崇が實に非常なもの。藝陽海峽の中央、大三島の宮浦と云ふ所に鎭座ましまし、祠宇宏壯、境内森嚴の國幣中社。往時は金毘羅神社よりも、一層、來詣者が多かつたものだそうな。

内海の島嶼の人々が、母陸の人々と大同小異の習俗、乃至意識を有する所以は、全く伊豆七島などゝは遠ひ、母陸に對して、頗る密接な地理的關係があるため。

六　島嶼に對する感想

希臘の南東に位して、多島海上に浮べる一島デロスには、往昔、アポロの廟を建て、深く之を尊崇すると同時に、島の清淨を保つ爲め、其住民を擧て母陸に移らし

嚴嶋神社の舞樂（河合英忠）

と技倆に待ち之を尊敬することが最も厚いのみならず、一旦危難に遇へば直に心を同うし他の船に會へば忽ち之を乘り越えやうとするなどのことから考へ合すと、島嶼の人々の愛鄉心、愛國心、尊王心、乃至競爭心が如何に旺盛であるかを推知するに難からぬ、尤も、一方には又、所謂島國根性を持つものも尠なからぬと云ふ缺點があつて、兎角寛濶偉大の精神に乏しいのが缺點の樣である、

内海の島嶼の人々が、母陸の人々と大同小異の習俗、乃至意識を有する所以は、全く伊豆七島などゝは遠ひ、母陸に對して、頗る密接な地理的關係があるため、

大三島の大山祇神社（藝豫海峽）

祭神は大山祇神。延喜式の名神大社に列し、昔から朝廷を首め武門、さては遠近の人々の尊崇が實に非常なもの。藝豫海峽の中央、大三島の宮浦と云ふ所に鎭座ましまし、鎌倉時代、源平盛衰記中社。往時は金堀雅神社よりも、一層、來詣者が多かつたものだそうな。

六　島嶼に對する感想

希臘の南東に位して、多島海上に浮べる一島デロスには、往昔、アポロの廟を建

嚴嶋神社の舞樂（河合英忠）

嚴島神社の祭事は古色蒼然たるもので、陽春の頃、花吹雪の中に、東風に折るる春の曲水の宴、雅楽の調べ、舞楽の面白さ、流れに寄する朝霧、王朝時代の面影を偲ばしめる。

めたが廣島灣の嚴島も、亦精淨な別坤乾として認められたりし島嶼なので、疾病に罹つたものは、直に母陸に送つて治療せしめ、頓死などの場合には、夜間密に屍を母陸に送り、且葬主をして若干日の間、歸島せしめなかつた。加之ならず、婦人の出產の折にすら、豫め母陸に渡つて、矢張り幾日かを經て、身體が舊に復するのを待つたもの。而も斯る風習は、近く明治の始め頃まで、存續して居たとのこと。

島嶼は母陸から隔離して、海上に懸垂せる爲め、勢ひ人事に遠ざかり、俗塵に穢れない譯、從つて之を清淨な場所として敬畏するのは、恰も雄偉な山嶽を尊崇するに等しい。卽ち嚴島の外、藝豫海峽の大三島、由良海峽の友ヶ島の如きは、何れも神靈の在します處としたもので、石槌山や高野山に、婦人は登り得ないものと定めてあつたのと同樣である。而も斯る感想が、東西その撥を一にして居るのは、如何にも面白い事柄ではないか。

七　島嶼と古物保存

何人も島嶼に赴けば、直に風俗が古雅で、人情が淳朴なことに氣付くであらう。實にや島嶼は、地理的の關係に依り、其處に居住して居る人々をして、無意識に昔し乍らの生活狀態を保存せしむるのが一般である。

内海の島嶼の如き、母陸に對して密接な關係を有するにも拘らず、尙相當に古物が保存されて居るのは、流石に島嶼たる本分を忘れぬもの。豆南諸島の婦人には、多く源平時代の名が、其まゝに付けられてあり、肥後の天草島には、今に切支丹が行はれて居るなどのことは、素より之を内海の島嶼で認ひる譯に行かぬけれど、周防・伊豫の兩灘の間なる姫島には、現に産屋の組織が殘つて居るのである。即ち此島には、戸數戸共立の産屋があつて、妊婦を移らせ、屋内の土間に席、又は壁を敷いて、其處で分娩させる。斯くして産後七日目に至り、孩兒に白木綿の新衣を着せ、産婦と共に、初めて自宅に歸らせるが、産屋のない處では、納屋か物置かを、之に代用してまでも、居宅と産所と別にするのである。それから嚴島の人々が、例年、正月元日の早朝に、松火を携え、小桶を提げて潮水を汲み、家に歸つて身體を洗ひ、且屋内を淨めて後、神社

嚴島の神鹿

奈良の春日神社の境内と通に相對して、嚴島神社の神鹿には、餌者を喜ばせる鹿が居る。深山の鹿が麥を壁ふて秋に鳴くと云ふ妙趣なく、却て餌を需めて行客の跡を尋ねる手合で、其數凡そ百頭。此等は昔から神鹿として傳はるものだけれど、其由來は明でない。嚴島の山中には今尙野生のまゝで、人を恐るゝ鹿も棲息して居るとのこと。

に參詣するのは、往古の禊の遺風を存する譯と思ふ。

嘗て瀨川博士は、周防の大島で、嚴島合戰に關する珍稀、有益な歴史上の古圖を發見したそうな。また播磨灘の家島には、今なほ野生の群鹿が徘徊して、母陸の大部が戸口充實の爲め、自己の同類が絶滅に歸せるをも知らぬ顏なのは、共に島嶼が記錄や生物などの、保存所である證據。

内海の島嶼は、孰れも靜穩な帶水を用つて、母陸から離るゝのみなれど、尙古物を保存せること、斯の如くである。往昔の文物典章風俗習慣などを研究するものは、須く海洋の裡に懸れる離島に渡つて、其材料を需ひべきであらう。

三　内海の島嶼の長兄

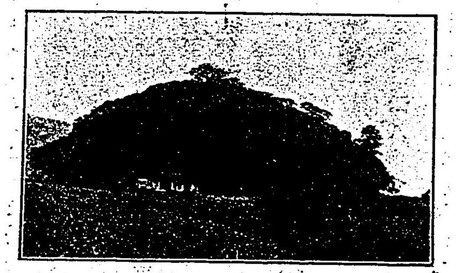
島嶼三千と唱へらるゝ、瀨戸内海の青螺の、長兄と目せられ、獨立の一國を爲せるものは、云ふまでもなく淡路島である。

淡路島の形が靴に似て居るとは、幼時、小學の教科書で覺へた事柄。これは勿論、地圖上の觀察であるが、此島は大阪灣と播磨灘の、何れの方面から眺めても、慥に波の上に浮ぶ巨鯨と見るの外はないと思ふ。その鯨の長さ十又五里、脊に高い山

があり、腹には肥沃な平野に乏しからぬ。而も繪の樣な松が之を覆ひ、洗ふたかの如き巖が所在に出沒して、風光を添へて居るのは、これが唯の鯨でないから、

鯨の鼻先の眼玉が、暗の中で光るのは、江崎の燈臺。この崎が舞子濱と相對し、一條の水路を通じて居る處が、音に名高い明石海峽で、攝播の間が風光明媚の域として、知らるゝに至つたのは、この鯨に負ふことが極めて大。

地質構造の上から之を見れば、花崗岩の六甲山脈が南西に延びて、阿讃和泉の兩山脈を連繫せる、和泉砂岩層に接續して、出來たものである。卽ち內海の島嶼の巨擘たる淡路島は、中國式と四國式、否南日本に於ける內外の兩帶の、協力に成つた譯だから、一個の島嶼とは云ひながら、中部以北が內海の島嶼、乃至中國と同樣、不規則な山塊を構成し、海拔

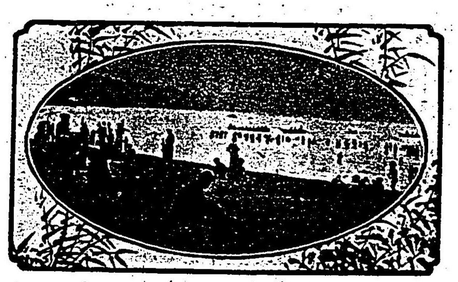


淳仁天皇の御陵（淡路）

土地では「天皇の森」と唱へて居る。二百二間に七十二間の小山を築き、その周圍に濠を廻してある。繁つた森に、小島の聳が賑かなのも、亦太平の象であらう。攝磨灘に面した淡路から二里餘り、神代の史上に名の高い磯馴嶽島の南西に當つて居る。

千五百二十八尺（四六三米突）の先山が、較、高い位なものであるに反し、南部に在つては、二千尺餘（六〇九米突）の標高を有せる諭鶴羽山を首め、高山性の特色ある山嶽が、紀伊水道に沈んで、西南西から東北東に延び、阿讃和泉の兩山脈の連鎖であることを表白して居る。

斯る狀勢だから、地形、地質、土性とも、島の南部は中部以北と全然、趣が違ふとして、さて淡路が、獨立の島嶼と成つたのは何時で、其原因は如何と見るに、それは瀨戸內海の成生と同時、卽ち中生紀から第三紀に掛けての間だつたので、大阪灣と、播磨灘と、紀伊水道に當る個所が、陷落した折に、厄難を免れ得た地壘に外ならぬ。而も初めは數個の島嶼だつたけれど、新紀の地層の發

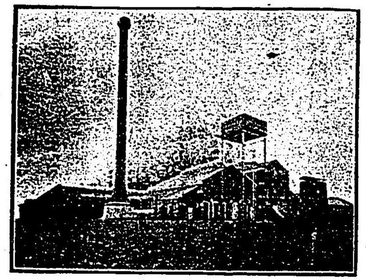


洲本の海水浴場（淡路）

大阪灣（茅渟海）の南西端、大濱公園の海岸一帶は、砂白くして海淺く、潮流急ならずして水が清冽、而も波濤が極めて穩な上、風光が明媚、空氣が純潔である。されば此處が夏季の海水浴場として屈強なのは、更に不思議のない話。洲本の有識者中には、近年、山水を慕ひ或は海水浴を見込に、大阪などから來遊するものが追々增加するので、折角、清淨を保てる場所が、俗塵に穢されはせぬかと懸れて居るらしい。至極同感ではあるけれど、之を保護しつつ適當に之を利用するのこそ、寧ろ洲本人士の任務であらう。

達が之を一丸とし、遂に今日の立派な淡路島たらしむるに至つた譯。

淡路島は、其面積が三十七方里と註せられ、佐渡と隱岐を合せて、之を二分したものと同樣の大さである上、母陸に對する關係が、極めて密だから、島嶼らしい趣は殆んど之を認めない。而して我が國の中、最も人口の稠密地方に推さるゝ程あつて、山隈海畔の到る處に、人家を見ざるなし、と云ふ有樣で、凡ての事物が穩健平調、物價の低廉な位の外は、別段の特徵を認めぬが、由良から南西に向つて、福良に至るまでの海岸に散點居住せる漁夫が、內海の漁夫と聊か趣を異にし、怒濤狂瀾を恐れずして、太平洋上に出漁するのは、全く紀伊水道が、之を養成した結果なので、眞に海



洲本の紡績工場(淡路)

淡路島の有志者の主唱により、阪神兩地の有志者の發起を得、淡路紡績株式會社と唱へて、明治三十七年に創立したもの。當初は五千錘を運轉し、次で二萬錘に增加したが、同三十二年を以て鐘淵紡績株式會社に賣却したのであつて、同社は之を洲本支店と呼んで居る。斯くて、同四十三年、更に第二工場を增設した結果、現在は三萬餘錘の紡機と三百餘臺の織機を有し、千五百の工女と三百の工男を使用して、年額一萬八千梱の絹絲と、十五萬反のシャーチングを製出するの勢ひとなつて居る。兎に角、その大さに於て、我が國の有數の紡績工場が、淡路島に存在することは、必ずしも無意味に看過すべきではないと信ずる。

國男兒中の、海國男兒と見るべきである。

洲本は島內第一の都會。その海岸に橫はれる大濱公園は、花崗岩の分解に成れる白砂に、靑松の繁茂した所なので、夏季、屈强の海水浴場であるが、西海岸の郡家から、鳥飼に至る間に展開せる五色濱は、第三紀層の斷崖の下に、種々の礫石が、澎湃たる播磨灘の波濤に依つて作られ、且そが圓形に削られたもの。これも亦淡路名所の一に算ふべきだけれど、特に名高いものは蓋し『淡路西國』と唱へらるゝ、三十三個所の寺院の巡禮と、上村源之丞その他の人形芝居であらう。

若し夫れ淡路島が、伊弉諾尊の御經營あらせられたことに至つては、我が國の歷史上、最も古く、且最も尊いものとせねばならぬ。而して應神天皇が內海を航して、此島や小豆島に狩を樂ませ給ふたと申すことは、海を恐れ山を怖るものゝ、三省に値する次第。

四　風骨非凡の小豆島

一　地質構造と勝區

內海の島嶼の長兄たる淡路に狩し給へる應神天皇が、更に次兄たる小豆島に

花彩島中の花彩島

巡狩されたのは事の順序として當に然らざるを得ない譯と思ふ。

小豆島は瀬戸内海第二の巨島として附近の島嶼を壓する勢であるが、その風骨の非凡な點に至つては、さしも山水の純美な内海中未だ之に及ぶものはないのである。況て他の碌々たる景趣に於てをや。

先づ地學上から島の構造を概言すれば、小豆島は恰も西に向つて走れる犬の如き格好に出來て居るが、その頭部たる土庄の方面は、小水蝕谷の多い花崗岩の山地から成り、淵崎と一條の溝渠を隔てゝ、獨立せる島嶼の姿をなせど、低潮の折には、沙洲を用つて連繫さるゝ。其處で淵崎の北方を眺むれば、海拔千二百三十七尺(三七五米突)の青門山が聳えて、高臺式火山に特有なる、山頂平坦、四壁急峻の相貌を具ふるも道理。この山は玄武岩から成り、花崗岩臺の上に載つて居るので、其東方に峙ち矢張り花崗岩の罅裂から迸發した安山岩質集塊岩の、大鹿山と相并べるは、島の西部の主景たるに恥ぢぬ譯。

犬の腹部に當る部分は、標高二千七百尺(八一六米突)の星ヶ城山を首め、此方面に連亙せる峯巒が、大抵安山岩質集塊岩。その山脚は、例に依つて小谷の多い花崗岩の傾斜地なので、幾多の小峯と羅列して居る、此等の集塊岩の山嶽が高い絶壁

花彩島の中の花彩島

巡待されたのは、事の順序として、當に然らざるを得ない譯と思ふ。

小豆島は瀬戸内海、第二の巨島として、附近の島嶼を壓する勢であるが、その風骨の非凡な點に至つては、さしも山水の純美な内海中、未だ之に及ぶものはないのである。況て他の碌々たる景趣に於てをや。

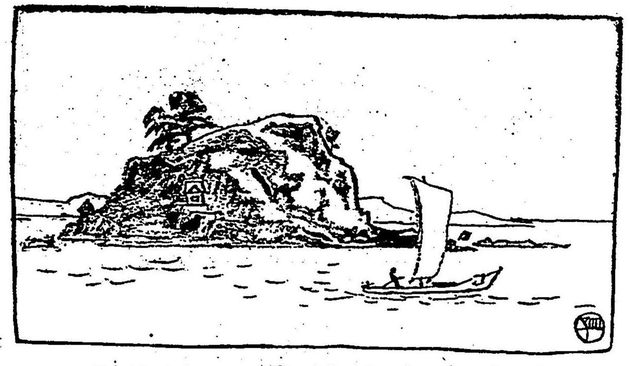
先づ地學上から島の構造を概言すれば、小豆島は、恰も西に向つて走れる犬の如き、格好に出來て居るが、その頭部たる土庄の方面は、小水蝕谷の多い花崗岩の山地から成り、淵崎と一條の溝渠を隔てゝ、獨立せる島嶼の姿をなせど、低潮の折には、沙洲を用つて連繋さるゝ。其處で淵崎の北方を眺むれば、海拔千二百三十七尺(三七五米突)の青門山が聳えて、高臺式火山に特有なる、山頂平坦、四壁急峻の相貌を具ふるも道理。この山は玄武岩から成り、花崗岩臺の上に載つて居るので、其東方に峙ち、矢張り花崗岩の縛裂から進發した、安山岩質集塊岩の、大鹿山と相并べるは、島の西部の主景たるに恥ぢぬ譯。

犬の腹部に當る部分は、標高二千七百尺(八一六米突)の星ヶ城山を首め、此方面に連亙せる峯巒が、大抵安山岩質集塊岩、その山脚は、例に依つて小谷の多い花崗

(寒霞渓)

(寒霞渓)

寒霞渓は、小豆島の中央部に、東西に亙る、安山岩質集塊岩の、大鹿山と相并べる、花崗岩の縛裂から進發した、峯巒の、大小無數の、奇怪な、岩峰、岩壁、岩洞、岩窟、岩橋、岩門、岩柱、岩瀑、岩潭

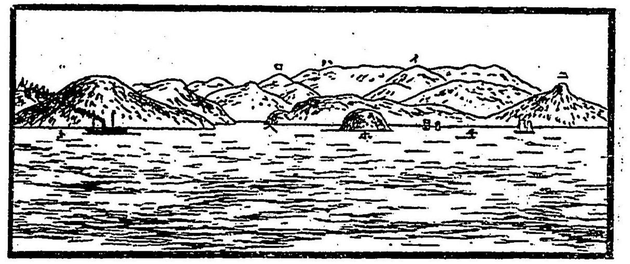


愛すべき小豆島（鹿子木孟郎）

これは小豆島の小豆島。土庄と淵崎の海岸に近く、四島（餘島）と相并び連波の間に浮んで居るのを、西方、土庄から寫したもの。愛すべき島の愛すべき祠は住吉神社。この方面の一帶は花崗岩から成り、優雅なる山海の配置と、可憐なる島嶼の點綴に加ふるに、屋島・五劍山さては釋迦ゲ鼻などを一望の裡に收むるので、如何にも善い景色。玄武岩から成れる淵崎の青門山は實に此等の景色の展望臺である。

を作り、そして風水の削刻作用を蒙つた結果、名高い神懸の外、至る所に奇峭と怪巖を出現したのである。斯くて其南方に伸出せる、二個の山骨中、西なるは犬の前脚で、釋迦ゲ鼻の岬角を作れるが、犬の後脚たる坂手半島は、別に千四百五十二尺（四四〇米突）の高さがあつて、山貌の峻嶮たる觀音山の奇峯を峙てゝ居るのである。

即ち小豆島が非凡な風骨を爲せる原因は、全く花崗岩の臺上に、火山岩を頂いて居



小豆島の東半部

神戸・高松間の航路上、播磨灘から將に備讃瀬戸に入らうとする邊で北に向ひ、神懸方面の山水を眺むる景色。田の浦半島が閃綠岩である外、低い所は凡て花崗岩だけれど、高い山の中腹以上は、悉く輝石安山岩、又は安山岩質集塊岩である點が、この島をして勝景の域たらしめた最大原因。

イ 星ケ城山
ロ 四方指山
ハ 神懸
ニ 觀音山
ホ 福部島
ヘ 田の浦の檪現崎
ト 釋迦ケ鼻
チ 坂手港
リ 池田地方

るからなので、青松その他の樹木が之を飾つて、一層器量を揚げて居る譯、兎に角、この島は三十六里の周廻が、到る處として長汀曲浦、白砂青松と斷巖絶壁の海岸ならぬはなく、陸内は又豪宕な山嶽と幽邃な渓谷を用つて充たされ、流石は世界の公園たる瀬戸内海の一大奇勝たるに恥ぢぬもの。

世人、多くは小豆島の神懸の秀優を說いて、島の全體の山水が、絶佳なことを云はぬけれど、西の方、嚴島に對する東の方、小豆島と見ても善いので、此兩者は、瀬戸内海に於ける島嶼の雙璧である。論より證據、試に島内に於ける、勝景の個處を探ぐれば、山水の妙趣が神

懸に讓らないと唱へらるゝ西谷が、神工鬼斧の巖峭に充ち、豪宕又嫋雅なのを首め、清瀧、辨天島、四島(徐島)、銚子瀧、乾瀬戸、恵門山、水晶山など、逐一列擧することも出來ぬ程である。而も觀音山や青門山の如きに至つては、啻にそれ自身が奇秀な山巓を構成せるのみならず、濶大、且明媚な内海の景致を、雙眸に收むべき、良好の展望臺。

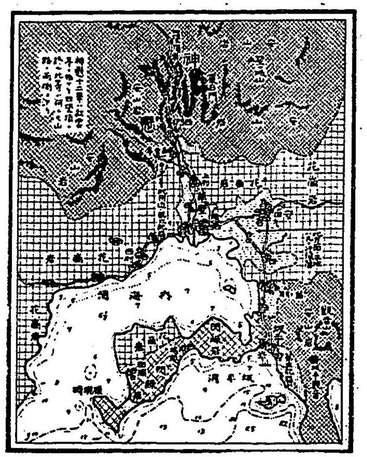
二　神懸の奇勝

海内無雙の奇勝と褒められ、小豆島の山水を代表せるものは神懸である。

神懸は又寒霞渓、神馳、院華渓などとも唱へらるゝけれど、此等は何れも鍵懸なる古稱から出たので、應神天皇の二十二年(二九一年)渓路に行幸し給ひ、吉備に轉じ、更に小豆島に遊んで、狩を樂ませられたことは、日本書記に見えて居るが、鍵懸とは當時この山で、索を用つて鉤を束ね、樹に懸けて、峻嶮な個處を攀ぢ登り給ふた爲め、起つた名であるらしい。されば神懸が、嚴然、風塵の外に立ちて、一種神聖の氣を帶びたるは大に所以ある次第だけれど、交通機關の備はらざりし時代には、斯る僻陬の地に來て、其勝を探るものもなかつたのである。然るに成島柳北の一遊に依つて、東京の朝野新聞に紹介さるゝに會い、神懸の名が、殆んど天下に知ら

れ、延いて文墨の士、さては凡俗の人が、踵を接するに至つた譯。

若しも探勝者が、坂手で汽船を捨て、陸路を北に辿れば、左に內海灣の明媚な風光を眺め、右に觀音山の奇拔な景趣を望むであらう。そして前面一帶の峯巒が、自ら四邊を壓するかの如くである。



神懸方面の圖（小豆島）

ことを、感ずるに相違ない。斯くて草壁の海岸から、尙も北に進めば、此方面は白色の花崗岩の土地だけれど、間もなく、巒が迫り山が急に成ると共に、地質が一變するのである。卽ち黝色を帶びた安山岩質集塊岩、これが神懸に入る第一歩なので、順次、澗流に沿ふて登れば、流水が此岩石を浸蝕して、溪谷を穿ち、岩石を峙つるに至つたことは、容易に之を看取し得らるゝ。神懸の奇勝は、實に耶馬溪などと同樣風水の削剝作用が、安山岩質集塊岩の、粗鬆な部分を奪ひ去つた殘骸に外ならぬ。

この故に、神懸の溪谷は、其左右が斧鋸の極致とも見るべき、危峭嶮崖、屛風の如く、又墻壁の如く、或は洞を穿ち、或は梁を掛け、或は矛を建て、或は劍を連ねたかの樣。而も、頽れそうで頽れず、倒れそうで倒れぬのであるが、中には遂に支ゆることが出來ないで、崩潰したものもあると云ふ風で、眞に千態萬樣を悉せる計りでなく、一歩を進めば、一景を變へるのすら、既に人をして深甚な感興を惹起せしむる處へ、松杉が之を飾り、苔蘚が之を覆ふて、巖石と澗流と植物の配合が、如何にも甘く出來て、それが見事に調和されて居るのだから、秀麗奇怪、幽邃嬌美などの形容詞では、中々以て追付かぬのである。

神懸は又楓樹に乏しからぬゆゑ、秋の季節となれば、滿山一帶に錦繡を織り出すのである。併し神懸の遊覽が、秋に限ると思ふは早計、天地自然の美は、四時轉換して、暫くも止む暇がない、中にも、春夏の交は、新綠が滴らんとして、自ら神韻靈顯に打たるゝ樣な感を起させるので、必ずしも肅條たる秋色に劣らぬ風趣。

耶馬溪と神懸は、地學上、略同樣の構造に成れる爲め、兩者の景趣も亦頗る能く似て居るけれど、其間には又、何處となく違ふ點もあるので、彼は奇にして雄、是は奇にして清なるものと云はねばならぬ。而も神懸の溪谷を辿り盡し、峻坂を登つ

て山の絶頂に立ち、其處から四方を大觀するに於ては、誰しも直に流石は瀬戸内海との語を禁じ得ぬであらう。四望頂とは卽ちこれなので、海拔千八百五十尺(五六〇米突)の頂上に、相當の廣場が出來て居るのは、自然の展望臺と云ふべきである。さて此處から四方を眺むれば、阿讃・攝播・三備の山々が、遠近、濃淡の宜しきを得て、隱見するのみならず、淡路島を首め、家島群島・鹿久居島・前島、さては備讃瀬戸の水上に羅列せる、大島小嶼が、眼眸に映ずるので、眞に氣宇の濶大を覺え、轉に溪底を步みつゝあつた折とは、全然感興を異にするのである。兎に角、穩健な瀬戸内海の島嶼中に、奇拔な神懸があるのは、萬綠叢中の紅一點とも云ふべきで、神懸が四望頂に依つて、愈々價値を高めて居るのは、何處までも造化の技巧

神懸の帽子岩(小豆島)

神懸十二景の一、自然の白霞が到來すると、滿目の楓樹が錦を飾るので、殊に美しくなる。帽子岩は岩そのものも、文字も著いけれど、十二景の中には鏡・蜂嵐とか、女羅壁とか云ふ樣な、面倒な文字を用ひたのがある。のみならず、神懸に寒霞溪の字を使ふ抔は、如何にも支那臭いではないか。崇高な自然の神が、特に心を籠めて作られた神懸だから、好んで臭味を嘗めなくとも善からう。分り易い在來の日本的の文字に限るとしては如何なものか。

に成つた結果と、首肯し得らるゝ。

進取の念と敢爲の氣に富み、而して着實の風を失はぬ小豆島の人々は、產業の振興、乃至島外の發展を策する點に於て、着々步武を進めつゝある上、近年この島の山水を利用して、繁榮を謀ることに着眼し、既に神懸山保勝會を組織して、道路を開き樹木を植え、且廣く勝區を世人に知らしむるに努めて居る。小豆島には眞宗八十八個所の靈場がある爲め、古來、巡禮の之に詣づるものが、殆んど絕えない位。その靈場の多くが、勝區で在るなどは、所謂、詣べ向きと云ふべきで、島內の到る處が、平凡な山水と大に趣を異にせる以上、神懸山の保勝會を擴張して、小豆島全般の保勝會たらしめ、益々協心戮力の度を强うし、天賦の寶物をして、充分に光輝を放たしめたいものと思ふ。

(附言) 我が國の勝區には、支那風の呼唱の附いて居るものが尠なからぬ、寒霞溪は其一なので、耶馬溪も亦然り。此等は大抵、無暗に支那の眞似をしたがる、往昔の漢學者が附けたもの。箕子濱や有明濱(讃岐)などと云ふ、純日本式の名に比ぶれば、其優劣と可否は、頭から問題に成らぬ。從つて立派な勝區でも、支那人めかして呼んで居ると、多數の人々は直感的に頭にさはり、行くべき處も、行かぬ樣に成ることもあらう。從來、寒霞溪と云ふのが普通だつたのを、神懸の名に復したのは、保勝會の第一着の功績。別府灣な

蒸茗灣と呼んだり、津田松原を琴林公園と唱へたりするのは、時勢の趨向に反する次第ではあるまいか。日本の地名は、何處までも日本の地名らしくありたいもの。

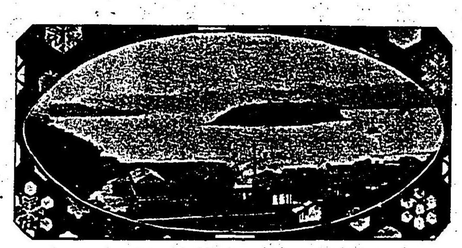
五　多方面なる藝豫叢島

一　趣味ある地質構造

藝豫叢島とは、藝豫海峽の間に點綴せる幾多の島嶼を指して、私に名づけたものであるが、或は之を三島群島と稱へても善い。

この叢島の瀬戸内海に於ける位置は、丁度、地中海のシシリー島・バンテラリア島・マルタ島の如くで、將に内海を兩斷せんとする狀勢を示して居る。故に軍事上、極めて大切な場處として、英國がマルタ島を扼守せる工合も、亦矢張り、我が國の輕視すべからざる防備地帶として、藝豫要塞が設置されて居るのと、同樣である。而もシシリー以下の島嶼を、藝豫叢島に對比すれば、區域に大小の差こそあれ、布置が複雜なことや、海岸線が屈曲に富めることや灣澳さては瀬戸の夥しいことに於て、彼は遠く是に及ばぬので、この叢島の如きは、眞に花彩島の極致と見るべく、又實に世界無類のものと云はねばならぬ。

藝豫叢島は、其西方に羅列せる安藝灘の島嶼と共に、高縄沼隈・熊毛の三半島の間に横はつて居るが、此等は小藤教授の所謂『墨臺』なので、海岸の水平的肢節に富めること、實に驚くばかり、而も不規則な中に、自ら一定の規則があるので、島嶼は勿論、海岸線も、亦地體の構造と離るべからざる關係を持つて居るのである。



廣島縣立商船學校（備後の大崎上島）

藝豫海峽の間に横はる大崎島は、古來帆船の數が甚多く、大崎船の名が遠近に轟いて居る。從つて航海に關する學術と技藝を授け、高等海員を養成するのは、場所柄として極めて必要。明治三十一年に此學校が起り、既に幾多の卒業者を出して、我海運業の上に、尠からざる功績を擧げつゝあるのは、誠に結構。附屬の練習船は、總噸數百八十噸の三寶丸と云ふ帆船。

内海の島嶼を地質學上から區分すれば、全く花崗岩類から成れるものと、純然たる安山岩のものと、それから花崗岩の上に、安山岩を戴けるものとあるが、藝豫叢島に至つては、大島・伯方島・向島の如き、孰れも第一の部類に屬し、急雨又は溪流の爲に穿たれたる小水蝕谷に富み、山麓、卽ち島嶼の海岸には、花崗岩の分解に成れる白砂を散布し、そして青松を繁茂させて居るから、その景致が

頗る優雅、然るに此等の北西に點綴せる、大崎島、蒲刈島などは、如上の三部類の外に立ち、秩父古生層から出來て居るゆゑ、別に第四と云ふ部類を設けて、之を區分せねばならぬ。

第四の部類に置くべき島嶼は、母陸に在つて、之と同じ地質から成れる山嶽と、一樣の地貌を呈し、連嶺もあれば深溪もあるのみならず、其岩層の走向に從つて排列せる工合は、丁度、安山岩の島嶼が、阿蘇火山脈の貫通せる方向を暗示して居るが如くであるから、誠に面白い。

二　極東の桃源と內海の新桃源

『七里七島、五里五島』とは、藝豫叢島の實際を歌つたもので、安藝の人々の誇りとする所。その叢島は、往昔瀬戸內海の海賊の出身地、根據地だつたので、現在に在つては、海員の產出地と成つて居るが、大三島には、大山祇神社が鎭座ましますので、此島も亦清淨なものと、認められて居たのである。

藝豫叢島の人々が、質朴、黽勉、進取の三拍子を揃へ、產業の啓發から、子弟の敎育に、至るまで、心血を注いで之を遣つて行く次第は、弓削島に、愛媛縣立の、大崎上島に、廣島縣立の、商船學校が建てられて居ることや、大抵の島嶼に、造船所、乃至船渠

があるなどに依つて見るも明亮。そして此等の島嶼は、桃その他の果物の產地なので、大崎下島の港市たる御手洗から、程遠からぬ高丘の如きは、往時、早くも數多の桃が栽培せられ『御手洗桃』の名聲を四方に輝かせて居る。從つて陽春の頃、島上に紅霞を簇らせ、海面から騰る紫霧と和する風光は、俗界を離脫せる仙島でなければ、見ることの出來ぬ風情、賴山陽が之を見て『極東の桃源』とまで感賞したのは、決して偶然でないと思ふ。

內海の新桃源（備後の生口島）

賴山陽が「極東之桃源」と題した藝豫海峽の大崎下島には桃花が少く成つたが、併し海峽の間に點綴せる他の島々を首め、備前や讃岐や伊豫などの到る所に、桃を植へるものが頗る多く、近年、新しい桃源が陸續、出現する有樣。花の季節には酒瓶と鞭當で、桃林に仙人を氣取るものも亦隨つて尠しいが、海上を航行しながら之を眺めるのは、文明的、高雅式の觀桃法と云ふべきであらう。さて生口島は內海の新桃源中の桃源とも云ふべきもので、山の麓を引まわして數十町歩に達する畑に、紅白の妍を競ふ樣は、實に天下の美觀である。茲に掲ぐる景は、生口島の松本果樹園を寫生したもの。

極東の桃源には、不幸、今は桃花が減少して居る代り、近年、生口島に見事な果樹

園が出來て、茲に瀬戸内海の新桃源を出現するに至つた。而も生口島を新桃源と云ふ所以は、單に花の艶なるものが多いのみの故ではない。尾道を距る十浬、糸崎から五浬の此島は、三千の人口を有し、島の首都とも云ふべき瀬戸田に樓門と高塔の物ふりたる舊刹、向上寺があり、南東岸の御寺に、後白河院の皇女が侍女、松蟲、鈴蟲と共に參詣落飾せられたと云ふ、光明坊がある許りでなく、漣波の打寄する汀岸、磯馴松の生ひ茂れる巖窟には、石風呂の設けがあるから、之に浴し、流汗淋漓の姿で、窟内から出て、直に清冽な海水に浴すのは、頗る面白く、其海水浴場で、身を男波女波の弄ぶに任すのも、亦結構。況て、山は綠を滴らせ、水は碧を湛ゆる生口島は、又潮干狩にも善ければ、釣を垂れて太公望を氣取るにも善い。或は凉風に袂を弄ばすべく、或は松籟に耳を澄すべく、悠々自適の妙味を縱にすることが、出來るのである。

即ち生口島は、内海の遊覽場として、天然の要素を具備して居るが、島内に在つては、幾多の産物を擧げ、島外では着實な商工業者や、精勤な海員と成れる、生口島の人々の、衷心からの親切は、特に遊覽者を滿足させるので、詰り人爲の要素をも具備せる譯。我が國の人々は、殆んど全く、結構な新桃源を知らぬに拘らず、米國大

使オブライエン氏が、此島に遊び、頻に之を賞贊したので、或は神戸から快遊船を仕立て、或は尾道などから小汽船に搭乘して、此島に出掛ける歐米の觀光客が、頗る多くなつた爲め、瀬戸田の名が、西洋人の頭に印象されて來たのは、頗る妙と云ふよりも、寧ろ誠に結構と云ふべきである。

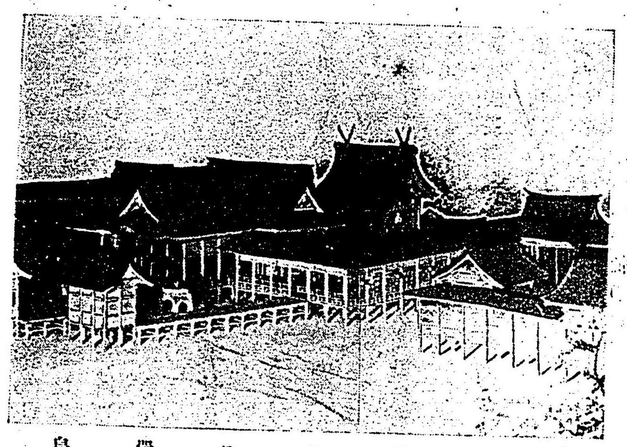
六　盛裝を凝せる嚴島

一　天工と人工の調和

石川丈山の『恭性市杵島姫命、神聖靈蹤益壯哉、廟貌巋然浮海水、怪看蜃氣吐樓台。』其角の『みやしまや燈籠の火にあけやすし』その他、古往近來、幾多の人々に依つて、喧傳賞贊された點から推すも、嚴島の嚴島たる所以は、主として社殿に在るものと見ねばならぬ。

嚴島は叢爾たる小島だけれど、その北岸に鎭座まします官幣中社、嚴島神社の社殿が、結構の美を悉し、建築の麗を極めて居るのを始め、幾多の祠宇と堂塔があつて、此等が孰れも明媚な海に沈み、幽邃な山を負ひ、名區佳境を出現せる工合は、他に比類がないので、流石に日本の三景の一たる、名實を全ふして居る。その三景

彩花の中島彩花島



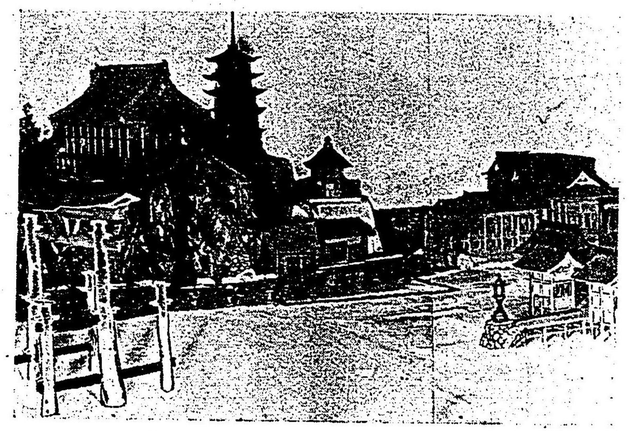
精巧なる嚴島

これは日英博覽會出品の嚴島の模型。尾道の大工高橋信吉が、六個年の苦心に成つたもの。曾て日光の模型を見、嚴島の模型の製作を思ひ立つて、之に着手すると、丁度、日英博覽會の計劃があつて、當局の進めにより、同會に出品することとなつた。斯くて廣島縣廳から數千圓の補助を得、其製作出品を成就したのである。模型は本

は、柔櫓を撑し、輕船を弄びし、往古の時代に還ばれたものゆゑ、勢ひ局部的、箱庭的の風趣を免れない。併し乍ら、穩健和適な內海の、山水や景色の標式をして、多種多樣ならしむる爲め、美麗な景色を廣島灣內に構成せる點は、何處までも推奬に値する次第、實に嚴島は、小豆島と遙に相并んで、內海の島嶼に於ける風光の雙絕と云ふべきもの。

嚴島は往昔御賀島として知られて居た、御賀島と

盛裝を凝せる嚴島



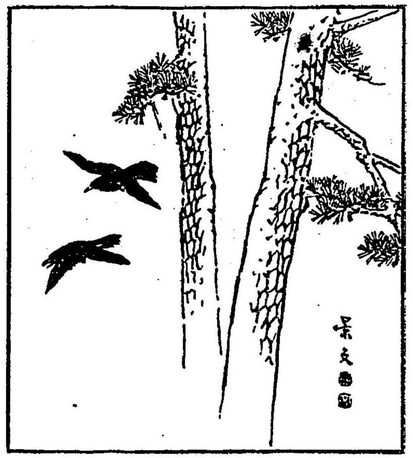
神社の模型

社を首め、客殿、廻廊、千疊閣、五重塔、大鳥居から燈籠、鹿、獅子、鳥居の類に至るまで、木材も金具も、總て精選の材料を用ひ、背景には、京都の畫家藤山春泉氏が、彌山の實景を高さ九尺、長さ二十二間の大屏風に寫して、之を立て廻はし、社殿附近の楓樹や老松などは、造花の師匠佐田豐山氏が、精巧に之を造つたのである。

は、畏くも神武天皇が命名せられたので、この島の優雅な山水を賞で給ひ、屢、行幸あつて、御賀の舞を樂まれ、御感の餘りに、斯く名づけたとは諸社根元記などの古書に見えて居る。要するに嚴島は、神武天皇時代からの勝地に、王城鎭護、萬民歸依の爲め、嚴島大明神を奉祠したので、其後、威德が大に現はれ、朝廷に於ても、歷世厚く尊崇せられるし、海上の神として、四民の歸依も、亦一方ならぬもの、

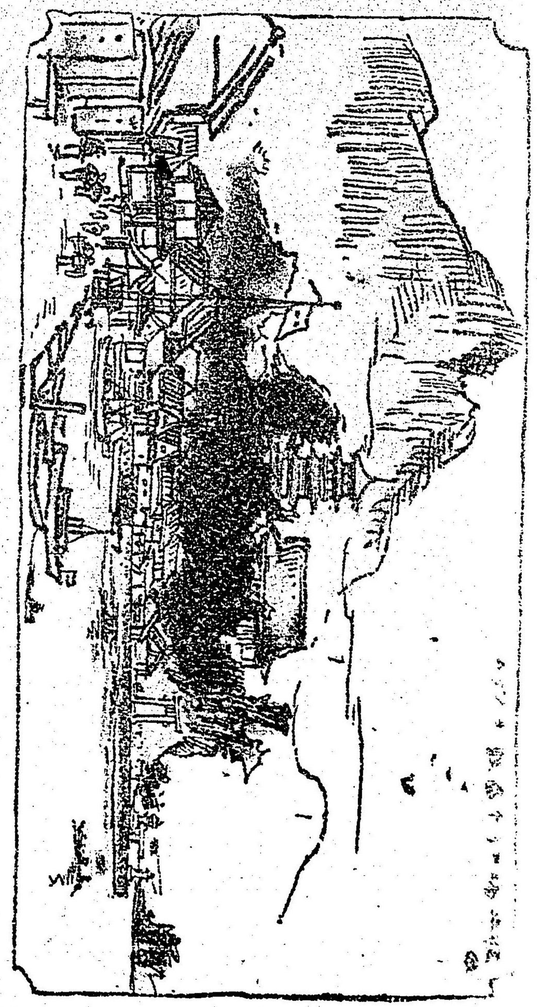
と相成つた。

從つて嚴島が、日本の蓬萊島と唱へられ、清淨な島嶼、神聖な靈域として敬畏さるゝのは、理の當然なので、近古毛利元就が、陶入道を誅つて、中國に勃興の基礎を固めてから、特に人口に膾炙し、而して此島の位置が良く、且人爲の施設が、見事に自然と調和せる結果、遊覽を兼ねた賽者が、愈〻增加する勢ひに至つたのである。



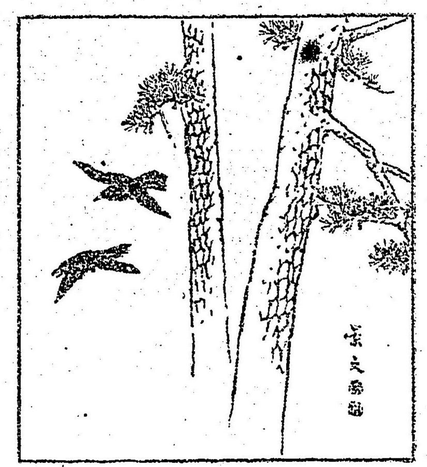
嚴島の神鳥

彌山の頂上には雌雄一雙の鳥が居る。普通のよりは聊か小うて、頗る美、氣格も極めて高尚だそうな。此鈴は嚴島圖會から轉寫したのだが、其由來を聞けば、推古天皇の御宇に、嚴島神社の鎭座所を定むるとき、一雙の靈鳥が彌山から飛び降りて、來る山上に運び去つた。爾後幾年、一雙の雛を生み、一千三百餘年の間、相傳はつて居るが、他の鳥どもは長敬の意を表して、容易に近づきもしないとのこと。迷信として見れば馬鹿らしく、神話と聞けば奥床しい。慣日峯の詩がある、「崢々巒嶽瑞煙霏。遙見黑衣下翠微。巧囀幽鶯日外。翩々時掠客船歸。」



と相成つた。

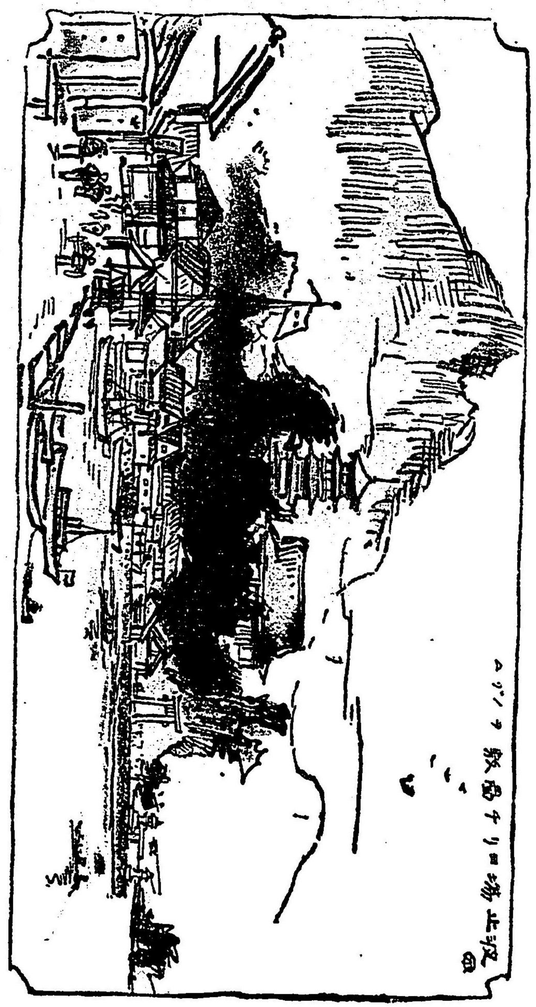
從つて嚴島が、日本の蓬萊島と唱へられ、清淨な島嶼、神聖な靈域として敬畏さるゝのは、理の當然なので、近古毛利元就が、陶入道を誅つて、中國に物興の基礎を固めてから、特に人口に膾炙し、而して此島の位置が良く、且人爲の施設が見事に自然と調和せる結果遊覽を兼ねた賽者が、愈〻增加する勢ひに至つたのである。



宗文秀繪

嚴島の神鳥

彌山の頂上には蝶雄一雙の鳥が居る。遙遥のよりは聊か小うて、鮮る美、氣格も極めて高尚だそうな。此鳥は嚴島國會から特寄したのだが、其由來を聞けば、推古天皇の御字に、嚴島神社の鎮座所を定むるとき、一雙の鶴鳥お彌山から飛び降りて、東を山上に飛び去つた。爾後毎年、一雙の雛を生み、一千三百餘年の間、相傳はつて居るが、他の鳥どもは其敵の意を表して、容易に近づきもしないとのこと。迷信として見れば馬鹿らしく、神話と聞けば奥床しい。僧月峯の詩がある、「峰々鶴遊翔深。道見黑衣下來稽。蘋澤巧啣群目外。關々時擬客題詩。」



ムジンヲ 嚴島ヤリ 湯上流

（注 新水軍 中）

月 島

海の國に於ける海上の要衝に於ける海上の要衝に於ける海上の要衝

若し夫れ嚴島の地質構造の如きに至つては、瀬戸内海の多數の島嶼と、何等の差違もないので、全部、花崗岩から出來て居るが、母陸との間に地盤の罅裂を告げて、そこに大野瀬戸が出現したゆゑ、自ら別個の島嶼たるに至つたもの。

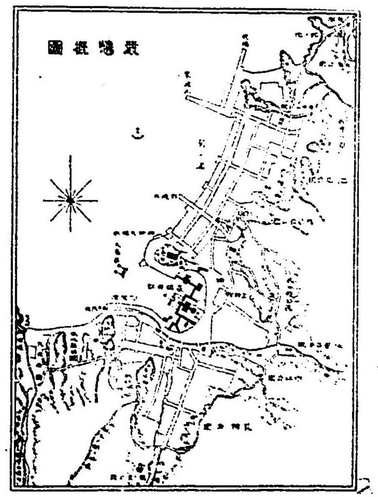
島の中央に聳えて、海拔千五百尺と註せらるゝ彌山(ミセン)(御山)を盟主として、參差起伏せる、花崗岩の山々が海に迫り、所々に狹小な平地や、可憐な砂濱を成生せるは、嚴島の風光の要素であるが、到る處として、古樹老木の蓊蒼たらざるなき中にも松を首め、檜、杉、柯、樟、櫧(シヒ)(Illicium Anisatum L.)椶(ソテツ)(Andromeda Japonica thunb)などの常綠樹が多く、地上には落葉が堆積し、苔蘚が密生して居るから、潺々たる清流が、常に溪澗に集まり、旱天の折も絶ゆることがないので、飲用の外、風致の料に供せらるゝのは結構至極。

斯る有樣だから、遠く嚴島を望めば、其對岸の母陸や、脊後の島嶼の多くが、赤裸裸の兀山であるに對して、山林の濫伐を戒むるかの如くなるに止らず、特に森嚴莊重の趣を呈せるが、更に島内に入れば、内海の方面に於ける原生林の狀態が、容易に看取し得らるゝので、自ら莊嚴の感が起り、且昔を偲ぶの情に絶えざらしひるのである。

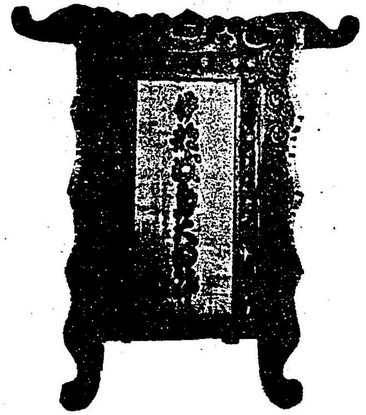
即ち自然の妙が、人爲の美と、互に相待ち相補けて、嚴島を盛裝させて居る譯。

二　嚴島神社の神話と社殿

容姿の端嚴なる、三人の貴女を載せた大船が、紅の帆を揚げ、赤い幣を建てゝ、西の方から進んで來る。內舍人の佐伯鞍職が、小舟に乘つて、御賀島の附近で釣を垂れて居る折柄、その貴女に遇ふて託宣を受け、神意に從つて奉祀したのが、即ち嚴島大明神。時は推古天皇の五年(五九七年)のことだ、と云ふ一種の神話は、長門本記その他の古書に見えて居る。此等に就て考ふるに、文化の東漸を追うて、瀨戸內海に來られた三女神は、即ち嚴島神社の本體で、大阪に近い住吉神社の、三體の祭神と同樣、疑ひもなき海神である。それが共に異鄕から遷座あられたので、固より土着の神でないことも、亦爭はれない事實。



嚴島神社は、延喜の制で名神大社に列せられたけれど、その結構が面目を改めたのは、厚く之を信仰して、社殿や廻廊を造營した、清盛の力に依ること最も大。平家の一門は、屢〻こゝに來詣したが、後白河法皇を首め、高貴の方々も、遙々行幸啓さるゝ勢と成つたので、四海の尊崇が愈〻加はつたとして、さて平家が水軍を輕視せぬから、嚴島に歸依したのか、或は嚴島を信仰する結果、自ら海に關する趣味を得たのかは、暫く措き、嚴島神社と、此社に對する平家の行動が、內海の水運に渺なからぬ進歩を與へた一段は、之を否定することが出來ぬ。そして北條大內毛利尼子など、水軍を重んずる豪族が、之を信仰したのは、素より其所。



大鳥居の勅額(嚴島)

後奈良天皇の宸筆。鳥居が大きい丈けに、額も八尺三寸に七尺八寸と云ふ大さ。木製で銅字。大內義隆が奉納したもの。

島嶼が清淨なものと認めらるゝ事實は、嚴島が之を表白して居るけれど、嚴島

は位置の關係上、母陸に對して交渉する所が、極めて多い爲め、島嶼が古物を保存すると云ふ一點に至つては、大に缺くる所がないでもない。卽ち神社の草創以來、一千有餘年の兎烏を經る間に、時勢の盛衰や、武門の興亡の影響を蒙つて、或は祝融の災に罹り、或は兵亂の害に遇つた。併し乍ら、流石、海中に浮び、母陸と離れて居るだけに、自ら災害を免れ易いゆゑ、比較的多くの古い建物も殘つて居れば、昔の寶物も存して居るのである。

三　遊覽場としての嚴島

『七里七浦七惠比壽』の俗謠と共に、嚴島が天下に知られて居る所以は、西行選集に左の解說があるに依るも、瞭かである。

南北へ三十三間、東西は二十五間の廻廊侍る。潮の滿つる時は、廻廊の板數の下まで海となる。沙のひく時は、白沙五十町ばかりなり。然はあれど、沙のさしたる時まねれば、船にて廻廊の中までまゐるなり。氣高くいみじきこと、たとへなく侍る。

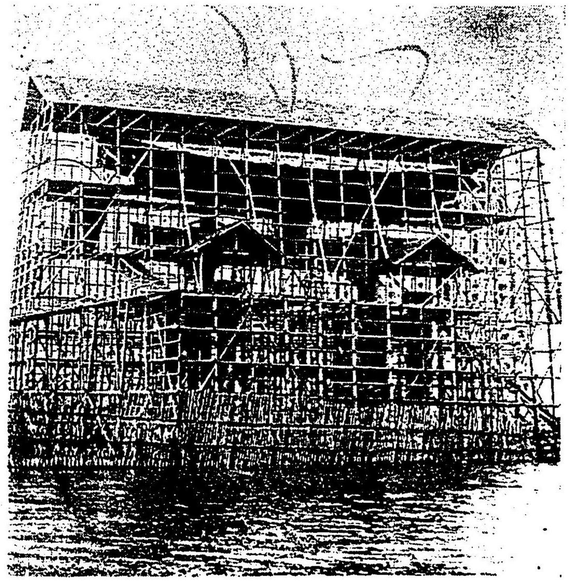
強ひて缺點を擧ぐれば、彌山が餘りに近く聳えて、社殿を壓する樣である爲め、折角の建築物が、如何にも低く感ぜらるゝ外、對岸への距離が近きに過ぎ、社殿四近の平地も、亦狹きに失せるゆゑ、勢ひ全體の調子に、雄大を缺いて居る。されど對

岸に遠からず、海が狹うて浪を起さねばこそ、廻廊も大鳥居も作り得た譯なので、嚴島の特徵が、雄偉に非ずして嫺美にある以上、その山水が箱庭的なのも、亦是非のない次第とせねばならぬ。況て幾多の造營物が、悉く自然の勝景を、巧みに利用してある結果、江山樓閣が相映ずる工合は、實に無限の妙趣を具ふるもの、而も濃淡の宜しきに叶へる設と、寫が、社殿を籠めて、宛然、蜃氣樓の如くならしめ、折からの櫻花が、其間に隱見す

嚴島の鳩

可憐なる幾多の鳩ポッポが、能く人に慣れて、慕ひ來ること斯の通り。名高い鹿にも增して、鳩ポッポを喜ぶものは、決して干供柔のみである まい。此鳩は今から十八年餘り前に、山下豐吉なるものが飼育したのを初め今は六七百羽を算ふるのである。

る春の眺めは、特に佳、夏の暑さに、森嚴なる彌山の下、小波の漣々たる處に、百八十



嚴島の大鳥居

明治四十二年に本社の修繕が竣成したので、更に大鳥居に取掛つた。これは設工事の實況を寫したもの。嚴島圖會に、大鳥居の事が書いてある。曰く「苫先を去ること、七十間餘の海上に建つ。柱高四丈四尺三寸、圍一丈五尺、副柱高二丈八尺、圍り一丈一尺五寸、棟長六丈四尺四寸、梁五丈九尺六寸、左右柱相去ること五間餘。結構高大にして甚壯觀なり。凡そ此鳥居を改作すること數度、先づ平家物語に、清盛鳥居まで改作るとあり。其後、寛元、仁治の間、本社修造の時、改め造り、又弘安元年、應永四年、天文十六年、元文四年、享和元年を以てす。斯く數度の經營、皆北條・足利・大内・毛利、等では本藩（廣島の淺野家）の御寄附なり。」

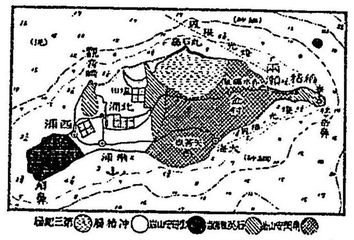
間の廻廊が浮出る樣や、楓葉が錦を織る秋の夕に、明月が中天に懸つて、大鳥居の影が、金波銀波に碎くる姿も、亦素より惡からう筈はなく、朔風が雪を吹いて、樹木から樓閣に至るまで、悉く白屑を飾る冬の風光は、眞に繪畫も及ばぬ景致、

從つて、嚴島の規模や山水が小さい位は、卓越せる風光を首め、幾多の長所が之を償ふて、餘りある譯。且それ彌山の絶頂に登れば、展望の開濶と、山水の明媚を兼ねて居る中にも、瑠璃の盆上に配列せる幾多の島嶼が、遠近に重疊して、際涯を知らぬに至つては、蓋し何人も殆んど指顧に暇がないことを覺ゆるであらう。

この故に嚴島は、世界の公園たる瀬戸内海の、中樞の勝景として、其の風色の保存に努め、造營物や樹木を擁護し、且民家に至るまで、古昔の狀態を存して、山水に對する、調和を破らぬ外、鹿や鳩の保護も怠つてはならず、竹管の水道も、文明的のものに改めねばならぬ、全島に道路の開鑿や、彌山にケーブルカーの架設など、向後、施設すべき事柄は、逐一、枚擧に暇がない位。而もこれ等は、悉く内外の賓客を迎へるに、必要なもののみである。何處までも、多望、多端なのは嚴島。

七　姫島は内海の別天地

『見渡せば夕汐さむし姫島や、小松かくれにかゝる白波』とは、萬葉集の古歌。周防灘と伊豫灘の界に在つて、遙に周防の祝島に對せる一島が、卽ち名も婉しい豐後の姫島で、國東半島の北東端から、三浬の海上に、横はつて居る。其北東に近い沖合が、內海の常航路に當れる爲め、一方里の十分の八の小島である割合に名が高く、僧普明も『大海中分玉女峰。蛾眉翠黛爲誰容。我將明月遙相送。影浦瑤臺十二里。』と吟じたのである。否、古事記にすら、姫島を生んだ神話が掲げられてあるが、翠壁丹崖、危巖怪石の屏立せるもの〻多いのも道理、島の殆んど全體が火山岩と、其分解物に依つて成り、頗る地學上の材料に富んで居る。島內の最高峰、角閃安山岩の矢筈嶽は、形に依つて姫島富士と唱へられ、航海船泊の好目標。



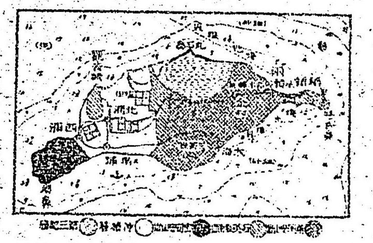
姫島の圖（豐後）

島の人口は約三千と算へらるゝが、甘藷、麥、大豆を主な作物とし、且牧牛を營む農業から林業、製鹽業に至るまでが、殆んど全く婦人の仕事であるだけに、其身體が頗る强壯。彼等が如何に勤勞に勵むかは、耕地一段歩の時價の、五百圓に達する

姫島（豐後）

花彩島中の花彩島

『見渡せば夕汐さむし姫島や、小松かくれにかゝる白波』とは、萬葉集の古歌。周防灘と伊豫灘の界に在つて、遙に周防の祝島に對せる一島か、即ち名も嬉しい豐後の姫島で、國東半島の北東端から三浬の海上に、横はつて居る其北東に近い沖合が、内海の常航路に當れる爲め、一方里の十分の八の小島である割合に名が高く、僧西明も、『大海中分玉女峰、蛾眉翠黛爲誰容、我將明月遙相送、影浦瑞華十二里』と吟じたのである。否古事記にすら、姫島を生んだ神話が掲げられてあるが、翠壁丹崖、危巖怪石の屏立せるもゝ多いのも道理、島の殆んど全體が火山岩と、其分解物に依つて成り、頗る地學上の材料に富んで居る。島内の最高峰、角閃安山岩の矢筈嶽は、形に依つて姫島富士と唱へられ、航海船泊の好目標。



姫島の圖（豐後）

島の人口は約三千と算へらるゝが、甘藷、菱、大豆を主な作物とし、且牧牛を營む農業から林業、製鹽業に至るまでが、殆んど全く婦人の仕事であるだけに、其身體が頗る强壯彼等が如何に勤勞に縁ひかゝる耕地は多く海濱の[illegible]

姫島（豐後）　十倉嶋撮

遠方から白々と見える海岸に沿うて、海鳥の群れが、白波を蹴立てて、飛び交つて居る。姫島は周囲十浬、人口三千餘。

ものがあるに依るも、推知し得るではないか。虚榮心に捕はれ、そして顔色の蒼白に陷れる似而非美人には、これを見せて三省を促したい位。況て姫島の婦人は、性質が從順、節操が堅固な上、情緒が細かなので、流石は姫島の婦人たるに恥ぢぬ。豐後の方面の博勞(バクロウ)が犢を連れて來て、多年、彼の飼育せる牛と交換するに際し、姫島の婦人は愛憐の情を禁じ兼ねて、惜別の涙に咽ぶのである。嗚呼、屠所に歩む牛の爲には、同情ある哀別離苦の泪こそ、實に千萬の經卷にも勝るであらう。

婦人が能く働く個處の男子は、兎角遊惰に流れ勝(ガチ)だけれど、姫島に在つては、決して左樣でない。此島の男子は、極めて海國的なので、片々たる漁舟を操縱して、近海の漁業を營む外、遠く朝鮮方面に出漁して、勇悍な活動振りに、他の漁夫を驚かす勢ひ。島内に貧民がなく、概して有福なのも、亦理の當然である。

姫島の俗謡『姫島の名所と云ふは逆柳、鐵漿石に、柏子水、觀音崎に阿彌陀蝸、浮田、浮洲で七不思議』は、科學上から見れば、何等の不思議もないが、甘藷の粉で蕎麥を作り『芋蕎麥』と唱へて來客を饗するのは、この島の人に特有な料理法。

第八　内海の廣狹と深淺

一　内海の水平的觀察

一　瀬戸と灘の定義

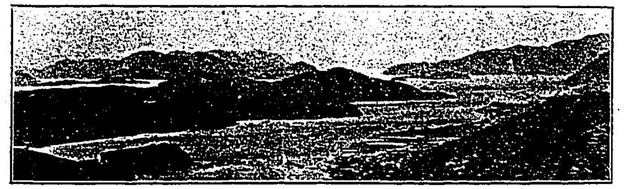
瀬戸内海は、之を區分して見れば、幾多の瀬戸と灘に分れ、之を輳合して考ふれば、再び一個の内海に纒まつてしまうのである。

瀬戸と灘は、南日本に於ける特殊の呼唱。それが又瀬戸内海に多いのは、必ずしも趣味のない事柄でもあるまい。これは丁度、潟と云ふ名稱が、本州の中部以北に於ける、日本海の沿岸地方の、特有と成つて居るやうなもの。

瀬戸と呼び、灘と唱ふるのは、往古の海員の頭腦から出た、一種、形容的の名詞であらう。而して此等の呼唱に對する定義は、明瞭の樣だけれど、その實、不明瞭だから、念の爲め、大槻文彦氏の言海を繙けば、直に左の解說が發見さるゝ。

一、瀬戸　迫門。海の、陸地、或は島山の間に迫りて通ふ處。海峽。

二、灘　波高の略と云、奔流也、汐瀬の意に用ゐたるか、海路の寄るべき湊の遠くして、渡るに難き所の稱。船路の難所「なだの海は荒れやまざらむ、沖津浪、和まむ方の淺き求めよ」洋。



瀬戸の群集（藝豫海峽）

尾道から西南西を望む景趣。近く見えるのが尾道瀬戸で、其左方が向島、右方には尾道市街の一端が顔を出して居る。向島の先が布刈瀬戸で、その左方が三原瀬戸。遙に見える山々は、岩子島に因島、佐木島に小佐木島、生口島に高根島。大三島も辛ふじて眺められるが、右の方の山々は凡て母陸の突端。此等の山々の多くは互に接き合つて居る樣だけれど、其實は何れも狹い海で打切られ、幾多の瀬戸を以て隔てられて居る「うね〳〵した川の樣に見える狹い長い海峽」とチャンバーレン氏が云ふた通りであるが、眞に瀬戸内海獨特の山水は卽ちこれ。

詰り、瀬戸は海峽と同じものだけれど、普通の海峽の内には、ヴレーク海峽や、テヴイス海峽や、モザムビック海峽の如き、數百浬の幅員を有せるものがあるので、此等に比すれば、瀬戸内海の瀬戸は、海峽の模型とも云ふべき、極めて可愛らしいもの。而も特に急激な潮流が、瀬戸の付物（ツキモノ）であるなど、自ら特殊の性質をも持つて居る以上、瀬戸と海峽を、全然、同一視することは、出來難いではないか。

次に灘の意義は、頗る漠然たるものであるが、要するに太洋なるものに就て、別段の觀念を有せざりし、往昔の海員が、開濶な、そして比較的、波の高い水面に向ひ、稱

恐怖の感想を抱いて、呼び做したものであらう。從つて、巨大な船舶が、平然、海洋を横行する今日、灘の名のみ殘つて、其實を喪ふたのは、必然の結果である。況て內海の灘の如きは、所謂灘の中の最も狹隘、最も靜穩なものに屬し、玄界灘や日向灘や遠州灘ほどの廣袤もなければ、波濤もない以上、尙さらのことである。

二　狹隘なる海峽

岬角と灣澳が、極めて多い上に、無數の島嶼が海上に羅列して、複雜を極むる瀨戸內海のことゆゑ、柿本人麿の詠ぜし『大君の遠のみかどのあり通ふ、島門を見れば神代し思ほゆ』の景致が到る所に展開して、無數の瀨戸を作り、時に或はピッカースチッス孃の言の如く『殆んど船の進む路なきまでに、陸地の接近せる所あり、船長に向つて、何處を通るか』と問へば、直ぐ前の島を廻つてその後方に出る』と答ふ』の妙趣をさへ、出現して居るのである。

由良鳴門、阜吸關門の如きは、內海の瀨戸として、最も廣く世に知られたるもの。又備讃瀨戸と藝豫海峽は、海陸の關係が最も密接で、最も複雜なものである。此等を外にするも、尙明石瀨戸は交通の要衝に當れる爲め、音戸瀨戸は潮流の急激なる爲め、來島海峽は船舶の難所である爲め、孰れも名が高いとして、さて內海の瀨

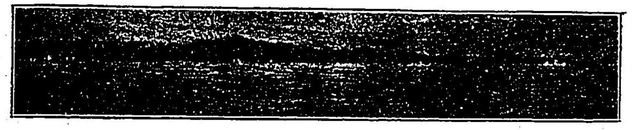
戸は、備讃瀨戸の葛島瀨戸(備前の兒島半島と葛島の間)鴨瀨戸(男木、女木の兩島の間)藝豫海峽の花栗瀨戸(大三島と伯方島の間)長崎瀨戸(因島と生名島の間)安藝灘の睦月瀨戸(中島と睦月島の間)の樣に、其方面の人々すら、格段の注目を拂はぬ程のものや、藝豫海峽の瀨戸田瀨戸の如く、生口島と高根島の間に、手の屆きそうな水道を通ぜるものや、周防灘の本村瀨戸の如く、向島と母陸の間のそれが、沖積地の壓迫を受けて、今や將に消滅に歸せんとするものなどを算ふれば、逐一、列擧することも出來ぬ程である。況んや島と島、又は島と母陸の間には、必ず瀨戸を挾有し乍ら、別に呼唱のないものすら、頗る多々あるに於てをや。

瀨戸內歸は、鳴門、阜吸などの、瀨戸の內側と云ふ、意味を外にするも、尙その中に無數の瀨戸が散在せるゆゑ、飽までも名實が相叶ふて居る譯。

三　比較的廣い海面

複雜を重ね、靜謐を極むる瀨戸內海に、若しも比較的、廣い海面、卽ち灘が散點して居ないならば、蓋し婦女的、細工的の風貌を脫し難いであらう。

併し乍ら、靈妙なる手腕を振つて、造化が構成した內海は、決して斯る片輪なものではない。半島と島嶼に依つて、溝の如く、川の如く、或は溜池の如くに狹められ



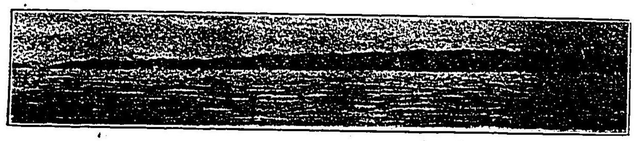
淡路島と小豆島の中央、北緯三十四度二十六分、東經百三十四度三十分、卽ち播磨灘の中央に近い海上から、南西に向つて大觀する景趣。最左方に微しく現はれて居るのが淡路の門崎、其右側が鳴門海峽、其右側が阿波の大毛島の孫崎。それから右方に長く連亙せるは、云ふまでもなく阿蘇山脈で、殆んど中程の海岸に低い山が見える處は讃岐の引田。引田の右の方に白鳥・三本松が連なり、向ふに高く聳えて居るのは笠ゲ峰である。其右の海岸は津田で、馬の鼻・大串崎が共に右方に突出し、四國の最北の岬角たる觀音崎が、汽船の向ふに見え、其左に五劍山が峙て居る。汽船が黑煙を吐く處が、丁度、內海の本航路、その右の向ふに微し計り見えるのが小豆島の釋迦ケ鼻。

播磨灘上から望む國

（著者）

て居る所がある一方には、比較的、擴大な海面を展開して、數個の灘が造られ、內海の標式に、著しい變化を與へて居る。而もそれが、徒らに標緻たる外洋のものとは、大に異にし、眞に適當の廣袤を有せる爲め、自ら締りがあるのみならず、雄大豪宕の間に、佳麗の趣を具へて、或は『長風破波一帆還、碧海遙回赤間關、三十六灘行欲盡、天邊始見鎭西山』なる、藪孤山の詩をなさしめ、以て海國男兒の意氣を壯快、雄健にさせ、或は『播磨潟追門の入日のすゑ晴れて、空よりかへる沖の釣舟』なる、賀茂眞淵の歌を爲し、以て日東人士の精神を絕美、快濶にさせるのは、何處までも造化の技巧、と賞揚せねばならぬ。

二　內海の垂直的觀察

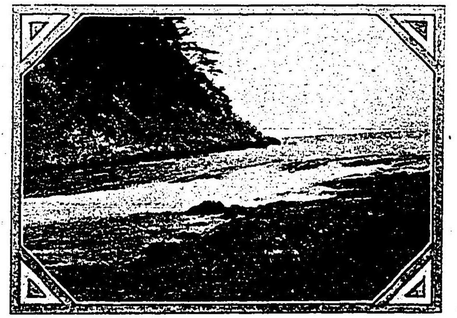


一　外洋の深淺との比較

瀨戸內海は、太平洋の北西海岸の、一大山脈たる日本群島の間に在つて、大地が微しく陷落した處へ、海水を滿へて居るもの、從つて深度の不充分なのは、寧ろ必然の結果と見るべきであらう。卽ち世界の海洋の深さは、平均千九百八十尋（三、六〇〇米突）卽ち殆んど二千尋に達し、陸地の平均の高さの約五倍に當つて居る。然るに內海の深さの平均は十五尋（二七米突）にすら充たぬので、海洋の平均の深さに比すれば、約百三十分の一であるに至つては、頭から話にもならぬ。

更に之を、我國の四邊の海洋に對比すれば、內海の南側なる四國の背面は、近年の發見に係る琉球海溝の北東端に當つて居るので、百尋の線が室戸岬の海岸から、近く二浬內外の處に橫

はうて居る。それから百五十浬も沖合に出れば、早くも三千尋に達する有樣。この海溝の最も深い處は、四千百三尋(七四六〇米突)だが、日本海溝(タスカロラ海溝)の最も深い處は、四千六百五十五尋(八、五一三米突)今日までに測定された結果、世界最深の個所として知らるゝ、南洋のマリアナ海溝は實に五千三百尋(九、六三六米突)である。北太平洋の中央一帶が、平均二千五百七十尋の深度を保ち、概して平坦なるに反し、陸地に近い個所が、却つて、如上の深さを有し、且それが海岸線と並行して居る所以は、全く大地の褶曲に成つたので、これも亦『太平洋沿岸の特式地勢』の中に加へて善い。兎に角、日本群島の外側は、世界有數の深海なので、瀬戸内海とは全然、その趣を異にして居る。



堀越ら急潮(鳴門海峽)

鳴門海峽は其中間に大小數個の島嶼を挾み、幾條にも分れて居る。大毛・島田の兩島が其最大なもので、兩島の相互接近せる間の瀬戸が最も狹い。堀越とは此處の事なので、潮流の酋なる折には、殆んど逆落しの急湍を出現する。島田島の西側の撫養瀬戸とて、矢張り同樣で、彼も是も若鳴門海峽の片割たるに恥ぢない。

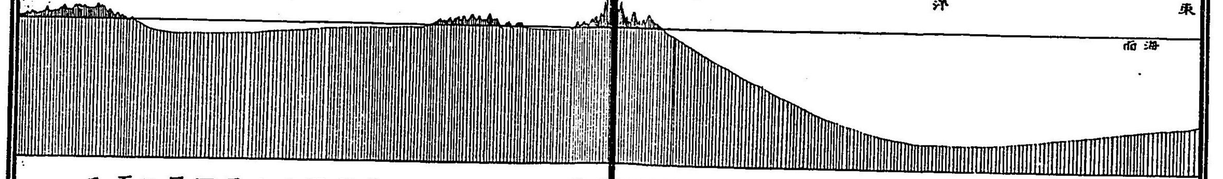
瀬戸内海方面の断面圖を描き其地の高低と海洋の深淺を示す

上海より清國上海に至る

（比例尺　距離は一千万分の一　高低と深淺は五十万分の一）

土佐灣より韓國冬外串に至る

（比例尺　距離は五百五十万分の一　高低と深淺は五十五万分の一）



友ケ嶋より神戸に至る

（比例尺　距離は二百五十万分の一　高低と深淺は五十二万五千分の一）

石槌山より道に至る

（比例尺　距離は二百五十万分の一）

佐賀開より三田尻に至る

（比例尺　距離は二百五十万分の一）

大阪より豊前行橋に至る

（比例尺　距離は二百五十万分の一　高低と深淺は五十二万五千分の一）

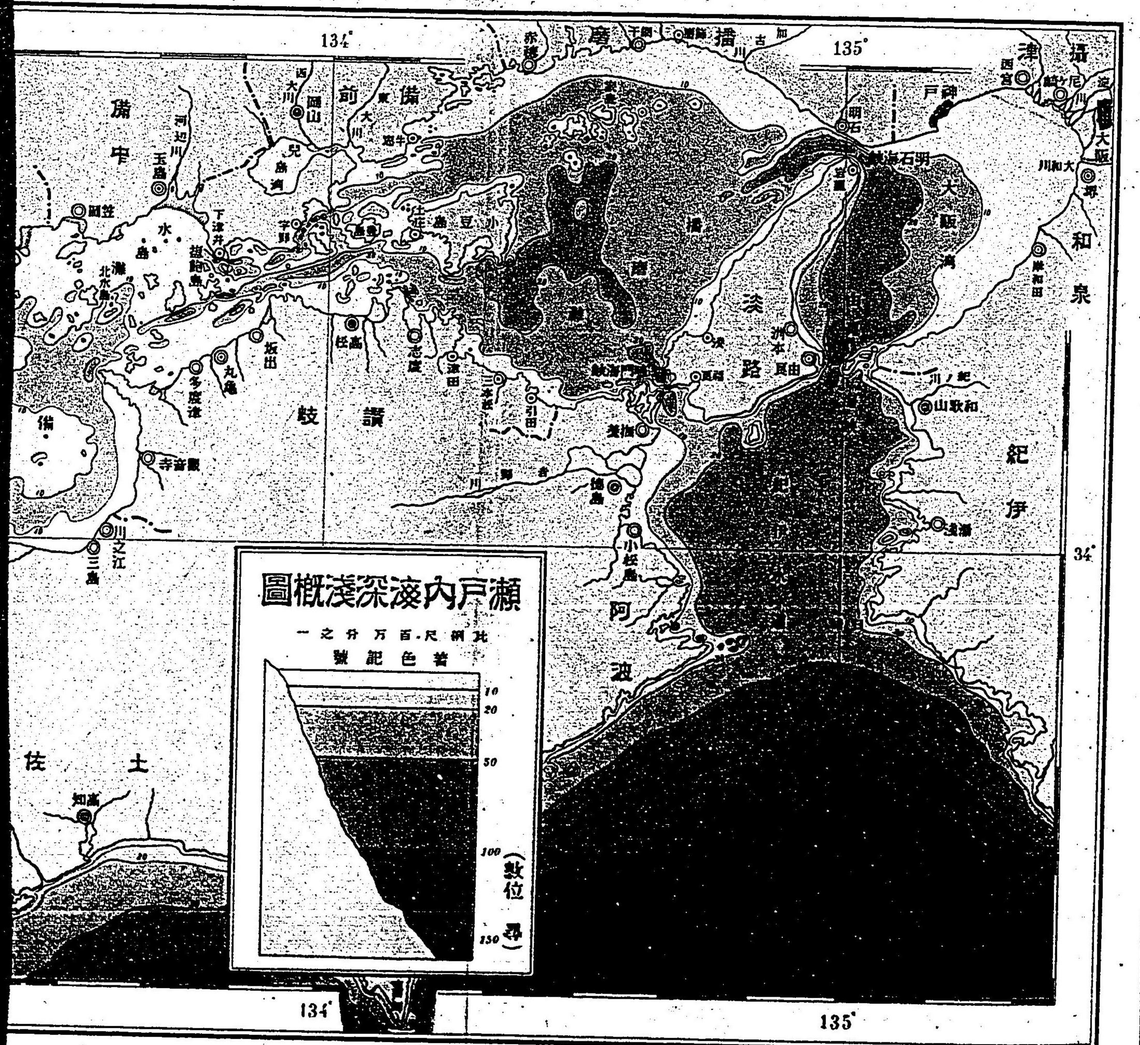
轉じて内海の北側なる、中國の背面、卽ち日本海は如何と見るに、亞細亞大陸の外緣たる日本群島の、内側に位せる淺い陸海だから、素より太平洋の樣な深さがあらう筈は無い。併し其中央から、微しく北西に偏せる、最深の個處は、尙千五百尋と註せらるゝ。今一つ、内海の西側、九州の西なる、支那東海は、陸海の特徴を發揮して、五十尋内外の深さに止まれど、それですら内海の到底、企及ぶ所でない。

要するに、内海は、深さの點に於て、其東西、又は南北の、何れの海洋に比べることも、出來ぬほど淺いので、太平洋の沿岸に位せる、湾曲山脈の凹所たるに過ぎず、宛然、山間の小谷の如きものであることを表白して居るではないか。

二　湖沼の深度との比較

瀨戸内海は、觀察の仕方に依つては、一の鹹湖と見ることが出來るのだから、その深度を湖水に對比しても、格段の不都合はない筈。

琵琶湖の最も深い處は五十尋に達し、内海に在つて、特殊の原因に基づき、特に深く成つて居る部分に相當するが、今日までに測定されたものゝ中、我が國の最深の湖沼は、二百五十尋の深さを有せる、膽振の支笏湖なので、瀨戸内海の絶對の深所として、百六十四尋を錘測させる早吸瀨戸の内側より深いこと、八十二尋



内海の廣狹と深淺

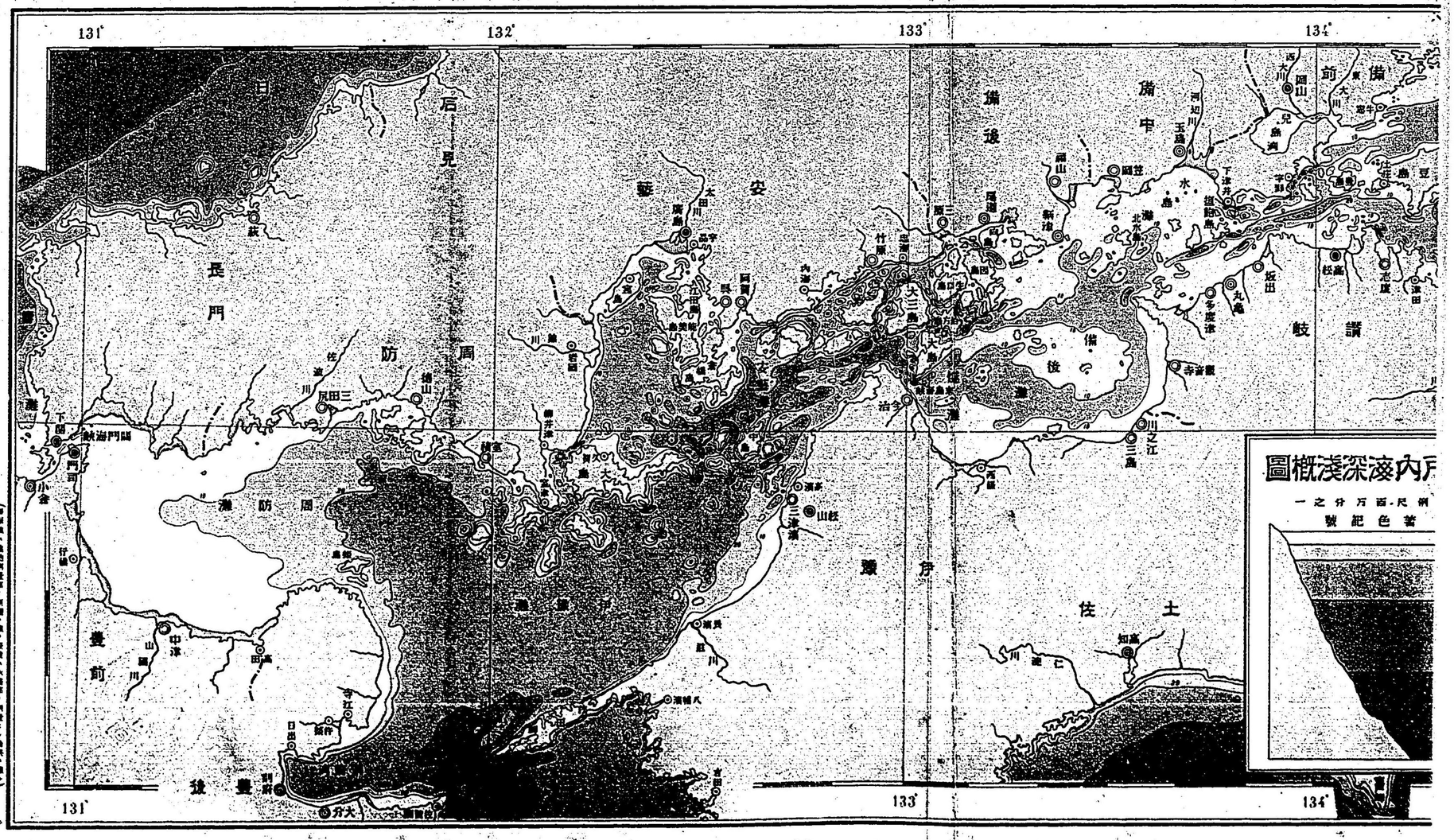
要するに、内海の深度を、沿岸の山嶽、又は内海の島嶼の高度に比ぶれば、其最も深い處すら、高さの若干分の一に止まるので、全般の上から見れば、九牛の一毛とか、提灯に釣鐘とかの、形容詞を用ひねばならぬのである。

瀬戸内海は、意外に思ふほど淺い水渚たるに過ぎぬではないか。

四　海底の傾斜

欧洲大陸が西方、大西洋の深處に向つて沈下せる部分は、平均三度十五分の傾角を保つて居る。これは海底に在つては、頗る急傾斜をなせるものであるが、先年、チモール島の北岸には、局部的ながら十九度と云ふ、驚くべき傾角を有せる處すらあることが判つた。これこそ實に、世界に於て、最も急傾斜の海底であらう、と唱へられて居る。

我が國の近海で、最も急傾斜に沈下せる個處は、蓋し臺灣の東岸、花蓮港の北方であらうけれど、其度數は未だ明瞭せぬとして、さて四國の南側は、平均二度十五分の勾配であり、三陸から北州に亙る海岸は、平均一度五十二分の傾角を保つて居る。又日本海の側は、平均僅に零度六十分の勾配で低下せる次第、之を概言すれば、日本群島の外側の海底は、地勢が急峻だけれど、其内側は、緩慢な譯である。

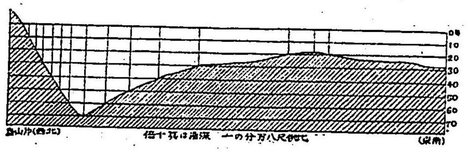

131°
132°
133°
134°
長門
防周
安芸
備後
備中
備前
讃岐
伊豫
土佐
豐前
豐後
瀬戸内海深淺概圖
縮尺百万分之一
著色記號

内海の垂直的観察

富士山の北側の登山道、吉田口から馬返に至る間の傾斜は、四度四十一分であるが、登躋者は左程に思はぬ位、内海の島嶼には、二十度以上の斜面に、畑を拓いて、之を耕作するものが多い。兎に角、陸上に於けるが如く、海底にも亦傾角があるに相違ないけれど、海底の勾配は、頗る緩漫、なのが普通である。

然るに内海にては、傾斜の頗る急峻な個處に乏しからぬ、そして深度に乏しい内海のことゆゑ、自ら其深淺と、至大の關係を持つて居るのである。

瀬戸内海に於て、海岸から海底に至る傾斜の、最も甚しいものを擧ぐれば、先づ以て指を安藝灘と、伊豫灘の北東部に屈せねばならぬ。即ちこの兩灘を劃せる海峽の一たる諸島（モロシマ）瀬戸は、情島（ナサケジマ）と諸島の間に位し、其最狹部は、僅に四町のみ、而も瀬戸の中央の水深は實に五十八尋で、藥研の如き形をなせる、兩側の傾斜は、二十二度を下らない。これを内海の方面に在つて、最も急峻な陸上の斜面の一たる、屋島山の側壁の二十八度に對比するも、及ばざ



片山島（伊豫灘の北東部、周防の大島の東方）の近海の深淺を示す圖

ること僅に一歩と云ふて善からう。今、試に急勾配をなせる海岸の二三を列挙すれば、左の如くである。

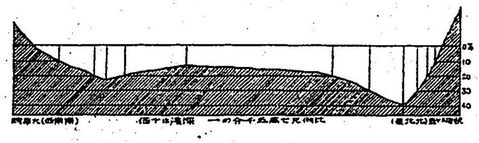
一、	諸島瀬戸(周防の大島の東方)	二二度
二、	佐田岬の西方(早吸瀬戸の内側)	九度七
三、	早鞆瀬戸(門司の部崎の側)	八度五
四、	猫瀬戸(藝豫海峽の下蒲刈島の北側)	七度
五、	友ヶ島瀬戸(由良海峽の沖の島の北西)	六度四
六、	來島瀬戸(大島の南西端)	六度三
七、	長瀬戸の一部(大崎上島の東端)	六度三
八、	鞆浦島(備讃瀬戸の牛島との間)	四度五
九、	釋迦ヶ鼻の南端(小豆島)	四度
十、	別府灣の南西部(別府の東方)	二度三

兎に角、内海に於ける海底の傾斜は、極めて短いので、日本群島の外側のそれが、一走、直に數千尋の深處に達して居るなどの如きことこそなけれ、其角度に至つては、珍らしいほど、大なるものに乏しからぬ。これも亦瀬戸内海式。

五　海底の凸凹

陸上に凸凹があると同樣、海底にも矢張り凸凹があるので、海底の山嶽の最も

高い部分が、水面に現はれて島嶼と成つて居るのは、勿論の話である。從つて海底には、陸上に於けるが如く、垂直的の肢節に富める個處もあれば、之と反對に、單調平凡な部分もあるが、太平洋の海底は、概して後者に屬し、太西洋は前者に近い方。



播磨灘の南西隅大串崎と釋迦ヶ鼻の間の深淺を示す圖

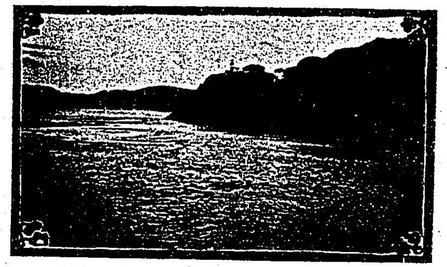
轉じて、瀬戸内海の狀態は如何、と見るに、十尋、乃至三十尋の深度を保ち、海底の平坦なのが一般で、開濶な灘は、凡て此部類に屬する。然るに狹隘な瀬戸、又は岬角の趾根が、却つて凸凹に富み、そして比較的深度の大なる場所もあるので、安藝灘を首め、伊豫灘の北東部や、備讃瀬戸は、海面の上に現はれて、島嶼と成れるものが多いだけ、海底の肢節も、亦極めて複雜峰巒と見るべきものがあれば、溪谷と認むべきものもあり、平野があれば、溝渠もあると云ふ始末。これは寧ろ理の當然と見るべきであらう。

六　灘の海底は極めて平凡

内海の灘は、大地が比較的廣く陷落した部分、また瀬戸は、狹く沈下した個處な

ので、何れも其兩面の陸地を離れて、局部的の變動を起した結果に成つたもの。

海底に存在せる、大地の罅裂線は、之を目擊することこそ出來ざれ、播磨・備前・周防・讃岐・伊豫に屬する、内海の沿岸地方と、其海上に散點せる島嶼に、玄武岩や、石英粗面岩や、安山岩の樣な、火山岩が、片麻岩や、花崗岩の如き、舊い岩石を破つて、迸發した工合と、内海の廣狹や、深淺を對照考察すれば、其間に至大の關係があることを知得し、延いて海中に於ける、大地の罅裂線をも、推斷することが出來る譯。



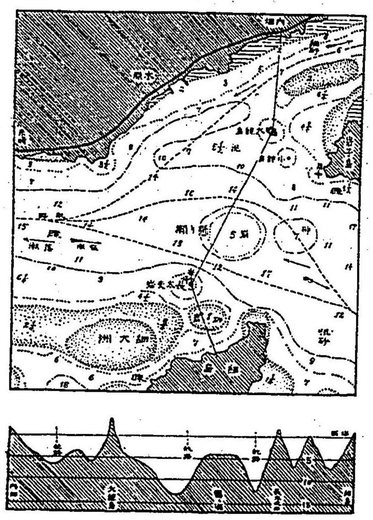
中渡水道（來島海峽）

内海中の難所として聞こゆる來島海峽の中央、中渡瀨戸を寫したもので、正面に見えるのが中渡島。島上の建築物は來島海峽の燈標設備の一で、石造圓形白色の燈臺。明治三十三年から點燈して居る。燈種は無等不動白色、光達距離九浬。それから此處には別に潮流と船舶通航の信號所が置かれてあるので、さしも の難所すら、安全に通航することが出來るのである。

内海の灘は、其海底に指したる傾斜や凸凹がなく、大體に於て極めて平坦なのである。故に今、假に海水の面が、三十尋も下降したとすれば、瀨戸内海の大部分は、悉く乾燥せる陸地に變じ、中國と

四國の間に、廣大な平野を出現して、深い瀨戸の部分だけに、辛くも其痕跡たる、湖沼を殘すのみとなるに相違ない。

灘の海底に對しては、陸上に於けるが如き、風化水蝕の作用、殊に流水の削剝作用を受けないので、海岸の波濤と、遲緩な潮流が、幾分か之を變化させる許り。從つて、陸上から搬出せる物質を、沈積せしむる中にも、之を深い處に集中するから、遂に現在の如く、殆んど平野の狀態をなせる、海底に變じてしまつた譯である。



長瀨戸の一部分の平面及び斷面圖

七、瀨戸の海底は頗る複雜

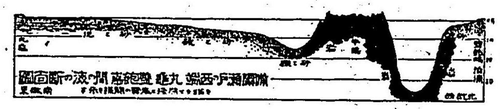
海水の削剝作用と、運搬作用は、單に海岸線や、水面に於て働くのみならず、又その下部に及ぼすことも尠からぬのである。

凡て水は深度の加はるに對し、略ゞ正比例を以て其壓力を增加する。卽ち水面以下三尋の處では、約八封度の壓力に止まれど、二十尋の處に至れば、五十餘封度となり、三十尋では八十封度程に進むのである。尤も深度が加はれば、潮流の速度は、遲くなるのが普通には相違ないけれど、其代りに壓力が加はるから、浸蝕の力は、却て强大を加へざるを得ぬ筈從つて其作用が比較的深い部分に及ぶのも、亦觀易い道理であらう。

瀨戸內海の潮水は、地理的の關係に基づき、特に急激に流るゝのである、而も瀨戸の部分は、孰れも比較的擴大な海中から、輻湊して來る潮水を受け、之を通過させる爲め、勢ひ潮流が急激と成らざるを得ない、其結果、浸蝕作用や、運搬作用も、亦自ら激烈に働くのであるが、早吸瀨戸を首め、來島、鳴門、明石などの、瀨戸の通有性として、最も狹隘な部分又は其附近の海底が、必ず特に急傾斜を作り、そして特に深く窪んで居るのは、主として如上の理由に基づけるもの。

三　瀨戸內海の底質

一　底質の概括的觀察



輓近、海洋學の進步に連れて、海底の狀態も、亦著しく明瞭と成つて來た。

深海の底質は、微細な泥土や、原生動物の屍を堆積し、殆んど全く礦物質のみから出來て居るので、海洋學上の所謂、海產堆積圈に屬する譯、斯る海洋は、勿論、陸から遠い場處に屬し、內海などには、此種の海底が絕無である、のみならず、主として陸地からの吐出物を用つて成れる、所謂、陸產堆積圈の側に在つても、深海區たる五十尋以上の部分は、早吸その他、二三の瀨戸の附近で、僅に之を認め得るに過ぎぬ、但內海の瀨戸の附近は、潮流と地勢の關係上、殆んど全く泥土を沈積せしめないのである。

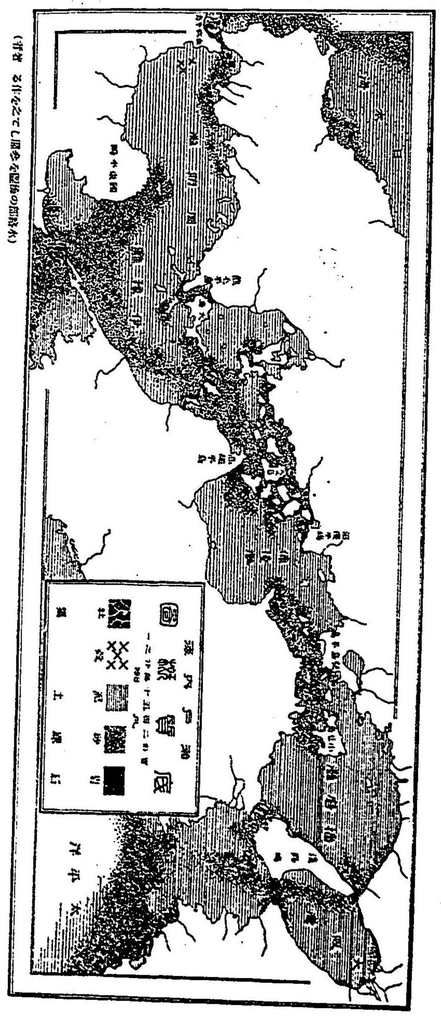
陸產堆積圈の動物區たる、二十尋以上の個處は、內海に在りて、比較的、深度の大なる伊豫灘を首め、大阪灣、播磨灘、安藝灘、周防灘に分布して、砂泥を沈積し、且植物よりも寧ろ動物に富んで、其特徵を現はして居る。次に二十尋以下の淺海に至つては、水島灘、備後灘、燧灘の殆んど全部の外、播磨灘、大阪灣、周防灘、廣島灣に亙つて、內海の大部分を占め、盛んに土砂を沈積し、固有の海草を繁茂させて居るが、潮の滿干の兩

内海の廣狹と深淺

線の間に横はり、直接波濤から沖積と浸蝕の兩作用を受けつゝある海濱區に就ては、今更、喋々する程のこともあるまい。

以上の言は、概括的の觀察に過ぎないが、内海には特に『瀬戸内海式』の底質を成せる個所が多い、卽ち燧灘の北部、大島の東方に當つて、東西に長く『燧泥帶』がある のを首め、海底が平坦で、潮流が緩慢な個所は、概して泥土から成り、多少の凸凹があり、且幾分か急激な潮流のある部分は、大抵、砂礫から構築されて居る。此等の間には勿論、貝殼や骨片などを交へ、或は殼類のみを堆積せる場所もあるが、由良・鳴門・明石・來島・早吸など、多數の瀬戸は、海底の傾斜に富み、深く窪んで居るゆゑ、自ら泥土の沈積を見るべき筈なれど、實際は却つてこれを流し去り、一般に岩石を露出し、左なき處も石塊の壘々たるものがあるのは、全く急激なる潮流の運搬作用と、削剝作用に依れるもの。

内海の地理的の狀態は、先づ以て遺憾のないまでに、判つて居るので、其深淺や凸凹は、殆んど掌を指す樣だけれど、之が地質學的の狀態に至つては、何分にも水準線以下のことだから、全く手の着け樣がないと云ふ始末。從つて、大體、平坦な個所は泥、凸凹ある部分は砂礫、最も急な傾斜をなせる地點は岩石、而もその岩種の



（地質調査所の調査による）

如きに至つては、單に陸上の岩種から推せば概して花崗岩に相違ないことが判る。と云ひ得るに過ぎぬのである。

若し夫れ早吸瀬戸の海底、急潮の出入が絶えざる場所に、一面の牡蠣が棲息せるに至つては、蓋し何人も意外に感ずる事柄であらう。

二　砂洲と險岩

内海の海上旅行に際して、最も風光の嫵美を覺ゆるのは、云ふまでもなく、島嶼が碁布し、瀬戸が連續して居る部分である。

斯る個處は、旅行者から喜びを以て迎へらるゝに反し、船舶の通航には、充分の苦慮と戒心を拂はねばならぬ。日本海の樣に、垂直的肢節の尠い個處には、島嶼も少なければ、沙洲や險岩も稀だけれど、内海は全く之と反對で、廣狹と深淺の、端倪すべからざる部分は、特に甚しい。左に砂洲と險岩の數個を列擧しやう。

一、平磯と高磯　大阪灣の北西隅、須磨の西方の海岸から、程遠からぬ所に在つて、共に水面の下に隱れたる岩礁。

二、鹿の瀬と室津瀬（モロツ）　播磨灘の北東端に近く、明石瀬戸の西口の、左右に横たはり、共に頗る長大なもの。

三、中の瀬とオゾの瀬とカマ瀬　孰れも備讃瀬戸に在つて、中の瀬は男木島の西北

西に、ボソの瀬は大槌島と柏島の間に、カマ瀬は女木島と屠崎の間に頑張つて居る。

四、白瀬と白岩と海士瀬　共に來島瀬戸に在つて、白岩は名の通り白色の岩礁で、高さが海面上十三尺。他の二つは、低潮に干出する厄介物。

五、長太夫岩と懸り瀬　藝豫海峽の布刈瀬戸の北西端に聳つて居る。前者は低潮に干出するけれど、後者は純粋の暗礁。

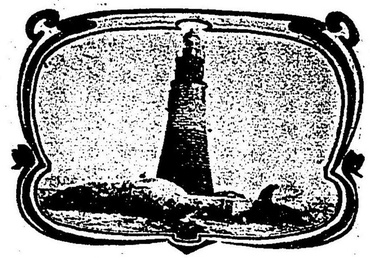
六、二つ石と暗岩と九尋堆　二つ岩は安藝灘の齊島の南西に峙つて顯著、他は齊島の南東に隠見して居るもの。

七、平瀬と權現瀬　早吸瀬戸の高島に近い處に在つて、附近に礁脈が横延して居る。

その他鹽飽島の波節岩・沖の洲・尤の洲・來島瀬戸の白石・この瀬・廣瀬・内瀬・三原瀬戸の能地堆・白石礁・廣島灣の白石・婆ゲ石・伊豫灘のフグリ岩・クダコ岩・根なし岩・關門海峽の與次兵衛岩・中の洲など逐一之を擧げることは到底不可能である。

此等の險岩は、全く島嶼の小なるものに過ぎぬが、砂洲に至つては、別個の理由に依つて出來たのである。その理由を、備讃瀬戸の中の瀬に就て概說せんに、東方から二浬、乃至三浬の速度で流るゝ漲潮が、男木島の爲めに兩分せらるゝ結果、同島の南北の海底は、削磨作用を受けて、深度を增す反對に、島の蔭に當る個處には、潮流の停滯を生ずるので、自ら砂泥を堆積せざるを得ない。中の洲が男木島に隱

れて、漲潮の流るゝ方向に延張せるは、之を說明して居る次第。さて又この方面の落潮は、矢張り二、三浬の速力があるけれど、中の洲は男木島の被護に依つて、其迫害を受けぬのみならず、落潮の力に依つて男木島の東側にも、亦多少の砂洲が出來て居るのである。



白石と其掛燈立標(廣島灣)

この掛燈立標は高さ六十尺の石造、一千燭の光力で十三浬に達する、白色二閃、紅色一閃と云ふ、見事な閃光反射の五等燈塞が、電氣の力で自動的に活動する。白石と云ふのは阿多田島の東南東に在つて、干潮に露出する花崗岩の三大礁、センガイ岩(根なし岩)西のコバンなどと共に、安藝灘上の最も危險なものとして、航海の艦船から恐怖せられて居たが、此等には凡て掛燈立標が建設せられたので、今は却つて海上の好目標たるに至つたのである。

内海の瀬戸は、之を說明して居る次第。さて又この方面の

察すれば、頗る面白い現象があることを、認識するに難からぬ。

三　海底に沈める物資

モナコ國王殿下が、倫敦の皇立地學會で演述された中に、左の一節がある。

「海底は實に生物の一大埋葬場で、幾十萬年の久しい間、無數の生物の屍を堆積し來つ

た場所である。斯る場所を探究するのは、無益な業の樣だけれど、此處には文明の驚くべき產物や、世界の各隅から集つた福祿と、快樂の追求者を滿載せる、大船巨船も沈沒して居る筈。兎に角、海底の素質は、幾萬億の屍から成生して居るが、併しこれは尠しも厭ふべきでない、そは此處で恐るべき腐敗、霉爛の光景を見ず、却つて古跡に所謂「人は塵芥より出でて塵芥に歸す」を想起させるからである。

この言は、主として潤大な海洋に就ての觀察であるが、瀨戸內海とても、大體に於ては、矢張り之に異らぬものと見て善い。仍てその例を擧げやう。

一、陶器の蛸釣と其由來

藝豫海峽の來島瀨戸の北西、梶取崎(宮崎島)に近い、唐津礁の沖合の海底からは、時々、優雅な陶器を拾ひ揚げる。當初は偶然、漁網に掛つたものらしいが、現今は特に蛸釣法を用つて、之を拾ふのである。蛸釣法と云ふても、素より蛸そのものを釣るのでなく、蛸の脚に、細い繩と適當な錘を結び付けて、海中に放ち、蛸が海底に沈んで、自ら逃れやうとて、固く陶器に吸着する機を察し、繩を引き揚げて、陶器を採るのである。陶器が何故、海底に沈んで居るかに就ては、別段の記錄もないけれど、口碑の傳ふる所に據れば、太閤が豪興として名高かつた、京都の北野の茶湯時代を過ぐること十餘年、その臣、織田有樂齋を諸國に派遣して、普く喫茶用の陶器を需めさせた。有樂齋は、更に家從、上田藤右衛門なして、九州の各陶窯に命じ、珍品、奇器を燒かしめ、之を船に積んで、歸路に就いた。然るに唐津礁で風待して居る折、意外にも太閤薨去の悲報に接した藤右衛門が、哀悼と落膽に依つて、半狂の體と成つたに乘じ、惡惡な船頭が、夜間、竊に貴重な陶器、若干を奪ひ、故らに船を沈めて、蹤跡を晦ました。藤右衛門の落膽と

悲嘆は、茲に至つて極度に達し、その罪が到底、死を免れぬであらうと思ひ詰めて、厳然に立ち、海上を睨みつゝ、屠腹したのは、慶長三年(一五九八年)十月十九日。此處の一小社、唐津明神は、實に其靈を祭つてあるもの。地中海の薔薇海峽の南岸、チュニスに近い沖合から、海綿の採集者が、希臘時代の盃や、彫像などを拾ひ揚げるのは、恰もこの陶器と同樣で、位置の關係に至るまで相互酷似せるに至つては、內海と地中海が、何處までも雙對的な徵證と謂べきだと思ふ。尤もチュニスのは、往昔、海岸に在つた市街が、地變に遇つて、海中に陷沒した結果なので、伊豫の陶器とは、其原因を異にして居ることを、附言して置かねばならぬ。

二、引揚げざる數多の沈船

英國の商船、ラヴェンナー號と衝突して、來島瀨戸の附近に沈沒した我が國の軍艦「千島」のことは、暫く云はぬとして、瀨戸內海には、往年、沈沒の難に遇つた船舶中、今に引揚げられないで居るものが頗る多い。神戸の和田岬の西南西、駒林の海岸に近い沈船、明石海峽の江崎の南西、室津の瀨の北東の沈船、多度津と鹽飽島の中程の沈船、水島灘の南方、高見島と佐柳島の間の沈船、備後灘の百貫島と横島の間の沈船、姫島の北西、周防灘に於ける二隻の沈船、長門の宇部岬の南東に當る周防灘の沈船などは、孰れも五六尋、乃至二十二三尋といふ、極めて淺い海底に在るため、煙筒又は船體の一部が、水面に隱見し、或は水面に近く隱れて居るので、船舶の航行上、障害を與ふものを擧げたに過ぎぬ。勿論この外、幾多の沈船が、內海の底に横はつて居るのである。此等は概して、航路の標識が、現在の如く完備せず、且航海の技術も、亦今日の樣に發達せざりし折、夥多の船舶中、偶々不慮の過失を生じた結果の遺物に外ならぬ。從つて海底に沈船があるからとて、直に海洋旅行を危難に思ふなどは、恰も火災な

氣遣つて、家屋に住むのを怖るゝと同樣、愚の極である。明治三十七八年の戰役に當り、日本海や黃海には、幾多の經船が沈んだが、これは例外とするも、海底に沈船の尠なからぬことは、云ふ迄もない話。兎に角、物資は一旦、沈沒したが最後、從來の人智を用つては、之を引揚げ得ない場合も多いのだから、海底には寶物や珍品が、殆んど無量に存在して居るに相違ない。

四　瀨戸内海の灘

一　女性的と男性的

『地球を主宰するものは水也』と云ふ、ミセレー氏の言は、森浸たる太洋に出でれば、攝取し得ない感想だけれど、内海の廣い部分たる、灘を航行するも、尙慥に濶大の趣を覺え、延いて元氣を發作し、頭腦を新鮮にし、憂苦を忘れ、希望を浮ぶるに足るゆゑ、自ら俗界を脫して、自然の懷に入つたかの如き、心地がするのである。

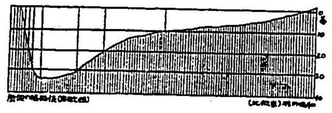
即ち灘は、能く人類と結合する、偉大な神秘力を持つて居る譯であるが、素より外洋とは異り、靜謐、穩容の平和的表徵もあれど、一旦、大風の起るに會へば、忽ち怒濤を躍らせ、狂瀾を奔らすのは、蓋し海國男子に向つて、何事かを敎訓するのであらう。時々戰爭がなければ、人心の腐敗を免れぬ以上、折々灘の面に白馬を馳らせ

るのは、人間に生氣を與へ、氣宇を練らしむるに、多大の效果がある次第と思ふ。

併し瀨戸内海は、其廣狹が宜しきに叶へる、丈けに、較、大に失せる地中海が、全然、外洋に於けるが如き、險惡な風濤を感想するなどの、缺點を持つて居るのとは、大に趣が異ふので、此點は特に結構と云はねばならぬ。

灘が陸地や島嶼で圍まれ、そして深度の小なる點は、如何にもペンク敎授の說の通り『灘式』たるを失はぬとして、灘式の個處は、之を山水の上から見れば、溫雅、嫺美、幽邃と云ふ、女性的の氣味を脫し難からうとする內海をして、自ら雄渾、壯大、開濶の男性的、風貌を呈せしむる點に於て、飽まで之を推奬すべきである。

苟も生を海國に享くる以上、天賦の灘を利用して、雄飛の基礎をこそ固むべけれ、之を怖るゝが如きは、勿論、海國男子の資格を缺けるもの。



大阪灣の斷面圖

二　大阪灣の概觀

伊藤春畝公をして『輕舸如飛截水行、風烟絕處是華城、欲雨及晴晴未定、摩耶山上片雲橫』と賦せしめた大阪灣は、和泉灘、又は茅渟海とも唱ふるが、茅渟は和泉の別

内海の廣狹と深淺

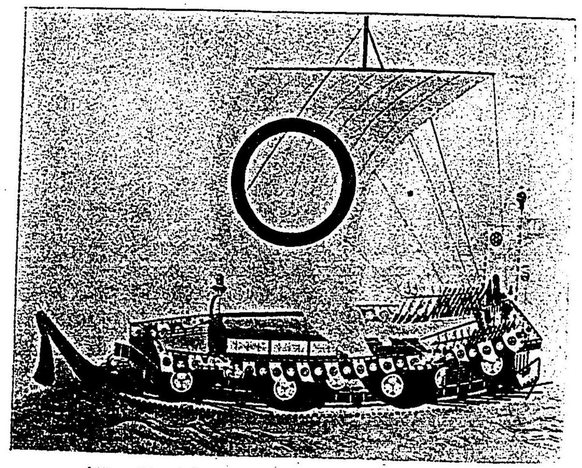
名。三十二浬の長徑を用つて、完全な圓形を作れる大坂灣は、內海の東の突詰めに當つて居るが、其東岸の境に就て、和泉國名所圖會の敍述は、左の如くである。

堺は堀河泉の三州の堺なり。享保天文の頃より、此津へ諸國の入船多く、唐船、蠻船入津して、貨物を交易すること、他境に此類なく、大に繁昌の要津となる。

由來、大阪灣は位置の關係上さしも幾多の歷史を演じ來つた瀨戸內海中、特に歷史と深い關係を持つて居るので、神武天皇の浪速の古事は云ふも更なり、戰略の側から見るも、產業、乃至文化の點から見るも、大阪灣は我が國の全般に對して、貢獻する所が極めて多い。從つて、啻に我が國の舊い港市たるに止らず、又實にその最大の港市たる大阪の外、我が國第一の對外貿易港たる、神戸を有するのは、理の當然と見るべきであらう。

大阪灣の海底は、明かに灘式の特徵を呈し、極めて平坦、且深度に乏しけれど、淡路に近い部分は、三十尋內外の深さがある中にも、由良、明石の兩海峽に近づけば、著しく深度を增して居る。これは云ふまでもなく、兩海峽を出入する潮流が、自ら淡渫作用を營む結果なので、此方面の潮流の速度が三浬に達することあるは、之を表白せるもの、而して大阪の附近が、特に淺く、且つ其海底が、概して泥質なる所

瀨戸內海の灘



大名の御召船（德川時代）

四國から九州に至る方面の諸藩は、大抵、御召船と云ふを備へ、參勤交替の爲め江戸に往來する折、內海だけは主に此船に乘つたもので、搖籃の室津は其主要な發着點だつた。此圖は高松の城主松平讃岐守の御召船で、飛龍丸と名づけられて居たもの、原圖は日本海運圖史に在るが、船の大さは長十六間、幅四間半、十八反の帆だけれど、主として櫓を用ゆるものゆゑ、船が低く幅が廣い中、船首材の幅が特に廣く、舳サガリがバラサガリで、全體に極めて美麗な裝飾を施してある。御召船の大さは藩によつて一樣でないが、櫓は大抵三十五挺から七十挺位までを用ひたものらしい。

して京濱から房總半島を眺むる景致は、阪神から淡路島を望む風光に異らぬ、併

以は、主として淀川の泥土を沈積せる爲め。

人文の上から之を觀れば、大阪灣は東京灣に似て居る。卽ち大阪は東京に、神戸は横濱に相當するが、海底の深度に乏しいことや、灣內に島嶼の無いことも、亦符節を合せたかの樣そ

し乍ら、彼には白砂青松の佳趣がなく、四圍の山嶽に於ても、亦到底これに及ばないのみならず、大阪灣の口には、友ヶ島の愛すべきものがあつて、それが軍事上、天然の門(カンモン)を作れるに反し、東京灣の口には、人工の島嶼を築いて、漸く其缺陷を補ふの擧に出でしめた。卽ち兩者の優劣は、固より同日にして語るべきではないと思ふ。況んや大阪灣には、別に明石海峽を有せるに於ておや。

三　播磨灘の概觀

蟹甲の形を爲し、三十浬の直徑を有せる播磨灘は、泥質の海底で、凸凹と深度に乏しい。海岸線は、播磨の東方に平滑な砂濱を連ぬる外、概して長汀曲浦と斷岸絕壁、頗る複雜な肢節を作つて、內海の海岸線の特徵を現はせる中にも、備前の片上灣は、其附近の島嶼と相待つて、殊に趣味ある狀貌を呈して居る。

播磨灘の漲潮は、外洋から直接に、鳴門海峽を通つて來るものと、今一つは、外洋から大阪灣に入り、更に明石海峽を經て來るものとの二種ある。この兩者は、幾多の島嶼から成れる家島群島と、一個の巨島たる小豆島の中央附近に至つて、相合ふゆゑ、潮流に乘じて外洋から入込む魚族は、此處で間違(マヂ)つかざるを得ない羽目(ハメ)と成る譯。漁業者が『滿合(ミチアヒ)』と唱ふる好漁場は、卽ちこれ。

『一望淡阿天接水、石雷吼處是鳴門』とは、横井小楠の句であるが、播磨灘からは六箇國の山々を、煙波の裡に眺め得て、風光が太だ開濶なだけ、內海に在つては、比較的、波の高いのを以て、特色として居る。幕府時代、參勤交代の爲め江戸に往復する、四國、九州の諸大名中、源氏の系統に屬するものは、內海の航行に際して、孰れも播磨の室津港あたりを、上陸及び乘船の場所と定めてあつた。その理由は、明石海峽を通れば、平家の魂魄の爲に、惱まさるゝから、之を避けるのだと云ふのであるけれど、其實、播磨灘の波を怖れたのかも知れぬ。

四　水島灘と備後灘と燧灘

海戰に依つて、歷史上に名を揚げて居るのは、水島灘。景色に依つて、觀光客から賞讃されて居るのは、備後灘の北部、仙醉灘。又その南部とも見るべき燧灘は、來島海峽に依つて、人に知られて居るのである。

此三灘が最も深度に乏いのみならず、その海底が殆んど全く泥土である所以は、當初、斯る狀態に出來たものと見るよりも、寧ろ水島灘の西部から、三崎半島の附近に掛けての一線が、東西の潮流の相會し、相分るゝ所と成つて居るので、西方、早吸瀨戸から來るものが、東方から來る潮流と、交綏して退却する結果、その方向

が、區々錯雜してこそ居れ、速力が乏しいので、泥土を運搬し去ること能はず、殆んど全く、之が沈積に任せるためであらう。特殊の理由がある部分を除けば、備後灘と燧灘の深さが、十六七尋に過ぎず、水島灘に至つては、僅かに十尋にすら達し兼ぬるのは、如上の事實を證明せるもの。

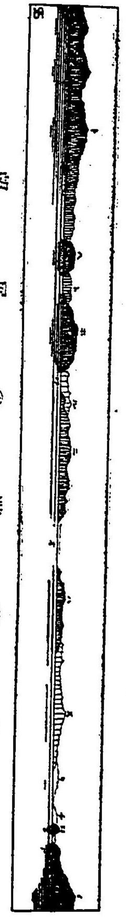
五　安藝灘の概觀

灘とは眞に名のみで、海岸線に出入が多く、海上にも亦島嶼の碁布せるものがあつて、水平的肢節に富めること、殆んど其類例と見ぬ位。而も內海の特色として、垂直的肢節は、斯る場所に發達して、海底の平坦な部分が、極めて尠いのである。

海底の凸凹の多い所以は、大地の罅裂線が、其素因を作つたに相違ないけれど、伊豫備後の雨灘の潮流を受授して、狹隘な島嶼の間を迫らせるから、勢ひ盛んに其削剝作用を蒙つた結果である。安藝灘の南部で、較、開濶な灣灘と積善灘の海底に、凸凹が少うて、淺い處が多く、其北西部に屬せる、廣島灣・岩國灘の方面が、深度に乏しく、且比較的、平坦なのは、全く潮流の迅速ならぬ個處であるため。

斯る有樣だから、安藝灘の海底は、成程、泥の部分もなきにはあらねど、概して岸石、又は石礫で、他の灘とは、大に趣を異にして居るのである。

伊藤春畝公をして『身入仙寰自不知天地風致卽我師』と吟ぜしめた安藝灘は、島嶼が極めて多々、相互、呼べば答へやうとするものゝ如くで、自ら海面の狹隘を致せるに拘らず、其間に無數の瀬戸を通じて居るのは、蓋し造化が、山水の純美を發揮させる外、船舶や魚族の通路として、特に之を、明けたのであらう。



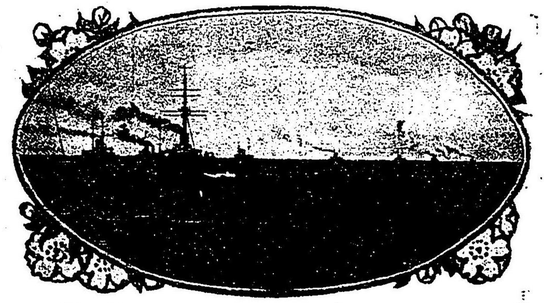
安藝灘の一部

六　伊豫灘と周防灘

伊豫周防の兩灘は、左程、古からぬ地質時代まで、全然、同一の海だつたのみならず、直接、有明海に續いて居た。これを區分して、現在の格好を作らせたものは、豐後の火山なので、兩子山を中心とせる國東半島は、實にその主働者である。

この兩灘は互に隣接して、共に海底が平坦であるけれど、其狀貌は互に反對せ

る點に乏しからぬ。周防灘、殊に其中部以西は、極めて深度に乏しいと云ふよりも、寧ろ海岸から遠淺となつて居るので、關門海峽の附近の如きは、五尋の等深淺が、五六浬の沖合に在り、十尋のそれが、十浬以上の個處に横はつて居る。況て、長門と豐前の海岸の大部分に至つては、二三浬の沖に出るも、尚一尋に足らぬと云ふ始末、然るに伊豫灘の側は、内海中では比較的最も深度が大、早吸瀬戸の内側に、百六十尋以上に達する處があるのを外にするも、尚概して三十尋の深さを保ち、早吸瀬戸に近い處の如きは、四五十尋を錘測し得る區域が相當に擴大して居るのである。



周防灘に於ける我艦隊

明治四十一年の秋なほ以て施行せられた海軍大演習の際、我が艦隊が陣列を正して、周防灘を行進する所。幾多の艦艇が軸艦相啣んで、波濤を蹶破して居るのは、敵の艦隊に遭遇せん爲か、或は又、既に壯絶なる荒闘を了へて、其根據地に歸らん爲か。何れにしても、之に對すれば、勢ひ血湧き肉躍るの感なきを得ないのが、海國男子の眞髓である。

雨灘の間に、斯く深淺を異にせる所以は、陷落の程度に先天的の相違もある爲だらう。併し周防灘は、潮流の緩慢な點が、内海には珍らしいので、關門海峽の附近の外は、殆んど之を感じない位、從つて海水が土砂を運搬し去らず、却つて之を沈澱させ、堆積に堆積を重ねた結果、現在の樣な淺海と成つたことは、其底質が之を表白して居るではないか。周防灘の中央の底質が、全然泥土で、沈船の如き、久しからずして、泥中に埋まるのは、全く如上の事實を自白せるもの。

伊豫灘が比較的深いのみならず、その海底が概して砂礫質なのは、潮流の運搬作用が、盛んな結果なので、地圖に就て深淺と底質を、潮流に對照すれば、思ひ半に過ぐるに相違ない。

別府灣が深度に乏しからず、且海底が、傾斜に富んで居ながら底質が泥土であるのも、亦凹入して行詰りと成つて居る結果。

五　地學上の珍な現象

アラスカのアリューシアン群島のボコスロフ火山から、程遠からぬ海中には、明治三十二年(一、九〇〇年)の頃、新しい島が出現し、間もなく消失して、幾多の船員

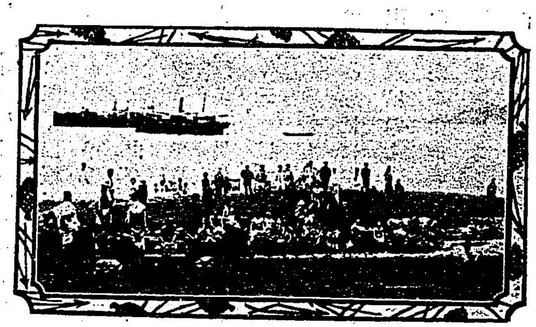
や漁業者を驚かせた。又スマトラ島のシメール島は、明治四十年の激震に依り、其一部分を海中に陷沒して、千五百の住民を損傷させた。

これよりも一層大なる異變は、地質時代には、絶えず起つたものだから、之は、別段、不思議とするに足らぬが、併し靜穩な現在の時代に在つては、兎にも角にも、珍な現象と云はねばならぬ。而も斯る異變は、嘗て瀨戸内海にも起つたのである。即ち別府灣の南西岸に近く、大分の北西に當る海中に在つて、往古、大巳貴命が少名彦命と共に、漁を樂まれたと云ふ傳說のある爲め、跡部島と呼ばれて居た一島は、慶長元年(一、五九六年)閏七月十二日の激震に遇うて、海底に沈沒し、全然、跡形もなくなつた。この島が東西に長うて、周圍三里に達し、數多の民家の外、三四の社寺さへあつたとは、舊記に見えて居る事柄。

今一つ、跡部島の南西に當り、高崎山の下に在つた久光島も、矢張り慶長四年七月二十九日、鶴見嶽の爆發に際して、同じく崩壞し去つたとのことである。

この二島が、果して實際、存在して居たので、それが陷沒したものに相違ないとすれば、當時に於ける災害が、決して輕微でなかつたのは、勿論、頗る悲慘な活劇が演ぜられた譯である。それは兎に角、陷沒したとすれば、海底に島嶼の趾痕が殘つ

て居そうなものだけれど、更に何等の跡形(アトカタ)すらないのも、亦頗る珍。



別府灣頭の砂湯

火山の餘力が今に幾分か殘つて居る爲め、別府灣の西岸方面には、別府溫泉を始め數多の溫泉が湧き、澤山の浴場が作られて居る中、砂場は豐後國誌に「海濱砂中有湧泉。浴法甚奇。先發沙盛全軀。惟頭面出之。泉漸漸浸浴快浴一炊時。巷治痼疾。」と敍せられたもの。盛夏の頃は頗る繁昌するが、雄大な山水の中の人となつて、珍な浴法を執るのも亦面白い。此寫は別府の津頭の南側から東に向つて眺むるもので、右方に遠く見えるのが佐賀關半島。

島嶼陷沒の事實の有無は、暫く措いて、試に別府灣の海底を窺へば、其處が啻に水平的に凹入せる許りでなく、垂直的にも、亦窪く成つて居ることが、著しいのである。直徑、僅に數浬に過ぎざる灣澳が、四十尋の深さを有し、殊にそれが南西に偏せることは、注目に値せぬ譯でないと思ふ。

何故に、斯る狀貌を呈して居るか。一部の地學者は、別府灣を往古の噴火口の跡だと云ふが、成程、左樣かも知れぬ。伊豆半島の熱海灣が、舊火口である以上、この說も亦全然、否

認し兼ぬる。併し地勢や、地層や、熔岩の工合から見れば、必ずしも火口だつたものとは、斷定し難い。別府灣の海底が、盆地の有樣を呈せる所以は、蓋し此部分の大地が、特に深く陷沒した結果であらう。別府灣の深度、否外方が淺く、却つて內方が深いのも、亦地學上の珍な現象として、研究を要する事柄たるを失はぬ。

宏大な火山群を構成せる豐後のことゆゑ、珍な現象を呈せる別府灣があるのは、其實さまで珍ではないけれど、場處が場處だけに、極めて近い地質時代に至るまで、幾多の異變が、繰返されてあつたことは、疑ひのない話。

斯く云へば、或は別府溫泉場に遊ぶなどは、如何にも危險な樣に感ぜらるゝかも知れぬ。併し此方面の火山は、何れも憩、又は死の字を、其頭に付けねばならぬものゝみ。近世に至つては、未だ嘗て些細の異常をすら告げないのだから、決して心配に及ばぬことを斷言する。況て、萬一にも火山に異常が起る場合には、豫め徵候の見えるのが一般だから、其時、始めて用心しても遲くないのである。若しも火山地方を避けるとなれば、日本には安んじて起臥すべき處がない筈、遠に北清、又は西比利亞にでも、轉居するの外はあるまい。

六　瀬戸內海の海峽

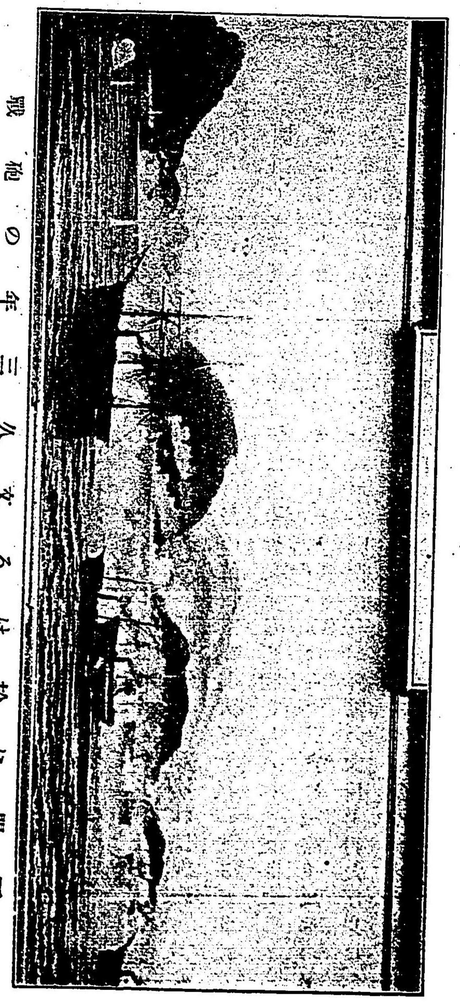
一　海峽と人文

人文上より之を見れば、地峽は未開人に往來の便を與へ、海峽は文明人に交通の利を與ふるので、海峽に船舶が蒐集するのは、恰も橋梁に車馬が輻湊するのと同樣である。ジブラルタルやマラッカなどの各海峽は、其例證に過ぎぬが、蘇西運河や、目下、工事中の巴奔馬運河は、實に人工の海峽に外ならぬ。海峽が人生に及ぼす効能の多々なるは、如上の事實に依るも、其一端を知るに足ると思ふ。

試に內海の海峽中、いづれかの一を缺くものと假定すれば、水運上の不便、不利は殆んど筆說することも出來ない程であらう。明石瀬戸がなければ、大阪、神戸も到底、今日の盛況を見ざるべく、瀬戸內海の値價も、亦其大事を沒却するに相違ないが、關門、早吸、備讃、藝豫の各海峽は、悉く皆、貴重な寶物と見るべきである。

海峽は、啻に水運上に及ぼす效果が、夥しいのみならず、又實に戰略上、二個の海洋の死命を制する譯。明治三十七八年の戰役に、我が海軍の大捷を得た所以は、對馬海峽を制御し得た結果と云ふも、必ずしも過言であるまい。從つて由良、鳴門、藝

戰袍の年三八　交るけ於に關下



豫關門の各海峡に、嚴然、要塞が設置されて居る外、この戰役の折、早吸海峡にも亦軍事上、緊要な、或る種の機關が置かれたりしは、素より怪むに足らぬ。

次に海峡は魚類の道筋であるため、幾多の海峡を用つて外洋に通ぜる內海が、諸種の魚族を回游させ、水產上に大なる貢獻をして居るのは、喋々を待たぬ事柄。

瀬戸內海の海峡

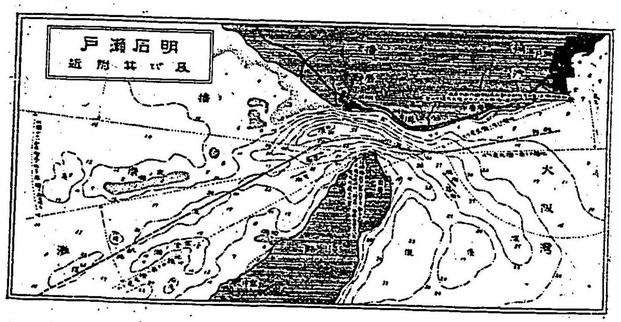
二　瀬戸の海底の二樣式

水平的の肢節に於て、普通の海峡と趣を異にせる、瀬戸內海の瀬戸は、垂直的の肢節に於ても、亦大に工合の違ふ點がある。而して其海底には全然、狀貌の相反せる、二つの樣式、卽ち海底山脈式と、海底峡谷式が具はつて居るのである、左に之を概說し、且二三の例を擧げやう。

一、海底山脈式　海峡の兩岸に迫り來れる陸上の山脈が、其、海峡の底に於ても、亦、聳立、連亙の勢を保つて居るもの。早吸瀬戸は、實に此樣式の好標本なので、東北東から、長く西南西に連れる、四國の結晶片岩の山脈が、佐田岬を出し、早吸瀬戸に至つて、斷絕せるかの如くであるけれど、そは單に外貌だけのこと。對岸、九州の佐賀關牛島に至り、さらに同種の結晶片岩が、現はれて居る計りでなく、その中間には、高島などの島嶼があり、海底には又海底山脈があつて、左右に急斜せる工合は、全然、陸上の山脈に異らぬ。故に、これを「早吸式」とも云ひたいのである。さて鳴門海峡の海底は、略、之と同一の樣式に出來て居るが、急潮の出入に依つて海底山脈の左右の海底を削剝し、愈、深度を大にした

爲め、遂に現在の如く、早吸瀬戸の海底山脈の個處は、六七十尋の深さであり乍ら、左右の深い處が俄然、百六十尋以上に達し、鳴門の側に在つても、亦これに酷似せる狀況を告ぐるに至つたのである。さてこの樣式の海峽は、備讃瀬戸の鴨瀬戸・下津井瀬戸・藝豫海峽の布刈瀬戸・來島瀬戸・安藝灘の猫瀬戸・音戸瀬戸・諸島瀬戸・阜瀬瀬戸・周防の大島瀬戸・上の關瀬戸などである。

二、海底峽谷式　早吸式に對して「由良式」と云ひたひので、海峽の海底が、附近の海底に比し、特に深くして、薬研狀を呈せること、恰も大洋中の海溝(Graben)の如きもの。由良海峽は、その標本と見るべく、水深三十五尋内外の紀伊水道から、



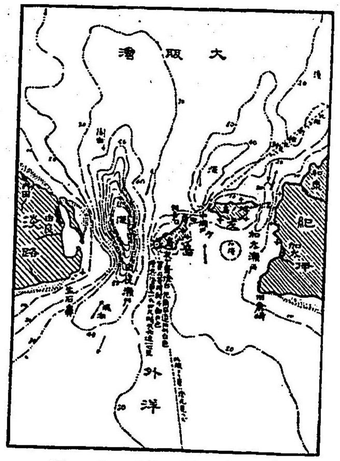
海峽に近づくに連れて、次第に深度を加へ、大小島の沖の島と、由良の成山の中央に至つて、急に百十二尋と云ふ、驚くべき深さに達して居るが、此處を北に入り、大阪灣の廣い部分に進むだけ、順次その深度を減じて、再び三十尋以内に復するのは、矢張り面白い現象と云はねばならぬ。明石瀬戸は、慥に此樣式に屬せるものであるが、斯る有樣を見るに至つた所以は、當時大地が特に深く陷落した結果には相違ないけれども、廣い部分から、集つて來る潮流が、急激に此處を通過するため、海底が機械的に削剥されなければ、著しくまで顯著な現象を、呈することが出來ぬ筈。さてこの樣式に屬する海峽の、重なものを擧ぐれば、由良海峽の東端の加太瀬戸・備讃瀬戸の大島瀬戸に櫃瀬戸・水島灘と備後灘の界なる黑土瀬戸に白石瀬戸・藝豫海峽の三原瀬戸に花栗瀬戸・安藝灘の大下瀬戸・安藝・伊豫の兩灘の間なるクダコ瀬戸・怒和島瀬戸・釣島瀬戸・廣島灣の那沙美瀬戸・周防灘の佐合瀬戸・關門海峽の早鞆瀬戸などである。

若し夫れ、備讃瀬戸の葛島瀬戸や、藝豫海峽の刈瀬

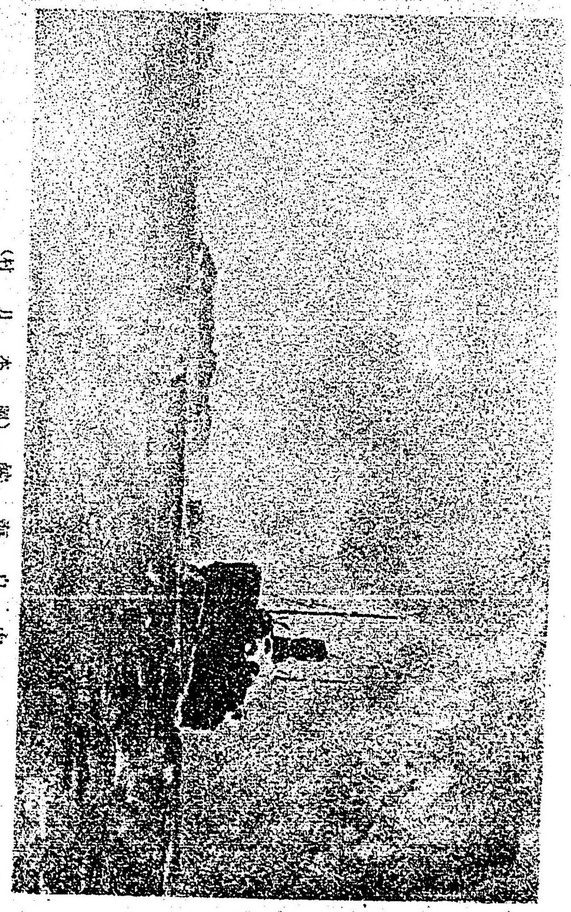
戸(宮ノ窪瀬戸)の如きに至つては、その海底が餘りに複雜だから、兩者の何れに屬するものとも、斷言し難いので、備後灘の梳子瀬戸・廣島灣の大野瀬戸・周防灘の花栗瀬戸・關門海峽の大瀬戸小瀬戸に在つては、海底に殊更深淺を呈して居ないが、これは主として地勢や地質や潮流の關係に基づくのであらねばならぬ。

三　由良海峽と友ヶ島

紀伊の田倉崎から、淡路の生石崎に至る、五浬半の水路は、内海の東端の門戸である。此海峽は、神武天皇の東征の際、通過あらせられ、神功皇后の三韓から凱旋の折、碇泊し給ふたので、其中央に浮べる友ヶ島の名は、皇后が船上の苔を海に投げて、神を祈られた古事に因んだものと申す。此島は地の島と沖の島が并んで居るゆゑ、別に妹島・兄島などの呼唱をも得て居るが、廣く人口に膾炙せる『由良の門を渡る



由良海峽の圖
(實形三十萬分ノ一)



(由良海峽)　(上)川水路　(下)海峽の友ヶ島の遠望

戸(宮ノ窪瀬戸)の如きに至つては、その海底が餘りに複雜だから、兩者の何れに屬するものとも斷言し難いので、備後灘の桃子瀬戸、廣島灣の大野瀬戸、周防灘の花栗瀬戸、關門海峽の大瀬戸小瀬戸に在つては、海底に殊更深淺を呈して居ないが、これは主として地勢や地質や潮流の關係に基づくのでなければならぬ。

三　由良海峽と友ヶ島

紀伊の田倉崎から、淡路の生石崎に至る、五浬半の水路は、內海の東端の門戸である、此海峽は、神武天皇の東征の際、通過あらせられ、神功皇后の三韓から凱旋の折、碇泊し給ふたので、其中央に浮べる友ヶ島の名は、皇后が船上の苦を海に投げて、神

由良海峽の圖
(實形三十萬分ノ一)

を祈られた古事に因んだものと申す、此島は地の島と沖の島が并んで居るゆゑ、

由良海峽

(村川水國)　峽海は伊豆の國、駿河の國、相模の國、武蔵の國、上總の國、安房の國、常陸の國、下總の國、上野の國、信濃の國、甲斐の國、駿河の國、伊豆

舟人』の古歌の外、友ヶ島と、加太浦の古稱形見浦を咏じたものとしては、續古今集に、太上天皇の歌『有明の空にわかれし妹が島、かたみの浦に月ぞ殘れる』があり、由良港で勤王の意を賦したものとしては、吉田松陰の詩『同首蒼茫浪華城、迷窓又聽杜鵑聲、丹心一片人知否、不夢家鄕夢帝鄕』があつて、由良海峽は過去に於て、頗る名高かつたのみならず、現在に在つては、由良要塞が置かれてある爲め、我が國の最も大切な防備地帶の一として、知らるゝ譯。

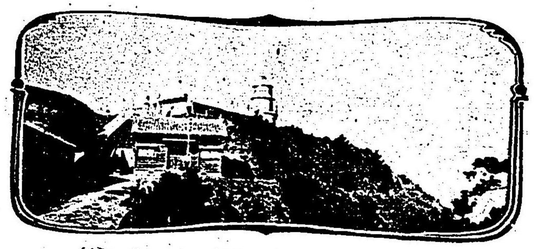
要害の位置を占めてさへ居れば、島嶼には大抵、砲臺が築かるゝ、東京灣の猿島を首め、露國のフインランド灣のコトリン島(クロンスタット砲臺)佛國のビスケー灣のレー島・ドオレロン島などは、其一例に過ぎないが、瀬戸内海の東都の門戸たる友ヶ島に、砲臺なくして可ならんやであらう。

友ヶ島の勝景たるや、傳へて神仙の幽栖とし、敢て窺ひ探るもの、一人もあることなし。其島、都て三つあり、地の島・沖の島・神島なり。其形をいはば、地の島・沖の島は島の翼を張れる勢をなし、譬へば、左右の眉の人の面に在るが如し。神島は其眉のうへに、點子を添へたらんごとく、浮出たり。青松蒼蔚として海風に揺れ、各〻自然の趣をなし、時に潮氣に誘ふて氣氣たる蒼氣、天然に靉靆けり。

これは紀伊國名所圖會の敍事である。紀泉山脈が半ば海中に沒して、海峽と島

嶼を作り、更に淡路島の南部に連亙せる次第は、其地理に依つて、之を知るに難からぬので、中瀬戸は地の島と沖の島の間隔僅に數町、而も潮勢が激して鼓怒し、混澪たる渦紋を畫き、糅藉たる急流を現はすのは、其處に幾多の岩礁が在るから。

由良海峡の三水道中、加太瀬戸と由良瀬戸は、共に峡谷式の海底を成せるゆゑ、潮流こそ迅速なれ、航海上、別に危險はないのである。殊に由良瀬戸は、水路誌の敎ゆる如く、由良の成山と沖の島の間が、二浬に達し、如何なる艦船でも、自由に通過し得るのは、内海に取つて、誠に結構。



友ケ島燈臺（由良海峡）

大阪灣から紀伊水道に出る所が、即ち由良海峡。中央に友ケ島と總稱する、二個の島嶼が横はつて居る。其中の島と呼ばるゝものと、淡路の間が由良瀬戸で、艦船通航の要路に當る所から、此島の西端に一個の燈臺が設置されて居ね。三箇年の繼續工事を經て、明治五年以來、毎夜燈光を輝たないが、同廿三年此地に砲臺が造築さるゝので、燈臺は其位置を換へた。

海峡の西側なる由良港は、前面に子子形の狹窄島を横たへ、其頭部に可憐な小峰、成山を峙たてゝ、北々西に水深十一尺の新川口を、南方に水深三尺の今川口を

開いて、複口港を作つて居る。この港の繁昌するのは、そが漁港であるための外、軍事上の關係あるがため。

（附言）我が國の地名ほど、不仕舞になつて居るものは、蓋し世界に稀であらう。漢字で書いて、これを無理にも讀ませるので、平郡（ヘグン）島（伊豫灘）や大角（オホスミ）島（豐豫海峡）は左程でもないが、苗羽（ノオ）（小豆島）や外入（トノニウ）（大島）さては日出（ヒジ）（別府灣）の如きに至つては、頗る難物。正當に讀む方が正當か、容易に判斷の出來ない場合があることは、暫く措て問はぬとするも、一つの場所に對して、二つ以上の固有名詞が附いて居るのは、如何にも不便、否、寧ろ甚だ不都合と云ひたいのである。由良海峡は、慥にこの類なので、由良海峡の外、由良瀬戸・友ケ島海峡・友ケ島瀬戸・友ケ島水道などの呼唱もあるが、大阪灣を和泉灘、或は茅渟海と云ふのも、亦同樣。地名一定の必要なことは、云ふまでもない話だから、何とかこれを現實にしたいものと思ふ。

四　來島海峡と長瀬戸

瀬戸内海が、船舶中最も用心して通る所は、來島海峡で、船客が景色の最も優良な部分として、喜ぶ所は長瀬戸である。而も前者は内海式の多峰、多谷の山地が、左右から水に迫り、其間には又島嶼や岩礁を點綴して居るから、風致として素より惡からう筈がなく、後者は海陸が水平的と垂直的の、雙方の肢節に富める上、内海に特有な急潮が往來するので、通航の船舶は、矢張り、用心に用心を重ねる譯。

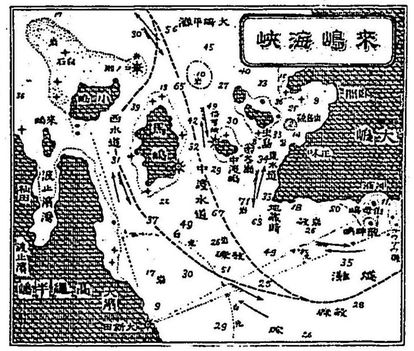
來島海峽（伊豫）

瀬戸内海の中央の樞區として、藝豫海峽の要衝を占むるものは來島海峽。その濕潮は大角島から南東に向ひ、落潮は之と反對に流るゝので、大潮の折には一時間、六哩の速度に達して、岩礁を衝き島嶼を掠めて奔るのみならず、海陸の關係が巴形と成つて居るから、此處を通る船舶は豫め警戒を加へながらも、猛烈な旋流の爲に押流され、或は押廻さるゝ場合も尠からぬ。而も船舶の往來が頻繁だから、船長の苦心は特に大ならざるを得ない譯。さては海峽の針路は、東から來るものは西水道を取り、西から來るものは中央水道を通ることに成つて居るが、此處を通るには、海峽の地理の外。潮流の方向と緩急を、實驗に依つて知悉することが必要。單に圖書や講義で覺えただけのことでは、險呑至極。急潮を受けつゝ急速に船を廻す場合、能の働が敏活な船でなければ、誠に危險な上、西と中央の兩水道を除けば、他は岩礁の出沒、水道の屈曲、急潮の奔流の三者が、殆んど全く船舶の往來を阻むのである。

内海を縱貫すべく、藝豫海峽を通航するには、島嶼羅列の間に、數條の水路がある。其重なものを列擧すれば左の通り。

一、伯方瀬戸　幾多の島嶼の間を辿つて狹く、且彎曲せる水路。そして南東に向ふ濕潮も、北西を指す落潮も、共に急激な勢ひで奔流するから、航行に深き注意が必要。況て岩礁や砂洲が到る處に散在せるに於てをや。

二、刈瀬戸（宮の窪瀬戸）　この瀬戸が安全に通れると、航路の距離を短縮し得る計りでなく、航行の困難も



狭いのだけれど、海峡の間に、鵜島や見近島などが横はり、且東流の漲潮と、西流の落潮が、頗る險悪なのは、致方もない話。

三、尾道瀬戸　備中から備後に掛けて、東西に互れる二條の陸地帶と同性質のものを、一層低くしたのが尾道瀬戸である。その水道が如何にも狭いのと、布刈瀬戸を通るよりも、迂曲する譯となるのと、それから東口が低潮二尋の水深に過ぎぬ爲め、尾道や鞆津に寄港する内海航路の汽船が、之を通る位のこと。

四、柳瀬戸　六崎上島の北側の群島と、其對岸、竹原方面の母陸の間なので、極めて安全な航路だけれど、此附近の港灣を見舞ふ船舶の外、餘り通航しないのは、内海の本航路としては、餘程、迂曲することゝなるため。

五、花栗瀬戸　大三島と伯方島の間に在つて、水道の中央は何等の危險がないだから、此處と伯方瀬戸を往復して、備後灘と安藝灘を連絡すれば善い譯だけれど、花栗瀬戸は熱潮の時の外、潮流が激烈だから、之を通過する船舶が、極めて鈍いのである。

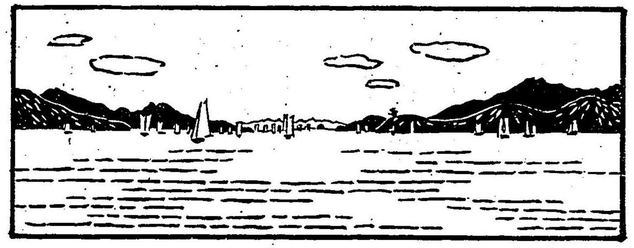
斯く觀察すれば、來島海峡と長瀬戸は、愈、其價値を高ひる譯、否、この兩方面が、大

切な要塞地帶と成つて居るのは、そが軍事上、内海の中央の樞區であることを說明するもの。

來島海峽の海陸の工合は、稍、巴形を呈し、其間に數個の島嶼が頑張つて居る計りでなく、岩礁の點綴せるものがあつて、數條の狹隘な水道に分れて居る。此等の岩石は、悉く花崗岩で、水面に現はれたる部分は、青松に覆はれ、脚下に白砂の濱を延べ、左なくば、微しく白色の岩盤を顯はして、景色の要素と成つて居るが、其海面の急潮は、有名なもので、海峽の狹窄せる部分の如きは、急湍と渦流を用つて、名狀すべからざる、壯觀を呈するのである。

斯る有樣だから、海底の凸凹も、亦頗る複雜であるが、大體に於ては、深度に乏しからず、地藏崎に近い沖合の如きは、七十尋以上に達する狀勢、而も海底が主として岩石から構成されて居る所以は、主として急潮の威力に依るもの。

轉じて長瀨戸は如何と見るに、全體、長瀨戸とは、海員の間で何時となく唱へはじめた呼唱、水路誌は之を三原瀨戸と掲げてあるが、此瀨戸は備後灘の百貫島から、布刈瀨戸・三原瀨戸・大下瀨戸を經て、安藝灘に出るまでの、極めて複雜な、そして頗る長い瀨戸を指す譯だから、矢張り長瀨戸の名が適當と思ふ。この瀨戸はノッ



備後の布刈瀨戸（著者）

中國の航路上、絲崎の東方から南東に向つて、布刈瀨戸を見た所。左方に近く山の斜面を現はせるが岩子島、其先の稍高いのが向島。右側に近く三個の峰を并べて居るのが大細島、其手前の海中に白く（實は赤）見えるのが、長太夫岩のビーコン燈臺、先方の最も高いのが因島。此等は悉く花崗岩から構成し、內海式の山水の標本となつて居る。此海峽は長瀨戸（三原瀨戸）の東の門戸で、其入口に近い百貫島は航海上の好目標。海峽の正面が備後灘で、遠く見えるのは、讃岐と伊豫の國境の和泉砂岩の連嶺。山水の明媚は筆紙に盡し難いけれど、潮流は急激、岩礁は點綴、洲瀨は饒多。加之ならず、兩岸が相迫つて居るから、船舶は勢ひ右に折れ左に曲つて通られぬ。船客の喜ぶ所で、船員の苦しむ所は此海峽。

クス氏の彼邇にも『時に或は開濶な海面を行き、或は又島と島の甚しく接近して、船の進むべき途なきかを疑はしむる所あり。水路の狀況、恰もミスシッピー河の屈曲せる部分の如し』とある通り、狹い處は到底、海とは思はれず、波がなくて流れがある工合など、何處をでも大河の樣、從つて、海陸の關係の密な點も、亦殆んど名狀することが出來ない位。

地盤の不規則な陷落と、海水の激烈な浸蝕が、此等の瀨戸を作り、且今日として急潮の作用は、依然、海岸と海底を削剝しつゝあるから、

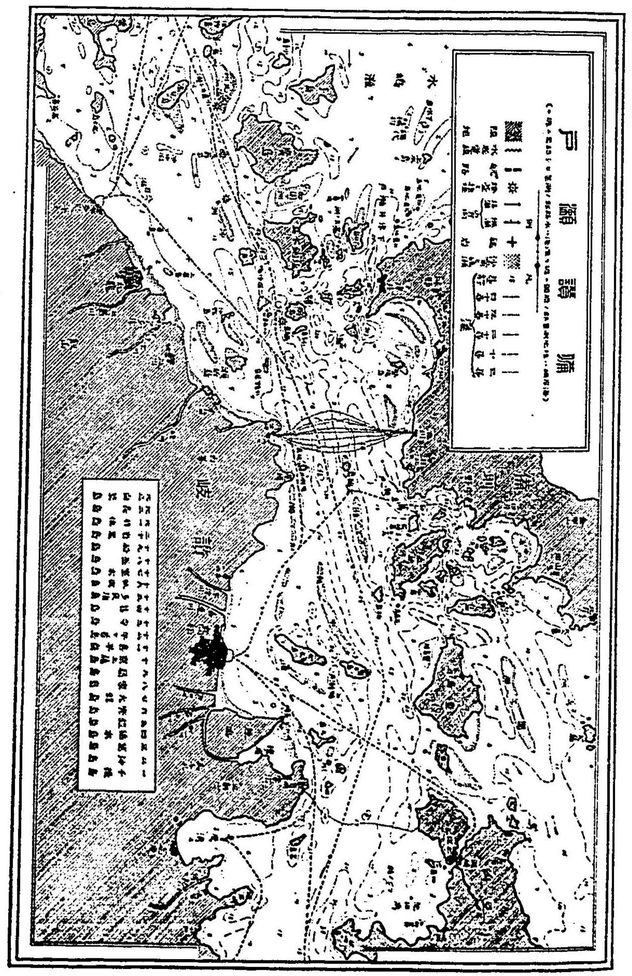
其海岸には、時折、砂濱もあるけれど、多くは斷崖を作つて居る。故に此方面を航行し乍ら、山水を展望すれば、巧妙、非凡な造化の技術に感歎し、心醉するのは、何人も變りのない事柄と思ふ。

長瀨戸の潮流は、内海の瀨戸を特徴として、矢張り急激には相違ない。中野鼻(大崎上島)では三浬半、大三島と久野島の間では四浬、大濱崎(因島)では三浬半に達することがあるけれど、これを來島に比ぶれば、著しく遲緩なるのみならず、流水の方向が、大體に於て水路と一致せるため、自然、通航に心配が少いのである。これ來島海峽を避けて、多大の時間を要するにも拘らず、其名の如く長い長瀨戸を選ぶ船舶の、尠なからぬ所以。

來島海峽と長瀨戸は、雙方とも現在の最大の艦船すら、通航し得るには相違なけれど、兎に角、慥に心配は免れ難いので、呉・神戸間を航行するにさへ、時折、遙々四國の南側を迂廻する艦船を見受くるのは、其證據である。

關門海峽の整理に次で、この兩者の整理を決行するのは、世界的水路を改良し、且瀨戸内海、乃至南日本を繁昌させる上に於て、極めて必要な事柄。

五　備讃瀨戸と兒島灣



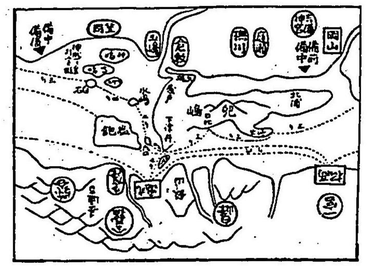
海陸の關係が極めて密、島嶼の布置が最も繁、内海の航行に際して、前後左右が悉く島、島の上は皆、松で、水よりも島が多く、島よりも松の多い爲め、風光の明媚を極めて居るに對し、覺えず賞讃の聲を放つ所は、西の方、藝豫海峽と、東の方、備讃瀬戸である。加之ならず、此兩者は、海底や潮流の工合に於ても、殆んど符節を合せたかの樣で、内海式の海峽の特徴を、遺憾なく發揮せるもの。そして彼は河川の如くに、海水を通ぜる點に於て優り、これは湖沼の如くに、潮水を湛ゆる點に於て勝れ、其間に自ら趣の違ふ所があるのは、矢張り造化の苦心の結果、と見ねばならぬ。

言ふまでもなく、備讃瀬戸は、播磨灘と水島灘、さては備後灘を連絡せる、狹長な海區。陸上の地質構造から推すに、其海底は大抵、花崗岩で、潮流の加減に依つて、淺く泥土を堆積せる部分もあるけれど、地勢が切迫し、海面が狹く成つて居る個處は、直に岩石を露出し、且局部的に深度を加へて居るので、大槌・小槌の兩島の間の如き、四十五尋を錘測する有樣。

潮流は、漲潮が西に向ひ、落潮が東に奔る點が、藝豫海峽と反對だけれど、其速度の大なことや、處々に激流や渦流を出現することは、彼も是も變りがない。併し備讃瀬戸は、極端に之を壓迫する個處がない爲め、大潮の折、一時間、三浬乃至四浬の

速度に達する位が、頂上なのである。

斯る場所は、鯛や鰆が好んで群集する爲め、自ら良好な漁場と成つて居る、中にも瀬居島附近の『金手』と唱ふる漁場は、水深二十尋前後、東西十數町、南北十町に過ぎぬけれど、特に結構な鯛が網に滿つると云ふ勢ひ、それから鰆は兎角、沙洲に集るので、之を『瀬原』と呼ぶのは、蓋し鰆から轉化したのであらう。



備讃瀬戸の古圖

これは西海舟路と名づくる寫本の圖を、抄寫したもの。その樣式が如何にも幼稚な點に、味があるではないか。

『白石蒼松灣又灣、扁舟靜過畫圖間、東南一發知壇浦霜氣稜々五劍山』は成島柳北の吟、その壇の浦と五劍山から、遙に北西に當れる、周廻七里の一島こそは、實に風露七百年、崇德天皇の寂しい社が建てられ、滿山の磯馴松をして、當時の悲劇を物語らしむる直島である、この島の北西に擴大せる半島は、云ふまでもなく兒島半島で、その北方に灣入せる海區は、即ち兒島灣。

兒島灣は備讃瀬戸の一肢節であるが、此海灣の狀貌は、頗る有明海に似て、內海中、別に一區劃を作り、概して深さが一尋にも足らぬ泥海、從つて此處に產する動植物も、亦著しく其趣を異にして居るのである。

地學上から之を觀れば、兒島灣は歷史時代に至るまで、藝豫海峽の尾道瀬戸や、布刈瀬戸の如き狀態に在つたので、直に水島灘と連繫して居たのだから、當初の狀態を失はざれば、備讃瀬戸は兒島半島の北方、別に一條の水路を通じて、更に多大の便宜を、海運上に與へつゝある次第だらう、然るに西大川や、川邊川が搬出する土砂は、海陸の關係と、潮流の工合に依つて、この海灣を埋め、遂に今日の有樣を呈するに至らしめた譯、即ち兒島灣は、盆地の未成品と見ることが出來るので、藤田氏の開墾事業が起らないとするも、遂ては自然に、殲滅すべき運命を持つて居るのである。

備讃瀬戸と藝豫海峽は、內海の最も好風景な部分として、之を活用する外、特殊の現象を呈せる個所として、學術上、之を研究するのは、此方面の人々の須く率先して遂るべき事柄。（明治四十三年八月十三日、兒島半島の味野土曜會で、著者が講演した一節）

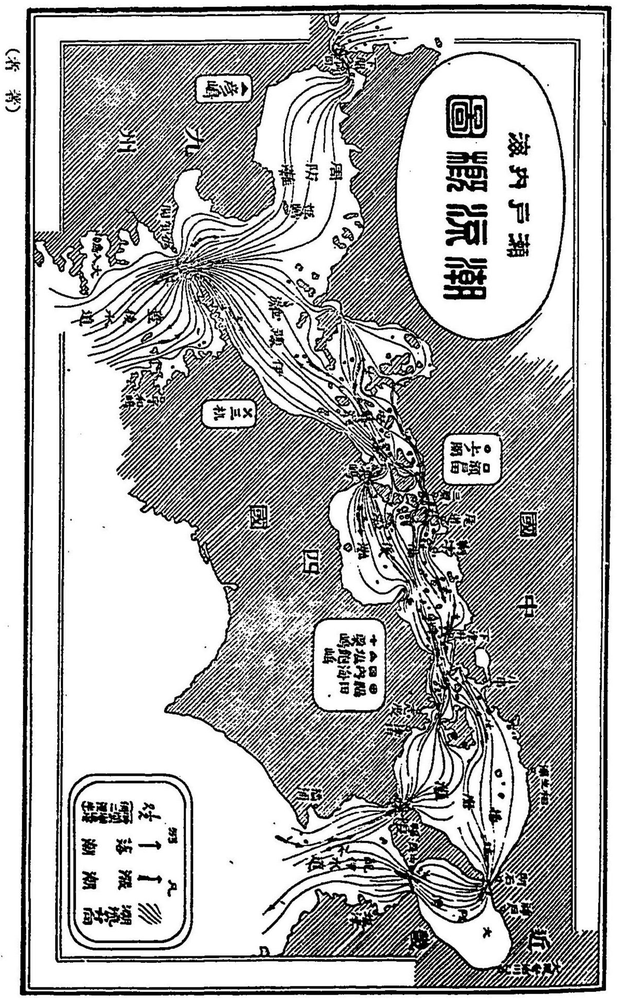
第九　瀬戸内海の潮水

一　満干と潮流

一　潮水の満干の現象

海洋の潮水には、種々の運動や、變化があるので、滿干は其最も著しいもの。これは月と太陽の引力の作用に依つて、地球の周圍に二つの凸部と、二つの凹部を作り、そして地球の周圍を、東から西に疾走しつゝある次第。

言葉を換へて云へば、月と太陽は、地球と共に回轉する筈の潮水を、固く把持して居る譯である。從つて滿干の作用は、地球の自轉に反對して摩擦を起すので、摩擦は勢力を消耗するが原則だから、地球の自轉の速度は、この作用の爲に、極めて微細ながら、減殺されつゝある道理。天文學者ダーヴキン氏は『地球の最初に於ける一日の長さは、僅に數時間だつたに相違ない』と云ふて居るが、地球は潮水の爲に自轉運動を減殺され順次、一日の長さを增して來たので、遂には現在の月の如く、今の二十七日餘の長さと成つてしまうであらう。勿論、これは地球が月と同樣に冷却して、全然、生物を見ざるに至れる時のことである。



莫迦、潮汐は地球の自轉に反對して、奔馳しつゝある譯に、相違ないけれど、それが盛んに流れて居るものと思ふのは、大の間違ひ、海岸に迫り來る波濤の速度は、相當に、早いけれど、海水そのものが、波濤と同樣に流るゝ譯でないことは、水面に浮べる木片を見るも、尙これを知るに難からぬ。滿干と云ふ大浪、卽ち潮浪（Tide Wave）も、矢張り之と變らないので、浪形は約十二時間に、地球の周圍の半分を、進むけれど、海水の運動に至つては、其速度の遲緩なこと、到底、比較にならぬのである。

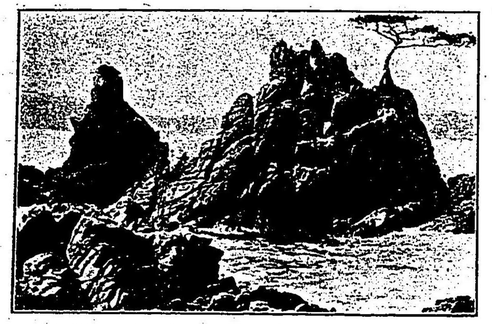
二　外洋の海流と內海の潮流

海水は絕えず注流運動をも起して居るので、印度洋のマダガスカル海流や、大西洋の灣流（メルフストリーム）や、巴西（ブラジル）海流、さては太平洋の日本海流（ジャパン・カーレント）は、世界に有名なものである。而して日本海流は、非律賓（ピリピン）群島の東方から來て、我が國の南方を、北東に流れる、所謂、黑潮であるが、其一支は支那東海に入り、對馬海峽を拔けて、日本海を北東に走る、所謂、對馬海流。

黑潮が九州の南端を掠めて、四國と紀伊半島の沖合を流るゝ折は、一時間、一浬乃至四浬、平均二浬半の速度を有すれど、日本海に於ける對馬海流の速度は、極めて遲緩なので、南西風の後の外、一浬の速度にすら、達しないのである。

瀬戸内海の潮水

外洋には斯る狀勢を以て、常に海流が注いで居るけれど、瀬戸内海に至つては、更に之を見ない、と云へば、或は内海には頗る急激な潮流があるではないか、との詰問も起るであらう。併し乍ら、外海の海流は赤道附近に於て主として貿易風の爲め、大なる西流を生じ、之が陸地に衝突して南流、又は北流し、或は又潮水の溫度の相違などに基づき、之が平均を得んとして、彼是、移動するのだから、勿論、滿干とは全然、沒交渉然るに瀬戸内海の潮流は、不斷、一定の方面に流るゝ、眞正の海流でなく、單に外洋の潮水の滿干に感應して、潮汐の變化を起すのみで、之がために生ずる、特殊の潮流た



女夫岩（鳴門海峽）

鳴門海峽の外側、撫養の對岸なる土佐泊の南東の海岸に近く、外洋の怒濤が寄せては返へし、返へしては寄せる邊に、危岩の雙び立てるを女夫岩、又は夫婦岩と呼び、其奇な起貨之の繫舟の所と云ふて居る。岩は此附近一帶の山地と同樣、和泉砂岩から構成されて居るが、優しい名にも似ず、筋骨稜々とも評すべき形であるのは、云ふ迄もなく太平洋から直接に吹附くる風濤が、柔い部分を削剝し去つた結果である。

るに過ぎない。故に彼と是とは、決して混同する譯に行かぬ。即ち外洋のを海流（Current）と云へば、内海のは之を潮流（Tidel stream）と唱へて、其相違を明にして置く方が善い。從つて對馬海流は云ふも更なり、黑潮として、内海の潮流には何等の關係をも持つて居ないので、單に、それが内海の海水の溫度に、影響を與ふるだけのこと。外洋の滿干が潮浪から起り、海流に關係せぬ反對に、内海のそれが、外洋の潮浪に支配さるゝ、内海特有の潮流から起ることを、忘れてはならぬ。

滿干と潮流

それから、内海の潮流は、速度の大なる點に於ても、亦著しく他の海流と違ふので、或は岬角と礁瀨に觸れて、渦流（Eddy）を生ずる早吸瀨戸の如きがあり、或は特殊の狀態を呈せる海底に當つて、滿潮（Overfill）を起す早鞆潮戸の如きがあり、或は險惡な海底に原因して激流（Ripple）を報ずる鳴門海峽の如きがあつて其複雜な工合が、何處までも外洋の海流と違ふのである。

三　内海の潮水の出入

渤海灣や、ボスニア灣、さては伊勢灣や噴火灣の如き、袋の樣な場所の潮水は、地理的の關係に依つて、運動が不充分で、所謂、死角を生じて居るけれど、瀨戸内海を首め、日本海や支那海の如き、外洋に通ぜる部分が、二個以上ある海灣では、自ら其

出入の都合が善く、延びて潮水の運動が、比較的充分に行はるゝ譯。

瀬戸内海の海水は、云ふ迄もなく、比較的最も廣く且最も深い早吸海峽から出入するものが、最も多量。由良海峽が之に次ぎ、鳴門海峽は左程でないが、關門海峽に至つては、殆んど齒牙に掛くるに足らぬ位。その割合は、俄に之を計算し兼ぬるけれど、注流する海區の廣袤と其深度から推すに早吸海峽を出入する量は、蓋し由良、鳴門の兩海峽のそれを合せたものゝ二倍を越ゆるに相違なからう。

海水の運動が、航海業は勿論、諸種の産業上に、大なる關係を持つて居るのは、勿論の話であるが、滿干の中位、即ち潮水の平均の高さは、水準や高位を定むる基礎と成るため、測地上、頗る大切、氣象の觀測にも亦必要なのである。

四　變化に富める潮流

内海の水は、紀伊、豐後の兩水道を經由して、太平洋の支配を受けるのである。『外洋に續ける内海ながら、恰も潮水の如き狀態を呈せるゆゑ、遊覽者はこれが外洋に續き、そして潮水であるとは、容易に信じ兼ぬる』と評したノックス氏の言は、同意すべきであるが、併し内海は波濤こそ平靜なれ、急激な潮流が奔逸する點に於て、全然、潮水の如め不流動水とは、趣を異にして居るのである。

内海の漲潮(Flood)の紀伊水道から來るものは、二つに分れて内海に入るので、其一は由良海峽を通つて大阪灣に進み、更に明石瀬戸を拔けて播磨灘に注ぎ、他の一は鳴門海峽から、直に播磨灘に入る。斯くて兩者が相合し、西南西に流れて備讃瀬戸に移るのである。之に反して、豐後水道の早吸海峽から、來るものは、伊豫灘に入り、其處で二つに分れるが、本流とも見るべきものは、東北東に進み、安藝灘を過ぎて、燧灘、備後灘に赴き、讃岐の粟島附近で、紀伊水道から來たものと、會するのである。故に水島、備後の兩灘の潮流は、彼我相混ずる結果、局部的に方向と速度を異にし、錯雜を極めて居るのである。

さて又伊豫灘で分れた一部の潮流は、北西を指して周防灘に注ぐので、極めて少量の海水は、更に進んで關門海峽を拔け、遂に日本海に走るが、周防の祝島附近は、早吸海峽から來る潮流の、東西に分るゝ地點。

落潮(Ebb)の方向は、全く漲潮と反對。粟島附近を分岐點とし、東西に流れて、元の紀伊、豐後の兩水道を辿り、遂に太平洋に去るのである。粟島の漁民が『中滿』『中干』と云ふ、一種の術語を作つて居るのは、勿論、此處が滿干の中央となるため。

以上の敍述は、極めて大體の事實に止まるが、之を詳細に觀察すれば、水平的と

垂直的の兩肢節に富める內海として、或は急、或は緩、或は曲、或は直千狀萬態而も未だ充分に觀測され得ないであるが、內海の潮流は、何處までも瀬戸內海式の特徴を、持つて居るのである。

五　地理と潮時の關係

東から西に奔馳しつゝある滿干のことゆゑ、潮時も亦勢ひ、東から西に進むに從つて、順次、遲くなるのが當然である。

東京灣の潮時が、仙臺灣や津輕海峽に比して、一時間以上遲れ、長崎港が東京灣よりも、二時間ほど遲れるのは、素より怪むに足らぬ、然るに潮時が必ずしも、この調子に行かずして、種々複雜な現象を告ぐる所以は、全く海洋の地理的狀態が、極めて複雜なからである。卽ち大陸がなうて、僅に島嶼や、狹隘な陸地があつたのみの太古時代は、海水が自由自在に地球を撫で廻し、規則正しく滿干を繰返して居たに相違ない。從つて水質から溫度に至るまで、甚しい相違はなかつたもの、と思はるゝけれど、現在の如く、大陸の外、幾多の島嶼を生じ、延いて灣澳や海峽を作つて居ては、海水の運動に障害を與へ、或は之を遮斷し、或は其方向を變換させるなど、種々の現象を見る譯である。さて瀬戸內海は、肢節に富めること、其類例を見な

い程ゆゑ、潮時の不規則なことも、亦勢ひ之に比較すべきものがない位而して內海が、殆んど全く外洋と反對の潮時を見るのは、特に面白い事柄。

六　複雜なる內海の潮時

廣大な大洋に在つては、高潮が月の東方、約三十度の處に位し、低潮が之と九十度の距離を保つて居る。卽ち月が子午線を經過した折を基として、二時で高潮と成る譯だけれど、瀬戸內海の入口附近に在つては、紀伊水道の鹽津が其經過後、五時五十五分、由良海峽の由良が六時五分、豐後水道の大入島が六時二十分、佐賀關の下浦が七時二十一分。

さて內海に在つては、外洋の水面が內海の水面よりも高く成つて、始めて狹隘な海峽から、潮水が入つて來ると云ふ始末。ゆゑに內海が高潮に達するのは、紀伊、豐後の兩水道に比して、著しく遲るゝので、大阪と神戸が、由良に遲れ、佐田岬の內側の三机が、佐賀關の下浦に遲るゝこと、共に一時半。かくて大阪灣から播磨灘を經て、備讃瀬戸に及び、又伊豫灘から安藝灘を經て、備後灘に至ると云ふ工合に、外洋に遠ざかるに連れて、順次、高潮の時刻を遲延し、東西の兩潮流が相遇ふ場所、卽ち備讃瀬戸の西端、備後灘の東端、及び水島灘に至つては、遂に紀伊、豐後の兩水道

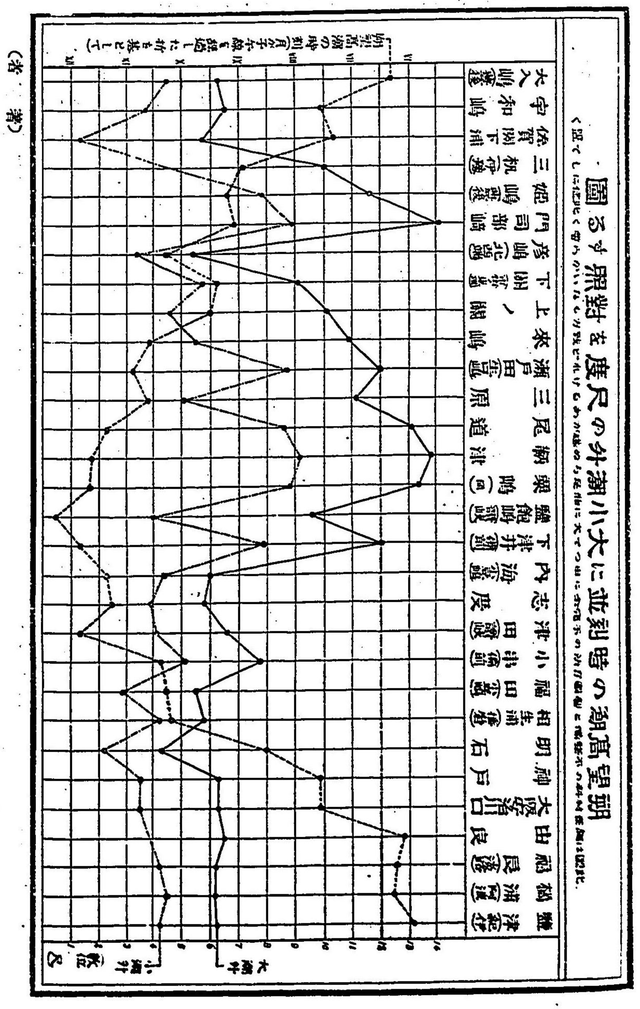
に比して、約五六時間の相違を告ぐる。殊に讃岐の鹽飽島の如き、實に月が子午線を經過した後、十二時十六分を過ぎ、始めて高潮を見るのは、誠に面白い現象。

斯く奇異な現象を告ぐる所以は、全く地理的の關係に基づく次第で、數多の湖沼を繋ぎ合せた樣な内海に、岬角が突出し島嶼が散點せることゆゑ、それが潮流の邪魔をして、海水の各部に特殊の運動を起させる結果に外ならぬ。

全體潮時と云ふものは、何時も一定して居る譯でなく、空氣の壓力などの關係に依り、絶えず多少の異同を免れない。之が實例として、住友氏の新居濱氣象觀測所（燧灘の南岸）で多年、觀測した結果を擧ぐれば、その大潮升の時刻は十一時十四分だけれど、之を各月に分けると、左の通りなのである。

一月	一一時四二分	五月	一〇時五六分
二月	一一時三三分	六月	一〇時四六分
三月	一一時二〇分	七月	一〇時四六分
四月	一一時〇九分	八月	一〇時五〇分
九月	一一時一一分		
一〇月	一一時二一分		
一一月	一一時三二分		
一二月	一一時三八分		

故に潮時は、何れの個所に在つても其平均を擧げるのが普通と成つて居る。



瀬戸内海の潮水

内海の潮流は、讃岐の粟島附近を境界として、東西から來り、そして東西に去るゆゑ、今假に阪神を出航して、關門又は別府に趣く汽船があつて、播磨で漲潮に會ひ、潮流に從つて西に進むものとすれば、自ら伊豫灘に於て落潮に遇ひ、再び順潮に乘ることゝ成るのである。然るに當初、播磨灘で逆潮に會へば、終りまで之を避く譯に行かないから、時間と石炭の消費量に、尠なからぬ相違を見るのである。

試に一時間、十浬の速力の汽船が、大潮の場合、潮流に從つて航するのと、之に逆つて行く折、時間の上に何程の損益があるかを表示しやう。

航路	距離	順潮	逆潮	較差	平均
神戸門司間	二四五浬	二〇・三〇分	二五・三〇分	五・〇〇分	二四・〇〇分
高松多度津間	二〇	一・三〇	二・三〇	一・〇〇	二・〇〇
今治高濱間	二八	二・一一	三・二三	一・一〇	二・四八

斯る有樣だから、定期の出航を要せざる汽船が、內海を航行するに、潮流を上手に利用しやうと努めるのは、素より怪むに足らぬが、關門海峽の早鞆瀨戸の如き、潮流の特に急激な處に在つては、大潮の折、猛烈な滿潮を生じ、一時間八浬の速度に達する場合も、珍しからぬので、十浬內外の速力を有する汽船が、之に逆つて進

滿干と潮流

めば、蒸氣の溫度と機關の運轉の作用で、暫くの間は全然進行が停止することさへあると云ふ始末。

帆船の群走（燧灘）

順風よりも寧ろ順潮を便り、急潮の流れに乘つて疾走するに努めるのは、瀨戸內海に於ける帆船の常である。殊に狹隘な瀨戸の如きに至つては、如何に風の工合の善い時でも、逆潮に遇へば到底これを通過することが出來ない位だから、斯る場所に在つては、潮待の帆船が群集する代りに、順潮と成れば、それが舳艫相銜んで疾走を始むる。この鳥眞は燧灘の西端、來島海峽の附近に於ける實景であるが、帆船の群走も亦恰に瀨戸內海の特有物の一で、而も其山水に絶好な反映を與ふるもの〻一。

汽船すら如上の有樣だから、帆船に至つては、潮流の支配を受けることが特に甚しい。早鞆瀨戸の急潮に乘じて、內海から關門に向ひ、又は外海に出る場合、門司崎の正面附近で、船の方向を轉ぜねばならぬけれど、矢を射るやうに疾走する折柄として、操縱が意の如くならず、舳先を揖の浦の海岸の人家に衝當て、意外の損害を與へること、一再に止らぬなどは、寧ろ滑稽と見ても善からう。兎に角、合の子船、その他の帆船は、內海の特有物とも云ふ程であるが、此等は內海の急潮に逆

つて進み兼ぬる場合が多いだけ、之に從へば、至大の利益がある爲め、自ら潮流を重大視し、却つて風を輕んずる位。これも亦外洋と內海が、大に趣を異にして居る事柄である。

八　海水滿干の較差

地質時代の昔に在つては、海水の滿干が甚しかつた、月が地球から餘り遠からぬ位置を運行し、且地球の自轉が速かつた結果、高潮が驚くべき高度と速度を保ち、大抵の島嶼や陸地を、掃きながら進んだので、其削磨の作用も、亦頗る激烈だつたに相違ない。併し、今日では最早、月の距離も遠ざかり、地球の自轉も餘程衰へて居るから、滿干の高低も、矢張り之に伴つて減退するに至つたのである。

日本の方面に於ける、太平洋の滿干の較差は、先づ以て五六尺內外と見て善いが、世界中、その高低の最も大なるは、北米、加奈太の東岸と、南米のマゼラン海峽で、前者のファンディー灣は、約六十尺の較差を見る次第。これに反して、陸地の爲に四境を鎖され、殆んど全く外洋に對する、海水の流通を遮斷されたる日本海は、滿干の微細な點に於て、世界稀有と唱へらるゝ中にも隱岐諸島と能登半島の間、さては元山港と浦鹽斯德港の間の如き、朔望の大潮すら、漸く一尺數寸、兩弦の小潮

に際しては僅に數寸。

瀨戸內海は四面陸地を繞し、狹隘な海峽を用つて、辛くも外洋に通ぜる工合が、日本海に酷似して居るから、滿干の有樣も亦日本海の如くである筈、然るに實際、日本海と反對の狀態を呈して居るのは、意外と云へば意外至極。

海岸線の凹凸、島嶼の羅列、瀨戸の點綴などに於て、特殊の標式をなせる內海は、滿干に於ても亦特殊の現象を生じ、矢張り『瀨戸內海式』を告ぐるのである。

九　瀨戸內海式の滿干

潮時が既に外洋と反對せる內海は、何を以てか、單に滿干の高低のみ、外洋に倣ひ、或は日本海に連れやうぞや。

紀伊、豐後の兩水道から入つて來る潮浪は、由良、鳴門、早吸の三海峽を通るに先だつて、早くも特殊の現象を呈し、幾分か高低の差を增大するが、大阪灣は勿論、播磨灘や備讃瀨戸の東部は、未だ格段のこともないけれど、其西部と伊豫灘、安藝灘の方面に在つては、著しく高低の度を加へ、東西の兩潮が相合ふ備後灘の方面に至つては、最も激甚を告ぐるのである。之を數字で現せば、紀伊、豐後の兩水道の朔望高潮は、六尺內外、大阪灣と播磨灘の方面は、概して六尺强なので、外洋に比すれ

ば、幾分か高低の較差が顯著と云ふに過ぎぬ。然るに伊豫・周防・安藝の三灘に在つては、十尺、乃至十一尺、備後灘に至つては、實に十三尺に達する、中にも其北端なる鞆津の如きは、最も甚しいので、朔望の大潮が十三尺四分の三に上り、兩弦の小潮すら九尺、即ち外洋に於ける大潮の折に比するも、尚五六割、日本海の小潮に比すれば、實に十數倍と云ふ勢ひなのである。而も水平と垂直の兩肢節に富める內海として、潮水の高低が複雜を極め、局部的に種々の等差あるなど、內海式の滿干は、何處までも一種獨得である。

十　滿干の激甚なる所以

內海の滿干が外洋以上で、自ら特殊の狀態を呈する爲め、瀨戸などに急潮を起して、內海の現象に異彩を添へるのは結構。而も度を超ゆるほどの較差を告げないゆゑ、港灣の價値を減損するに至らざるのみならず、適當な滿干と潮流に依つて、製鹽上に利し、漁業上に益するなど、造化の內海に對する恩惠は、深甚又洪大。

何故に內海の滿干が、特に激甚であるか。日本海の如く其較差が極めて微細であるべき筈なるに、却つて反對の現象を告ぐるのは、相當の道理が伏在して居ねばならぬ。それは內海の容積が小なる割合上、日本海に比すれば海水の出入口が

大なる結果だけれど、而も左の原因に依り、始めて特に激甚を致す次第。

一、紀伊・豐後の兩水道の關係　この水道が比較的、狹く且つ淺い爲め、廣く且つ深い太平洋から、盛んな勢ひで浸入する潮汐は、壺中に物を押込むのと同じ理由に依り、自ら行詰つて壓せらるゝ氣味が起らねばならぬ。斯くて、この兩水道の滿干が、早くも幾分か增大の傾向を示すのである。

二、內海の東部の狀態　幾分か高低の較差を加へた紀伊水道で、潮水が狹隘な由良・鳴門の兩海峽から入る量は、比較的、饒多ならざるを得ない。而も大阪灣や播磨灘は、相當の廣袤こそあれ、深處に乏しいゆゑ、忽ち其影響を蒙るので、矢張り外洋以上の高低を告ぐる次第。

四、早吸瀨戸と伊豫・周防・安藝の三灘　早吸瀨戸は成程、狹く且つ淺いに相違なけれど、尚相當の廣さと深さを有し、外洋から來て豐後水道で壓せられた潮流が、屈强の逃路として、奔流する場所と成つて居る。さて伊豫・周防・安藝の三灘を合せたものは、廣さに於ても、又深さに於ても、內海でこそ首位に居れ、素より廣大なる海洋でなく、深度としても亦內海式の淺海たるに過ぎないゆゑ、早吸瀨戸から押込んで來る高潮の影響を受けて、容易に海水の高度を加へるのである。

四、東西から來る兩潮の備後灘に於ける衝突　紀伊水道から入り、播磨灘を過つて、備讃瀨戸を西に進む潮流は、豐後水道から入り、伊豫・安藝の兩灘を經て、藝豫海峽を東に進む潮流と、備後灘の東部、水島灘近い邊に於て出會、衝突するので、二個の

物質が衝突して起すべき、自然の原則に從ひ、並に海水の量を增し、高度を加へるのは、理の當に然るべき事柄、しかも備後灘の外、水島灘が特に淺いため、此作用をして一層、甚しからしむるのである。

五、衝突せる海水の反動に依る低潮　既に激烈な勢ひを以て衝突を起せば、その反動として、外洋に出るべき落潮の量が、徐々に流れ去るもの以上の量に達するのは、勿論の話である。之が結果は、自ら低潮の面をして、平準を越ゆるまでに低下せしめれば止まぬので、延いて高低の兩潮の較差を增大する譯。

朝鮮の仁川鎭南浦の方面の、高低兩潮の較差が、三十尺の上に出づるのは、東洋に在つて最も顯著な現象で、黃海の滿干は頗る甚しいが、其原因は、全く廣袤と深度に富める太平洋の潮浪が、急に狹く且淺い支那東海に入り、更に黃海の海岸方面に向つて、之を壓迫する結果に外ならず、此現象を瀬戸内海に於ける、滿干の工合に對照すれば、蓋し思ひ半に過ぐるに相違なく、内海のそれが、日本海に於ける滿干と、反對の狀態を呈する道理に就ても、亦首肯し得る所があるであらう。

十一　潮水の副振動

海水の高位は、滿干の作用を除くも、なほ種々の原因に依つて變化する中、氣壓の影響を受けることが頗る大。高氣壓の場合には、壓力の爲に、水面が平均高位以

下に降り、低氣壓の折には之に反するので、日本の方面の如き、夏期は一般に氣壓が低く、そして高氣壓の中心が、北太平洋のアリユシアン群島の附近にあるため、海水の高位を低下し、冬は略、これと反對の現象を告ぐるから、瀬戸内海とて、この影響を受けるのは、勿論の話である。

如上の現象は、年一回の滿干と見て善いが、海水は又氣溫、風向、風力、降水量など氣象上の原因の外、海底の地變などに依つて、多少、高位を增減する、故に潮時や高潮の工合が、計算と實測の間に、屢〻咀嚼を生ずるのも、亦寧ろ理の當然。

此等の事實を發見し、又之を研究するに至つたのは、漸く近年のことなので、長岡・本多・寺田の三博士の實驗に據れば、直接、外洋に連接せる灣澳、就中、細長く入込み、且深度の充分なものにあつては、斯種の現象が特に顯著、秩序的の昇降運動を告ぐる計りでなく、殆んど絶えず、微細な昇降運動を、繰返して居るのである。

瀬戸内海の方面に在つては、長岡博士その他の學者が、嘗て大阪灣に就き、實際の研究を遂げたので、東京帝國大學理科大學紀要の論文に、概要、左の意味のことが掲げられて居る。

大阪灣の潮水の副振動は、友ヶ島から大阪港の附近に掛けての線を直徑とし、友ヶ島

にては振動を見ざる反對に、大阪港の方面に在つては、頗る顯著な昇降運動を告ぐる。そして此兩者の間の距離と、略同樣の距離を用つて、友ヶ島から紀伊水道に向つて進んだ個所の海水は、大阪港の附近の昇降運動と、相反せる運動を起すのである。

斯る事實があることは、最初西洋の湖沼に於て發見したので、當時の學者は土語をそのまゝ Seiches と呼んで居た。かくて、研究が進んで來て、多少、その原因が確知せらるゝに際して、定常運動 (Stationary Undulation) なる名が起り、更に潮水に對しては、滿干などもあることゆえ、特に副振動 (Secondary Undulation) の名を用ゆるに至つたのである。兎に角、海水の運動などに就ては、向後、研究すべき事柄が極めて多い。のみならず、西洋にては、河川の水力に於けるが如く、之を利用して電氣を起さうと、掛つて居るものもあるに至つたではないか。何處までも、輕々に附し去ることの、出來ぬものは海洋。

二　瀬戸に特有なる急潮

一　瀬戸の急潮の概觀

瀬戸内海の瀬戸は、單に其構造に於て、特有な現象を呈せるのみならず、之が潮

汐に在つても、亦殆んど他に比類のない現象を、繰返して居るのである。

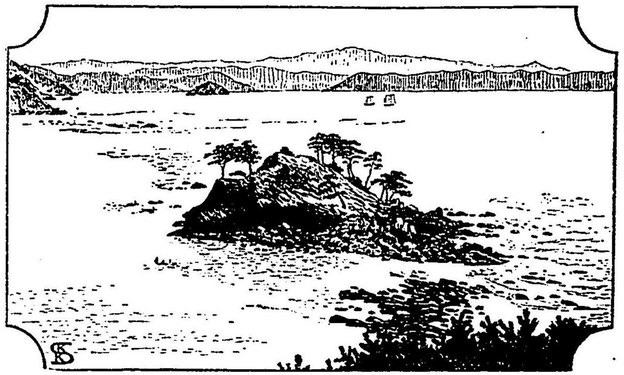
瀬戸に特有なる潮汐とは、滿干の爲に起る急流奔湍なので、伊豫灘の北端なる情瀬戸や、藝豫海峽の長崎瀬戸の如き、世人から其有無をすら知られないものすら、急潮が盛んに往來して居る。航海者の最も苦心する處が、縹緲たる海洋でなく、却つて斯る部分にあるのは、決して偶然ならぬ譯。

藝豫海峽は、海陸の關係が複雜の極度に達し、狹隘な瀬戸が相連なれる丈け、急潮が到る處に注流して居るので『ヤアレ押せソオラ押せ、船頭も水主も押さにや登れぬ此瀬戸を』の俗謠が、小船を操縱する船員の間に行はるゝ始末、或は矢を射る樣に、或は海底から沸く樣に、或は地殼の下に吸込まるゝ樣に、千態萬狀を極むる急潮は、單に之を目擊してすら、既に名狀すべからざる興味を覺ゆるのである。況て學術的に之を研究するに於ては、造化の技巧が何處まで及んで居るかに就て、蓋し驚駭の念に堪へないであらう。

廣く世界に渉つて、瀬戸内海の瀬戸で見る樣な急潮の起る個處を探ぐれば、諾威のロフォーテン群島のモスケン・モスケネセー兩島の間なるマルストレーム、英吉利のジユラス・スカルバ兩島の間なるコリーヴレッカン、伊太利のカラブリ

アとシシリー島の間なるメッシナなどである。併し此等を瀬戸内海の現象に比すれば、優劣と強弱の點に於て、到底、比較にならぬのである。

二　鳴門海峽の奇觀



鳴門海峽（著者）

和泉砂岩から構成され、層々連續の地觀だつたのが、一朝陷落と云ふ大變動を蒙つて、茲に鳴門海峽を生じたのは、即ちこれ。遙に見ゆる淡路の南部の山々が、更に急激な凸凹なきと、眼前に横はれる裸島などの岩石が、多少の傾斜こそあれ、完全な層狀を呈して、順次積重なれるとは、共に水成岩の特徴を發揮して、亦餘蘊なき次第。內海の方面に普通な花崗岩、さては火山岩の山や、島を觀た眼で、鳴門の景色に接すれば、山水の配置や岩石の狀態に、自ら大なる差異あることが、看取し得らるゝのである。若し夫れ鳴門觀潮と出掛ける場合には、撫養港で汽船を捨て、此處から小舟で大毛島に渡れば、東宮殿下の行啓の餘澤、さては鳴門公園の經營に依り、立派な道が出來て居るから、容易に孫崎の突端に行ける。これが即ち觀潮の場所なので、眼前の裸島を隔てゝ、音響を發しながら、瀨の如く奔流し、遙に數哩の沖までも續ける、大鳴門の急潮が、眼下に見らるゝのである。加之ならず左手は內海、右手は外洋、對岸の淡路島も亦眸に映じ、鮮麗な景色が、奇にして壯なる急潮と相待つて、造化の技巧を示すと云ふ始末。

『海水が激して渦を卷くのは、海底に洞穴があつて、金輪際まで深いから』とは、鳴門海峽に對して、阿淡の一部の人々が、信じて居る所だけれど、實は否らず、其海底の狀態は、孫崎と門崎の間に、海底山脈を作り、そして此山脈の前後が、局部的に五十尋內外の深度を有するだけのことである。而も世界に類例がなく、三尺の童子も、尙これを知つて居る程の、急潮を起す所以は、全く海峽の內外に於ける、潮水の滿干の時刻が、相反するため。即ち外洋、紀伊水道が干潮の場合には、內海、播磨灘が滿潮と成り、外洋が滿潮の折には、內海が干潮となるので、僅少の距離を隔てゝ、海洋の內外に、著しい水位の差を生ずる。從つて內海が滿潮に向へば、播磨灘から外洋に急潮を注ぎ、外洋が滿潮に掛れば、紀伊水道から內海に急潮を流し、約六時二十五分間を周期として、潮流の方向の變化を、繰返へす結果である。

『鳴門よりいでてや來つるみつ潮の』と詠んだ六帖の歌、さては『爭能以我衰殘力、翻倒鳴門百尺濤』と賦した岡本黃石の詩を首め、鳴門海峽の急潮は、古來詩歌の料に供せらるゝことが頗る多々。その急潮は、和泉砂岩から成れる長大な山脈を横に割いて門崎から孫崎に至る、八鏈（約十二町）と云ふ、狹い水道を作り、其中間に、中瀨などの岩礁が點綴せる處を、出入する海水の仕業である。阿波志の左の記事は、

善く之が實況を寫せるもの。

大鳴門は阿淡の間にあり、その東岸より斗出するは淡路、行者鼻なり。西、孫崎を距る二千四百歩許、其には石瀬あり、中瀬と稱す、暗礁數百歩、波濤激すれば盤渦輪轉す、大なるは、徑數百歩あり、行舟之を畏る、颶風の將に起らんとするや、海水怒號して四方に聞ゆ。潮流去れば漁艇來集す。

鳴門の渦卷

これは葛飾北齋の筆に成つたものを縮寫したのだが「危礁橫海怒潮翻。陋岸青山勢欲奔。風力滿帆人不語。一竿落日渡鳴門。」と吟じた齋藤竹堂の詩が、却つて能くその實況を寫してゐるかの樣にも思はるゝ。

潮流の速度は、一時間、八九浬だけれど、春秋の大潮の場合、最も強くなる折は、十數浬に達する狀勢、海峽の中央附近、幅二鏈の間は、速度こそ早けれ、水面は比較的、平滑であるが、其左右に接する部分には、湍潮を起し、且渦流を作るので、此渦流が卽ち鳴門

の呼物、抽象的に之を敍述したものは、數も限りもない位だが、具體的に言說したものに至つては、蓋し本多理學博士を以て、第一に推さねばなるまい。博士の言說の概要は、實に左の如くである。

渦は左右とも、流れの反對に廻る。大さ直徑、七八間、その表面、漏斗形の如し。之は常に一定の場所に生ずるも、一旦、生ずれば順次、下流に進み、勢を減じて消え、更に又新しく生ず。時には數個、行列することあり。

更に博士が、潮流の變化に就て、觀察を遂げた結果は、左の通り。

北より南に流るゝ潮が、順次、衰れば、小鳴門は流れを見ざるに至り、大鳴門のみ流る。此時、外洋の水は、海峽の東岸に近く、小鳴門の附近に押寄せ、此處にて南流の衰ふるを待ち、大鳴門の潮流、衰ふるや否や、外側にて待受くる潮は、先づ小鳴門より浸入し始め、順次、勢を加へて、遂に大鳴門の南流に勝ち、海峽の全幅に擴大す。從つて、內外の潮水、平均したる瞬間にて、流れの方向を變ずる折と雖も、全然、潮流の靜止は、殆んどなし。潮流の南から北に替る場合も亦然り。

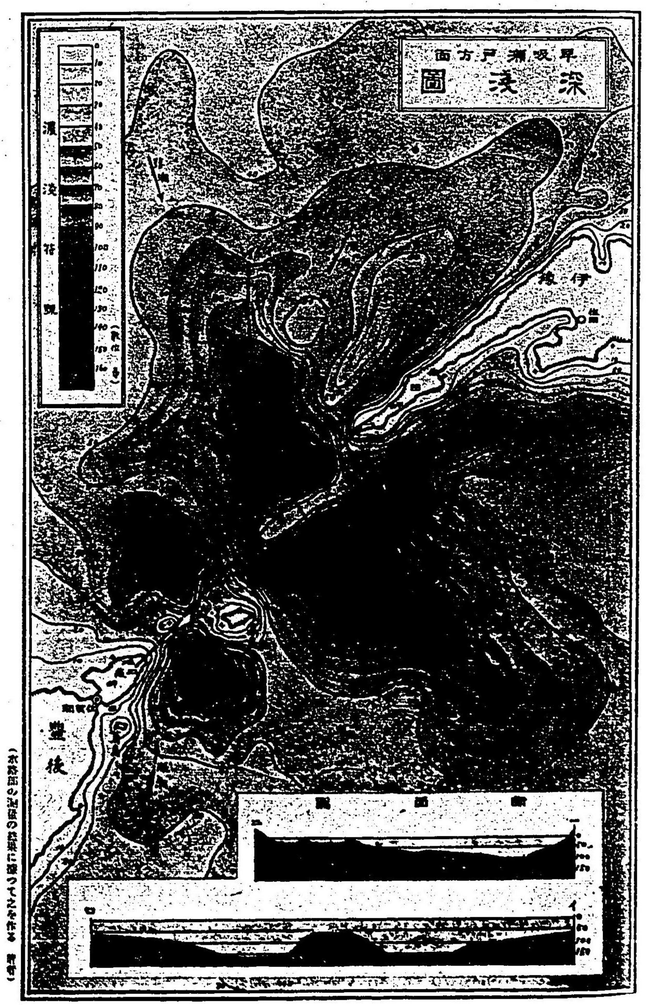
潮流の變る時を見計らつて、海峽を通過すれば、數千噸の艦船でも、左程の困難なく、之を拔け得るのである。故に內海の防衛上、此處が要塞地帶と成つて居るのは、當然。さり乍ら、一旦、急潮と成れば、殷々轟々、絕へ間もなく大きな音響を發して、物凄いので、到底、之を乘起(ノリコ)へる譯に行かぬ。併し小さい漁船などは、巧に急潮を利

用し、且之を避けつゝ、矢を射る樣な勢で通過する。此場合、誤つて渦中に卷込まれると、容易に出ることが出來ぬ、のみならず、船は渦流の爲に回轉する始末、こゝでは後撰集の『鳴門よりさしいだされし舟よりも、われぞよるべもなき心地せし』を思ひ起さゝるを得ない。但、渦流に卷込まれても、左程の危險はないのである。兎に角、これに乘れば、保津川下りはさて措き、富士川下りに比するも、其壯快なことは、到底、比較にならぬのである。

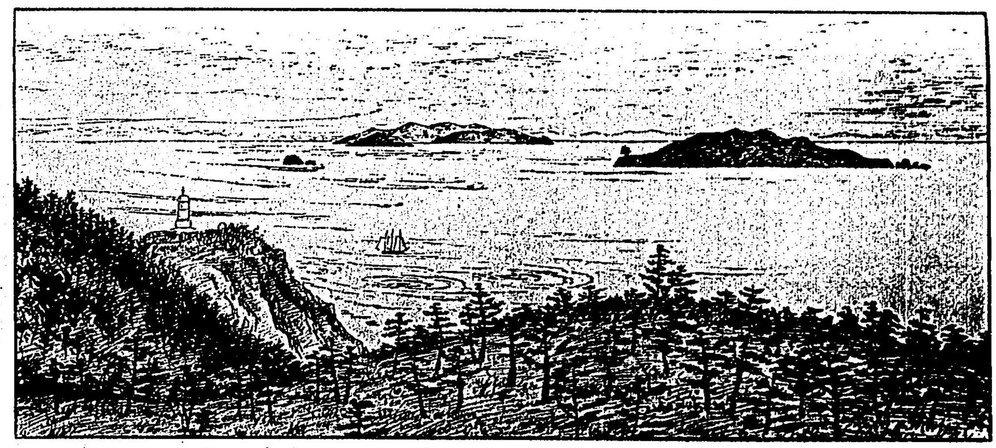
三　早吸瀬戸の壯觀

神武天皇の東征に際して、舟師の通過せられたりし早吸瀬戸は、豐後海峽と呼び、甚しきに至つては、豐後水道と混同して居るものがあるけれど、此瀬戸は、云ふ迄もなく、瀬戸内海と豐後水道を通ぜるもの、故に、何處までも明亮な、そして歴史的に奥床しく、且名實が相叶へる、早吸の名を捨てぬ樣にしたいと思ふ。

佐賀關半島と佐田岬半島は、四國から九州に連れる、結晶片岩の山脈の一部が陷落して、早吸瀬戸を作る際、辛くも其危難を免れ得た殘趾なので、佐田岬半島の如き幅の狹い處は、僅に十町を出ないものが、針狀を作つて突出せること十里强、而も都合よく、佐賀關半島と相互應呼して、内海の西端の南口を扼せるのみなら



（水路部の測量の結果に據つて之を作る　著者）



早吸瀬戸（著者）

佐賀關半島の極る所、地藏崎（鯛崎）の岬頭に立ち、東北東に向つて早吸瀬戸を伏瞰し、且遥に對岸の佐田岬を望む彼越は卽ちこれ。左に近く見へるのは地藏岬の燈臺。その向ふに鞆を浮べてある樣なのが牛島。これと並んで右に頑張れるが高島。而して正面に迫り、島嶼の如き感あらしむるものは、勿論佐田岬であるが、潮流の急激な工合と所々に渦卷を描いて居る狀態は、特に注目せねばならぬ。偖この岬の右方に緊密な曳けるが伊豫の宇和地方、左側に青山を抹せるが周防の大島方面である。尙此等の外、北を眺むれば姫島と國東半島が恰も珠璣を擁する大虬の樣を爲し、南を望めば四出極りなき岡側の海岸に抱かれて直に平太洋に展開せる豐後水道が眸に入る譯。さればその山水の壯大と風光の絶佳なことは、到底、筆紙に盡し難いが、若しも之を科學的に觀察すれば、實に名狀する、との出來ない感興が、湧からざるを得ぬであらう。

ず、中間に高島をさえ存置せるは、地層の走向が然らしめたものには相違なけれど、之が爲に內海をして眞の內海たらしめ、且國防上、誠に適當な海陸の配置を作つて居るのは、內海が、遺憾なく造化の寵愛を受けて居る、結果に非ずして何ぞ。

潮戸

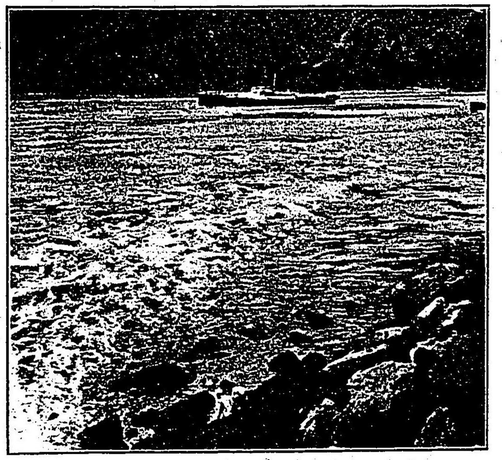
從つて、內海の防備を一層、鞏固ならしむるため、由良海峽などと同樣、此處に砲臺を築かるゝの日あるべきは、必然の次第と思ふが、兎れにしても、軍事上、早吸瀨戸乃至高島の價値が大なることは、疑ひのない話。されば天慶の初年(九三八年乃至九四一年)藤原純友が、海賊を集め商船を劫して、其貨物を掠むる際、この瀨戸の地藏崎(關崎)に、始

地藏崎(關崎)と其燈臺(早吸瀨戸)

伊豫港から豐後水道に出る口が、名に高い早吸瀨戸。通航の經驗が針路を轉ずべき所である上に、潮流は急激、暗礁は尠多。其燈塔が危險の防止に大なる効果のあることは、想像するに難からぬ。鐵造、白色、圓形で二個年の繼續工事を以て、明治廿八年七月から、第三等回轉白色の燈火を點じて居る。光達距離廿一浬。

瀨戸に特有な急潮

めて關司が設けられて、船舶の往來を監したとは、左もあるべき事柄。



早鞆瀨戸の急潮(關門海峽)

潮流の急激なること物凄い程。此瀨戸が昔は地續きで、本州と九州の間には、早に陸道の樣な、所謂、穴門があつた許り。神功皇后が三韓を征伐さるる折に、之を切り分けたとの說を唱へるものも尠からぬ。此海峽が征韓の際に開鑿されたのでない證據は、神武天皇の舟師が、豐前(宇佐)から筑前(岡田宮)に移り、更に引返へして安芸(埃宮)に轉進されたでないか。それから、神功皇后時代の人文技術は、未だ斯る大工事を成し得る程に進んで居なかつた。否々、今日とても容易に出來る業でない。實地に就て其山や崖の有樣を見ても、開鑿したらしい證跡は少しも認められぬ。有史以前の地質時代に、本州と九州と連續して居たので、自然に陷落して此海峽を生じたのが事實であらねばなるまい。穴門の呼唱の如きは、早に穴の樣な海門である所から出たのであらう。つぎに又中の洲の末端に突起せる羽根岩は、豐太閤が築港の見込で投石したもの、と云ふけれど、これも矢張り天然の岩礁の堅い部分が、海水の浸蝕に堪へて、殘存せる譯。

早吸瀨戸は其名の示す通り、潮流が太だ急、太平洋から漲潮が來て北に流れ、此處を經由して內海に入り、落潮が之に反するとして、佐田岬と高島の間では、其速